



令和5年度指定

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム

構築支援事業

個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業

研究報告書・第2年次(令和6年度)

構想名

「信州IBLプロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へ繋げる学びのネットワーク



令和7年3月

長野県教育委員会



目 次

目次

はじめに	学びの改革支援課長 臼井 学	2
1 事業概要	1 構想計画書(概要)	4
	2 令和 6 年度事業実施計画	6
	3 令和 6 年度事業完了報告書	18
	4 成果概念図	31
2 実施報告	1 オンデマンド配信による学習機会の創出	33
	2 オンライン授業による学習機会の創出	37
	3 信州WWLグローバル講座の取組	45
	4 ALネットワーク拡充に向けた連携交渉の取組	53
	5 事業アンケート	56
3 運営指導委員会 検証会議の記録	1 令和 6 年度事業関係委員名簿	64
	2 第 1 回運営指導委員会議事録	65
	3 第 2 回運営指導委員会議事録	77
	4 検証会議議事録	88

令和6年度WWLコンソーシアム構築支援事業（個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業）研究開発報告書に寄せて

学びの改革支援課長 臼井 学

将来、世界で活躍できるイノベーティブなグローバルリーダーを育成するため、本県では、令和2年度から拠点校を中心に、先進的なカリキュラム開発と県内の高校につなげるALネットワークの構築に取り組んできました。

これらの成果を県内の高校へ広く普及するため、昨年度より協働機関及び関係高等学校の協力のもと、本事業研究に取り組んでいます。

本事業は、県内の希望するすべての高校生が、在籍する学校の地理的条件や学校規模、開講科目等の制約を受けることなく、多様な学びを享受できる体制をつくることを目的としています。本書は3年間指定の2年目の取組の報告です。

本県では、「第4次長野県教育振興基本計画」において、学校教育が目指す姿として、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実による「個人と社会のウェルビーイングの実現～一人ひとりの『好き』や『楽しい』、『なぜ』をとことん追求できる『探究県』長野の学び～」を掲げています。

この目指す姿を実現するための政策の一つに、「一人の子どもも取り残されない『多様性を包み込む』学びの環境をつくる」を掲げています。本事業の趣旨は、「県内各校で実践されている先進的なカリキュラムをデジタルの力を活用し、自校以外の生徒にも幅広く提供する仕組みの構築」です。

これは、コロナ禍を経て加速した学校のICT環境を活用し、広い長野県内のすべての高校生が希望する学びの機会を等しく享受できる「学びのプラットフォーム」の構築であり、「一人の子どもも取り残されない『多様性を包み込む』学びの環境」をつくることにつながるものと期待しています。

本県では「学びの改革」として、「新たな学び」と「新たな高校づくり」にも取り組んでいます。本事業がこの「新たな学び」の核となる「探究的な学び」を牽引し、生徒の主体的・対話的で深い学びを実現する先進的な取組として、充実発展していくことを期待します。

末筆になりましたが、本年度も事業推進にあたり、各分野の第一線で活躍されている運営指導委員、カリキュラムアドバイザー、検証委員の皆さまから、卓越した専門性と幅広い知見からのご指導・ご助言をいただきました。心より感謝申し上げますとともに、引き続きご指導くださいますようお願い申し上げます。

1 事業概要



学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会

【別紙様式 2-1】

期間	ふりがな	ながのけんきょういくいいんかい	都道府県名
令和5年度 ～ 令和7年度	実施機関	長野県教育委員会	長野県
	ふりがな	ながのけんうえだこうとうがっこう	20
	提供校	長野県上田高等学校	
	ふりがな	ながのけんまつもとあがたがおかこうとうがっこう	
	提供校	長野県松本県ヶ丘高等学校	
	ふりがな	ながのけんのざわきたこうとうがっこう	
	提供校	長野県野沢北高等学校	
	ふりがな	ながのけんいなきたこうとうがっこう	
	提供校	長野県伊那北高等学校	
	ふりがな	ながのけんそなんこうとうがっこう	
	提供校	長野県蘇南高等学校	

令和6年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 構想計画書（概要）

構想名（30字程度）

「信州IBLプロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へ繋げる学びのネットワーク

構想概要（400字以内）

Society5.0に向けた社会の大きな変動と、予測不可能な時代の到来を見据え、本県では平成29年3月に策定した「学びの改革基本構想」の中で、次代を担う子どもたちに必要な資質・能力を「新たな社会を創造する力」と謳い、以来、この力を育成するため、全県立高校の授業に「探究的な学び」を取り入れた学びの改革を進めている。

そのような中、令和2年度から取り組んでいるWWLコンソーシアム構築支援事業において、信州版ALネットワークを形成し、イノベティブなグローバル人材を育成する新たなカリキュラムを開発してきた。

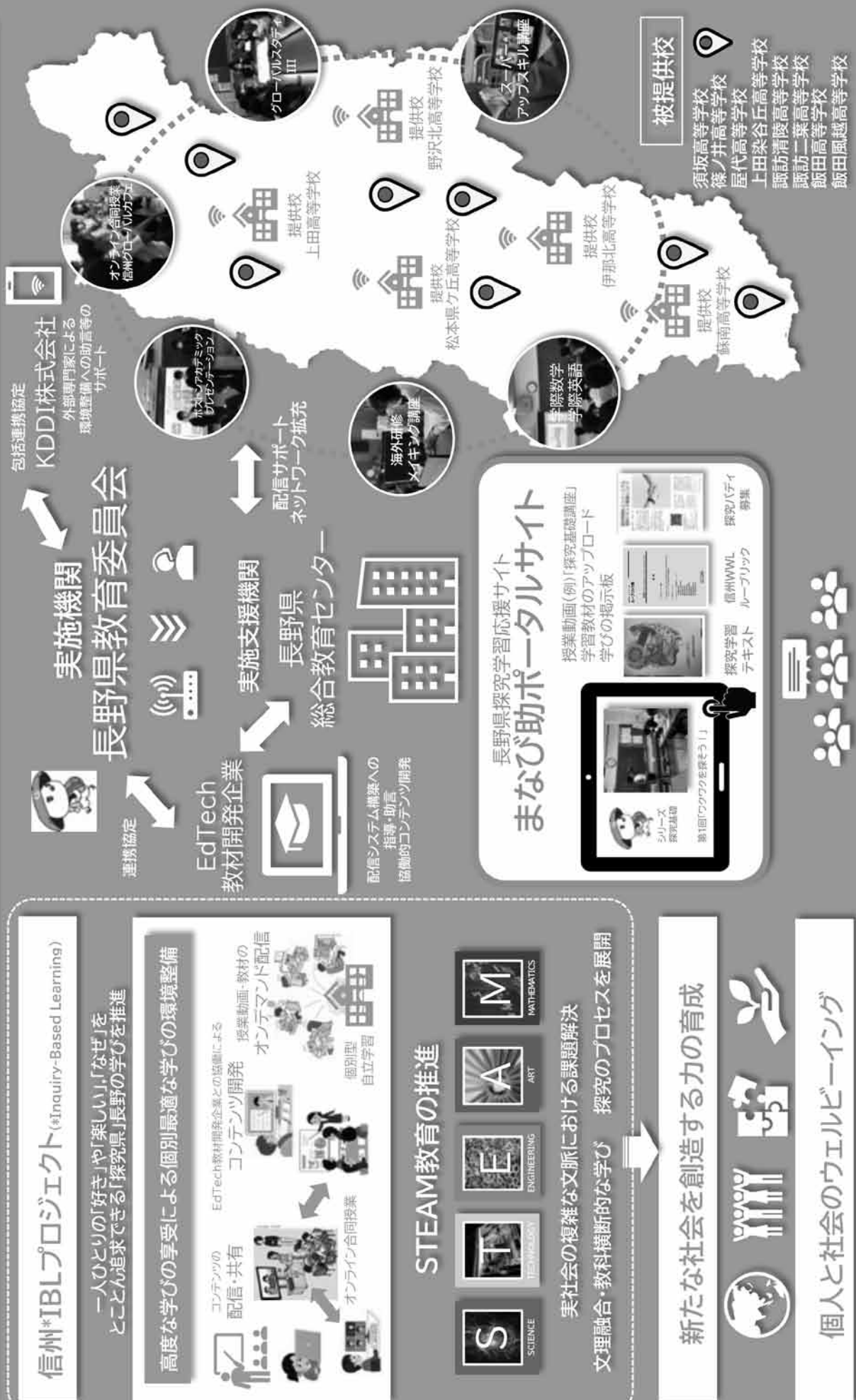
高校生がこのカリキュラムを、広く享受できる配信システムを整備し、個別最適な学びの環境を構築する本事業を「信州IBLプロジェクト」として推進することで、学びの改革を一気に加速させる。そして、学びの充実による「新たな社会を創造する力」の育成を通じて、第4次長野県教育振興基本計画に掲げる「個人と社会のウェルビーイングの実現」を目指す。

研究開発・実施体制

研究方法※複数選択可	☒ ①オンデマンド配信による学習機会の創出 ☒ ②オンライン授業による学習機会の創出 ☐ ③大学教育の先取り履修に資するコンテンツによる学びの提供		
実施機関	長野県教育委員会		
提供校	学校名	長野県上田高等学校	公立
	本県のWWLカリキュラム拠点校。令和2年～令和5年の研究期間において1年次のグローバルスタディⅠ、2年次のグローバルスタディⅡで実施した課題研究を3年次、キャリアに応じてさらに深化させる学びを実践。北陸信越地区の高校を招き、生徒が設定したテーマに対する課題解決のアクションプランを考案し、日本語と英語で発信するとともに、グローバル課題について議論する北陸新幹線サミットを開催。		
	学校名	長野県松本県ヶ丘高等学校	公立
	探究科を有し、教員が生徒集団を引率する従前のスタイルを改め、令和4年度から、生徒個人が、教員のフォローを受けながら、自分の探究テーマに沿って海外での研修内容を組み立てる「個別最適な海外研修」を実施。		
	学校名	長野県野沢北高等学校	公立
	長野県来の学校研究事業における「スーパー探究校」。令和4年度から本格化した、佐久エリアコンソーシアム（大学・医療機関・地元企業・自治体・研究機関）と、学校をつなぐ連携コーディネーターを配置。企業や大学と学校をつなぐ役割を果たす。地元のベンチャー企業と連携し、健康寿命の増進をテーマに、地域に根差した探究学習を通して、医療健康先進地域の未来を共創するための学びを実践。		
	学校名	長野県伊那北高等学校	公立
	県下でいち早く導入した理数科から開始された探究的な学びとキャリア教育の充実を図る。令和5年度から、理数科に加えて幅広い2・3年生で普通科に「文系コース」「理系コース」「学際コース」の3コース制を新たに導入し、広い教養、深い学びを実践し、個別最適な学びを推進。		
	学校名	長野県蘇南高等学校	公立
	キャリア教育や探究学習を基盤に生徒の進路実現を支援。総合学科を有し「文理系列」「経営ビジネス系列」「モノづくり系列」の選択科目に加え、ICTの積極的に活用し、タブレットを利用した生徒と教師の双方向での学習を推進。		

※行数は適宜調整すること

「信州IBLプロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へ繋げる学びのネットワーク



様式第1 (事業計画書)

事業計画書

令和6年2月1日

支出負担行為担当官

文部科学省初等中等教育局長 殿

(実施機関名) 住 所 長野県長野市南長野幅下 692-2
 名称及び 長野県教育委員会
 代表者名 教育長 内堀 繁利

I 委託事業の内容

1. 事業名

WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業
 (個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業)

2. 事業の目的

Society5.0に向けた社会の大きな変動と、予測不可能な時代の到来を見据え、本県では平成29年3月に「学びの改革基本構想」を策定し、次代を担う子どもたちに必要な資質・能力を「新たな社会を創造する力」と謳い、この力を育成するため全県立高校の授業に「探究的な学び」を取り入れた学びの改革を進めている。

そんな中、令和2年度から取り組んでいるWWLコンソーシアム構築支援事業において、信州版ALネットワークを形成し、イノベーティブなグローバル人材を育成する新たなカリキュラムを開発してきた。

このカリキュラムを、オンラインを活用して希望する高校生が享受できる配信システムを整備し、個別最適な学びの環境を構築する本事業を「信州＊IBLプロジェクト」(＊IBL＝Inquiry-Based Learning)として推進することにより、学びの改革を一気に加速させるとともに、すべての高校生が「探究的な学び」を深化・充実させることで、「新たな社会を創造する力」の育成と個人と社会のウェルビーイングに繋げていく。

令和6年度については、以下の提供校・被提供校を中心に、事業を展開・推進していく。

○提供校(5校)

上田高校、松本県ヶ丘高校、野沢北高校、伊那北高校、蘇南高校

○被提供校(9校)

須坂高校、屋代高校、篠ノ井高校、上田染谷丘高校、諏訪清陵高校、諏訪二葉高校、飯田高校、飯田風越高校、伊那弥生ヶ丘高校

3. 調査研究の方法

- ①オンデマンド配信による学習機会の創出
- ②オンライン授業による学習機会の創出
- ③大学教育の先取り履修に資するコンテンツによる学びの提供

4. 事業の実施期間 委託を受けた日から 令和7年3月31日

5. 事業の方法

令和6年度の事業計画

(1) デジタルコンテンツを一元的に共有できる経済的で汎用的なシステムの充実

ア 「まなび助 ポータルサイト」の本格運用に向けた取組

(ア) 「まなび助 ポータルサイト」の全県的周知

現在 AL ネットワーク内に限定している「まなび助 ポータルサイト」の公開範囲について、県内の全県立高校へと拡大することにより、デジタルコンテンツを教員及び生徒が広く共有し、活用できる体制を構築する。そのため、校長会や副校長・教頭会等における管理職はもとより、統合型校務支援システム等を通して全県の教員に対し、「まなび助 ポータルサイト」について幅広く周知に努めていく。

(イ) サイトの活用促進・充実に向けた取組

「まなび助 ポータルサイト」の使い勝手や掲載しているコンテンツ・情報等の有用性等について、教員・生徒対象のアンケート等を実施し、その結果分析を踏まえ、ポータルサイトのブラッシュアップを図るとともに、恒常的・積極的な活用を促進する。

(ウ) 連携機関との協働体制の確立

「まなび助 ポータルサイト」について、連携協定を締結している KDDI 株式会社等から、効果的な運用に向けた技術的なノウハウ等、必要な指導・助言を受ける。

イ サイトの管理・運営に向けた取組

(ア) 関係機関への確認・調整等

デジタルコンテンツの作成及びアップロードに当たっては、肖像権・著作権等に抵触しないよう、引き続き関係機関等への事前確認を行うとともに、必要な対策を講じていく。

(イ) 連携機関等による支援

実施機関が、前掲の KDDI 株式会社等から随時助言を受け、実施支援機関である総合教育センターと協働して、サイトの管理・運営を担う体制を確立する。並行して、長期的な視野に立ったサイトの効果的・具体的な管理・運営方法についても、連携機関等からの助言を受けながら、将来的な自走に繋げていくよう研究を継続する。

(2) 「生徒が主体的に観たくなる」・「教員が主体的に作成したくなる」という両者を実現し、個別最適な学びに資するデジタルコンテンツのオンデマンド配信

ア コンテンツの作成に向けた体制の構築

(ア) 提供校との事前打合せ

令和5年度に引き続き、実施機関担当者が、年度当初に各提供校へ個別訪問等を実施し、校長・教頭及び事業担当者と事前の打合せを行う。その際、今年度コンテンツ化が可能な授業・講座について協議する。

(イ) 被提供校等への調査

(ア)と並行して、被提供校をはじめとする学校現場へのアンケート等を実施し、1年生に対する探究学習基礎スキルの育成等、活用が見込まれるコンテンツの内容について把握する。

(ウ) 事業担当者会における調整・決定

提供校5校による事業担当者会を実施し、(ア)と(イ)の内容を踏まえ、作成するコンテンツについて調整の上、決定する。

(エ) コンテンツの作成と改善

提供校各校で作成したコンテンツについては、実施機関が、被提供校の生徒に視聴を依頼の上、感想や要望等についてアンケートを通して集約し、その結果分析を提供校へフィードバックする。提供校はフィードバックの内容を踏まえ、コンテンツのブラッシュアップに繋げていく。

(オ) 幅広いコンテンツの収集

実施機関が、提供校のみならず、県内高校へも広範に呼びかけ、各校で創意工夫を凝らしながら実践している文理横断的、教科等横断的な授業等について、絶えず情報を集め、コンテンツ化に繋げていく。あわせて、学校が既に作成済みのコンテンツについては提供を依頼し、収集に努める。それにより、生徒が学校規模による開講講座の多寡や地理的条件等、外的環境の制約を受けることなく、多様な興味・関心に応じ、個別最適な学びを実現できる環境を整えていく。並行して、実施機関においても、学校現場のニーズを踏まえた多様なコンテンツの作成に引き続き努めていく。

(カ) 教員対象研修会の実施

連携協定を締結し、コンテンツ開発アドバイザーを依頼しているEdTech教材開発企業Inspire Highによる、教員対象の研修会を開催する。その際、実施機関で試行的に作成したコンテンツなど、具体的な事例をもとに、「生徒が主体的に観たくなる」・「教員が主体的に作成したくなる」コンテンツの作成について指導・助言を受ける。

(キ) コンテンツの作成・更新に係る支援

教員が実際にコンテンツを作成する際、必要に応じてコンテンツ開発アドバイザー等の専門家による指導・助言を受けられる体制の構築に引き続き努める。あわせて、歴史に関わる授業において、文化遺産が醸し出す荘厳な雰囲気やスケールを、

生徒が視覚情報を通して体感できる立体的撮影に必要な機材等、リアリティを伴う体験による学習効果をもたらす動画について、提供校が持続的に作成できるよう、実施機関が計画的に整備していく。また、学校現場のニーズに応じ、コンテンツを遅滞なく更新する方法についても継続して研究する。

イ コンテンツの質的改善に向けた取組

(ア) 大学との連携

県内の大学に協力を仰ぎ、作成・収集したコンテンツについて、大学生に視聴を依頼し、アンケート等による意見・感想等の集約・分析を通して改善を図る。

(イ) 生徒・教員へのアンケート活用

被提供校を中心に、コンテンツを実際に活用した生徒・教員へのアンケートをグループフォーム等により実施し、結果を実施機関が集約の上、改善に向けた建設的な意見・提案等必要な情報について提供校へフィードバックを行う。

(ウ) 連携企業等による支援

アンケート等によりフィードバックされた内容について、提供校がコンテンツのブラッシュアップに繋がられるようにするため、コンテンツ開発アドバイザー等、専門家による指導・助言を必要に応じて受けることができる体制の構築に引き続き努め、コンテンツの質的改善・向上を通して生徒の個別最適な学びの実現を図る。

(3) 多様な他者との協働的な学びを通して、深い学びの実現に繋がるオンラインを活用した同時双方向型合同授業の実施

ア オンラインによる合同授業の実施に向けた事前準備

(ア) 実施する講座・科目等の確認・調整

探究学習に関する基礎的スキル養成講座や、応用的・発展的内容の講座等、提供校が今年度実際に行うオンライン合同授業の講座・科目等について確認・調整を行う。

(イ) 実施対象となる被提供校の決定

前述した(2)ア(イ)の調査も踏まえながら、提供校がオンライン合同授業を行う被提供校についてマッチングを行い、対象校を決定する。マッチングについては実施機関が必要に応じて仲介し支援する。

(ウ) 実施日時等の調整

オンライン合同授業の実施日時について、提供校・被提供校間における調整を行う。実施機関は、必要に応じて調整に係る支援を行うとともに、カリキュラムアドバイザーへ助言を依頼する。

(エ) 円滑な実施に向けた試行

オンライン合同授業が円滑に実施できるよう、実施機関が実施支援機関である総合教育センター等と協働して事前のテスト送信を行い、配信側・受信側双方における効果的な機材の配置や人的支援の在り方等について引き続き研究する。その結果

得られた課題については、KDDI 等、連携先からの指導・助言を踏まえ、改善に努めることで円滑なオンライン合同授業の実施に繋げる。

(オ) 実施に向けた人的支援等

オンライン合同授業の実施に当たっては、以下の人的支援を行う。

① オンライン授業補助員

県内の情報系学部や教育学部等で遠隔授業等に係る調査・研究を行っている大学生に、機材の効果的な配置及び操作方法や、ファシリテーター役を依頼するなど、各校の実情を踏まえつつ、円滑な授業の実施に向けた必要な支援を講じていく。

② 学習支援員

本事業の調査研究にあたり認められた特例を生かし、被提供校等オンライン合同授業の受信校に必要な応じて配置する。経費については本県で実施している「カリキュラム編成支援事業」から拠出する。

③ 探究サポーター

探究サポーターについて、AL ネットワーク校の卒業生を中心に協力を仰ぎつつ、引き続き募集を行う。あわせて、認定 NPO 法人カタリバなど、必要に応じて外部団体の社会人へも依頼し、支援体制の確立に努める。探究サポーターは、ピア・メンターの立場から高校生に寄り添い、探究学習を進める上での様々な課題について、随時オンライン等による相談・助言を行う。

(カ) 県外視察によるオンライン授業改善の推進

より効果的なオンライン合同授業の実践に資するため、令和 5 年度の北海道行に引き続き、他都道府県における先進的な取組について実施機関・実施支援機関及び提供校の事業担当者による視察を行う。視察後は、昨年度県教育委員会事務局を中心に実施した報告会を全県規模に拡充し、これまでの WWL 事業等により開発した学習プログラムを、希望する生徒がオンラインを活用して効果的に学ぶ仕組みについて理解を深め、効果的に学習できる環境整備に繋げていく。

(キ) 計画的実施に向けた取組

提供校と被提供校という枠組みに囚われすぎることなく、専門学科や総合学科など、普通科以外でも文理融合型・教科等横断型の高度かつ多様な学びを実践している高校へ実施機関から広く呼びかけ、オンライン合同授業の積極的・計画的な実施に努める。

イ オンライン合同授業の実施及び充実・改善に向けた取組

(ア) 合同授業の実施に向けた取組

① 学校現場のニーズに応じた実施内容の精選

令和 5 年度も実施した（２）ア（イ）のアンケート結果等を踏まえ、これまで AL ネットワークにおいて開発してきた文理融合型・教科等横断型の高度かつ多様な学びの中でも特に学校現場のニーズの強い次の a～d 講座等を嚆矢にオンライ

ン合同授業を実施していく。

- a 探究学習初期指導における基礎スキル養成講座（1年生対象）
- b 教員の学校間連携による教科等横断型講座（英語×生物等）
- c テーマ別発展探究講座（希望者対象 学年不問）
- d グローバルアカデミック講座（3年生希望者対象）

※上記 ab はクラス・講座を単位として、cd は希望する生徒個人を単位とし、学校の枠を超えて行う。

オンライン合同授業の実施にあたっては、グループワークや生徒による相互発表等、スムーズかつ効果的な実施に向け、必要な機材などの環境整備に努めていく。

② 授業配信校と受信校のマッチング支援

オンライン合同授業にあたっては、当該校同士による主体的・自主的な実施を促しつつ、配信校・受信校については、実施機関が必要に応じて両者の仲介を支援し、広範な実施に努める。

③ 学習集団としての人間関係づくり

授業当日の協働的な学びを遅滞なく進めるため、提供校（配信校）及び被提供校（受信校）の生徒同士が、可能な限り事前の人間関係構築を図る。その際、オンライン授業当日に補助員を担う大学生や探究サポーター等へファシリテーターを依頼するなど、工夫を凝らすことによって生徒間の交流を深め、円滑な合同授業の実施に繋げる。

④ 協働的な学びの充実による学習意欲の相互喚起

提供校（配信校）及び被提供校（受信校）の生徒は、各教科等で習得した知識を生かしながら設定した課題について、お互いが多様な他者としてディスカッションやスライド作成、プレゼンテーション等、ICT を効果的に活用した協働的な学びを実践することで、学習意欲を喚起し合い、探究のサイクルを主体的・発展的に繰り返そうとする姿勢を身に付ける。

（イ） オンライン合同授業の改善に向けた取組

- ① 実施機関が、オンライン合同授業後の生徒向けアンケートや振り返りシート等を活用した授業評価を取り纏め、必要な情報について提供校へフィードバックを行い、授業の改善を図る。
- ② オンライン合同授業を実施した際、配信校と受信校の教員同士によるふり返しを行う。実践した授業の成果や課題等に係る意見交換を通して、より効果的なオンラインの活用による学びの充実を図る。
- ③ さらに、上記②を拡充し、オンライン合同授業を実施した教員が一堂に会する実践報告会を行う。実施にあたっては、提供校・被提供校のみならず、広く県内高校教員の参加を促し、オンライン合同授業について、学習効果を高める具体的な方法等の理解を深めるとともに、積極的な実施を促す機会とする。その際、カリキュラムアドバイザーを招聘し、指導・助言を受けることにより、生徒の豊かな学びに資する授業実践に繋げていく。

(ウ) 学習評価の研究

① 評価方法の検証

オンライン合同授業を行う提供校（配信校）の担当教員が、被提供校（受信校）の教員と協力し、生徒の学習評価について研究を進める。その際、授業における行動観察やポートフォリオの活用等、オンラインにおいても妥当な形成的評価や総括的評価の方法について検証する。

前掲の高校生国際会議を生徒主体の企画・運営とし、伴走的役割を担う教員による参加生徒を対象とした形成的評価をオンラインで実施することで、効果的な評価の研究に資する。

評価にあたっては、実施機関の指導主事・実施支援機関の専門主事が必要に応じて指導・助言を行う。

② 単位認定に向けた取組

被提供校（受信校）生徒がカリキュラム内におけるオンライン合同授業で履修した科目の単位認定に向けて、①の検証を踏まえた効果的・効率的な評価方法について研究を進める。

③ 大学との連携

オンラインを活用した大学の単位先取り履修の取組をさらに推進するとともに、オンライン合同授業における学習評価の在り方について、大学とも連携して研究していく。

(エ) グローバルな学びの推進

海外の高校や大学等と連携して作成したデジタルコンテンツについて、学校外の学修による単位認定制度の積極的な活用を促しつつ、AL ネットワークをはじめ、県内高校間で広く共有し、オンラインを活用したグローバルな学びを推進することで、イノベティブなグローバル人材の育成を図る。

(4) 提供校・被提供校のネットワーク拡充及び組織の効果的な運営に向けた取組

多様な ICT 機器を駆使した教員間ネットワークの構築・拡充

ア 教員間の「ヨコの関係」の構築

提供校・被提供校を中心とする教員間のネットワークを広く県内に構築していく。そのために、実施機関がグーグルを用いて立ち上げたグループチャットや、前掲の「まなび助 ポータルサイト」等の活用を促し、教員同士の恒常的な情報共有・意見交換の場としていく。それにより、実施機関と各校教員という「タテの関係」にとどまらず、教員同士が不断に意思疎通できる「ヨコの関係」の構築を図る。

イ ネットワークの拡充に向けた取組

(ア) 実施機関による学校への積極的な働きかけ

さらなるネットワークの拡充を図り、本事業における取組を全県へ広く展開していく。そのため、AL ネットワーク校だけでなく、校長会や副校長・教頭会、管理職向け

の研修会、運営指導委員会等、様々な機会を捉えて事業の実施内容や進捗状況等について適宜情報発信・情報共有を行う。さらに、専門学科を含め、先進的・高度な学びを積極的に進めている学校を中心に、実施機関が各校への個別訪問などを計画的に実施し、管理職や職員集団へ働きかけて提供校（配信校）への積極的な参加を促す。

（イ） 成果報告会の実施

① 「高校生国際会議」（中間報告会）

WWL コンソーシアム構築支援事業3年目の令和4年度に行った「信州 WWL 高校生国際会議」を発展的に継承していく。開催にあたっては、教員の負担軽減と生徒の主体性・協働性涵養の観点から、AL ネットワーク校を中心に生徒実行委員会を組織し、県内から広く希望生徒を募り、企画・運営主体として行うなど、将来的な自走を踏まえ、持続可能な実施方法について研究を進める。

この国際会議については、オンラインを活用しつつ、学校の枠や国境を超えた、生徒同士によるグローバルな学びの機会と捉え、県内外の高校生はもとより、県内の高校に通う留学生、海外高校生等に広く参加を呼び掛ける。あわせて、ALT や県内教職員にも協力を依頼し、英語によるディスカッションやプレゼンテーション等を行うことで、参加者同士の円滑なコミュニケーションを促し、学びの深化・充実に繋げていく。また、本県における体系的な「グローバルな学び」の集大成とする観点から、実施に際しては令和4年度の「信州 WWL 国際会議」に係る以下の趣旨を踏まえつつ、内容のブラッシュアップを図る。

- (1) 信州 WWL コンソーシアムのテーマ「SDGs 未来都市長野から世界へつながる」に則り、グローバルな社会課題、持続可能な開発をベースに国内外の高校生とともに問題解決に向けて議論する場とする。
- (2) 国や地域を超えた共通の社会問題についての認識を深め、グローバルな課題について分析・解決する能力を涵養する。
- (3) グローバル社会を担う世代の中心となる世界各地の高校生が、グローバルな課題の解決策をイノベーティブな視点から構想する過程で、自身の行動や価値観を見直し、将来的な協働につながるネットワークを構築する。

② 「信州 IBL カンファレンス」（成果報告会）

SSH や専門学科（工業・農業・商業）における課題研究等、県内各校において、様々な特色ある高度な学びに取り組む生徒・教員が一堂に会し、探究学習の研究発表及び質疑応答、多様なテーマに係るディスカッション等を通して互いに学び合う本課主催の「探Qフェスティバル」と合同で、オンラインを活用した学びの成果報告会（「信州 IBL カンファレンス」）を開催する。（令和5年度は「信州グローバルカフェ」として実施。）

信州 IBL カンファレンスでは、提供校・被提供校の生徒を中心に、デジタルコンテンツを効果的に活用した「個別最適な学び」や、オンラインによる同時双方向型合同授業により体现した「協働的な学び」の好事例等について、高校関係者のみならず、中学校の生徒・教員、保護者など、探Qフェスティバル参加者も含めて広く成果報告

を行い、オンラインを活用した STEAM 教育がもたらす「学びの連鎖」を全県に波及していく。

ウ 組織の効果的な運営

(ア) オンラインを活用したコミュニケーションの促進

実施機関が中心となって、事業担当者会等、参集のみならず、Zoom 等のオンラインを活用した情報共有や意見交換を行う機会を増やすことで、相互の緊密なコミュニケーションを図る。

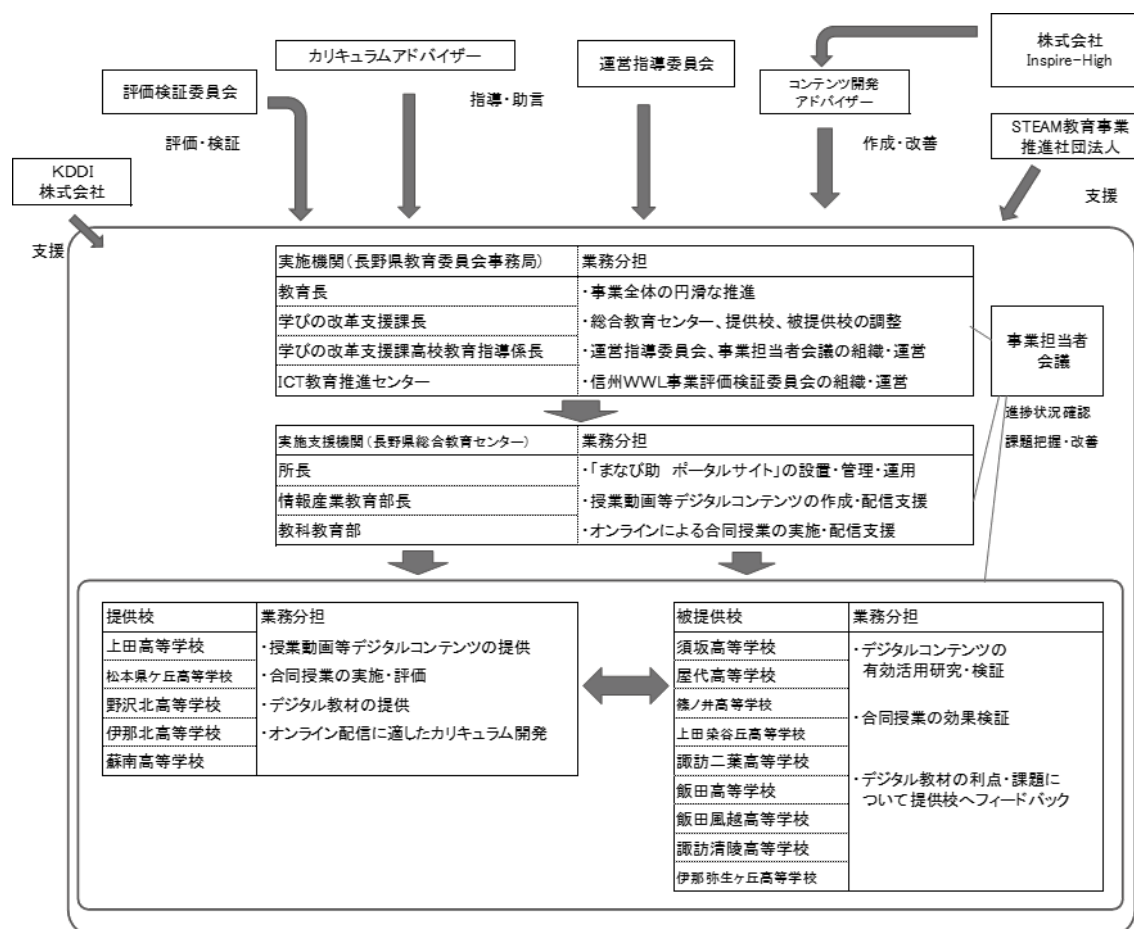
(イ) 事務職員の配置

実施機関に外部対応・庶務等を担当する非常勤職員を必要に応じて配置し、円滑な事業運営に繋げる。

(ウ) 学校訪問等による指導・助言

実施機関担当主事による提供校・被提供校への電話相談やオンラインによる協議、学校訪問等を適宜実施し、適切な指導・助言を行う。

6. 業務実施体制（体制図の添付必須）



1 事業概要

業 務 項 目	実 施 場 所	担 当 責 任 者
提供する科目・講座の調整	学び・提供校	高野芙美・提供校担当者
デジタルコンテンツの研究	提供校・学び・総セ	提供校・各校担当者・高野芙美
「まなび助ポータルサイト」の運営	学び・総セ・提供校	高野芙美・岡沢啓司・齋藤俊樹・各校担当者
オンライン合同授業実施に向けた調整及び研修	学び・提供校・被提供校	高野芙美・各校担当者
提供校・被提供校間のカリキュラム調整・非常勤職員等の調整	学びの改革支援課	腰原智達・高野芙美
合同授業における評価、単位認定方法等の研究	学び・提供校・被提供校	高野芙美・各校担当者
送受信に係る I C T 環境整備	総セ・学び	岡沢啓司・齋藤俊樹
オンライン授業補助員の調整	学び・総セ	高野芙美・腰原智達
「探究サポーター制度」の研究、高大連携	学びの改革支援課	高野芙美・腰原智達
学校外の学習を活用した単位認定の研究	学び・提供校・被提供校	塚田武明・中谷幸裕・各校担当者
学習成果報告会	学び・提供校・被提供校	高野芙美・各校担当者
事業の評価検証	学び・総セ・提供校・被提供校	高野芙美・中谷幸裕・各校担当者
情報共有体制	学び・総セ・提供校・被提供校	高野芙美・岡沢啓司・各校担当者
人的配置（事務職員）	学びの改革支援課	高野芙美

1 事業概要

7. 事業項目別実施期間

※ 事業計画書作成時のものであり、事業着手は契約締結後に行うものとする。

事業項目	実施期間（契約締結日～令和7年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
提供する科目・講座の調整		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
デジタルコンテンツの研究		提供校 担当者会	→	→	提供校 担当者会	→	→	提供校 担当者会	→	→	提供校 担当者会	→
「まなび助ポータルサイト」の運営		→	→	→	研修会	→	→	→	研修会	→	→	→
オンライン合同授業実施に向けた調整・研修	事業担 当者会	→	研修会	→	事業担 当者会	→	→	研修会	→	→	事業担 当者会	→
提供校・被提供校間のカリキュラム調整・非常勤職員等の調整					→	→	→	→	→	→	→	→
合同授業における評価・単位認定方法等の研究		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
送受信に係るICT環境整備		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
オンライン授業補助員の調整（総セ・提供校・被提供校）		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
「探究サポーター制度」の研究・高大連携		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
学校外の学修を活用した単位認定の研究		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
学習成果報告会		→	国際 会議	→	→	→	→	→	成果 報告会	→	→	報告
事業の評価検証		→	運営指 導委員 会	→	→	→	→	→	アンケ ート 実施	→	運営 指導 委員会	検証 委員会
情報共有体制		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
人的配置（事務職員）											→	→

8. 再委託に関する事項

再委託無し

Ⅱ 委託事業経費 様式第 1 - 1 に記載

Ⅲ その他

1. 経理担当者（責任者及び事務担当者）

氏 名	役 職 名 (Eメールアドレス)	電話番号	FAX 番号
井出 洋文	学校企画係 主任 (kyogaku-kikaku@pref.nagano.lg.jp)	026-235-7433	026-235-7495
高野 芙美	高校教育指導係 指導主事 (kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp)	026-235-7435	026-235-7495

- (注) ・責任者は、本委託事業に係る経理責任者（必ず記入すること）
 ・事務担当者は、実際に当省委託担当課（室）との窓口となる者（必ず記入すること）

様式第4（事業完了（廃止）報告書）

事業完了（廃止）報告書

令和7年3月31日

支出負担行為担当官

文部科学省初等中等教育局長 殿

（実施機関名）	住 所	長野県長野市南長野幅下 692-2
	名称及び	長野県教育委員会
	代表者名	武田 育夫

令和6年4月1日付け令和6年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業）は、令和7年3月31日に完了（廃止）したので委託契約書第10条の規定により、下記の書類を添えて報告いたします。

記

1. 事業結果説明書（別紙イ）

2. 事業収支決算書（別紙ロ）

様式第4(別紙イ)

事業結果説明書

1. 事業の概要

(1) 事業の実施期間

令和6年4月1日(契約締結日)～ 令和7年3月31日

(2) 実施機関名

機関名：長野県教育委員会

(3) 構想の概要

構想名

「信州 IBL プロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へ繋げる学びのネットワーク

概 要：

Society5.0 に向けた社会の大きな変動と、予測不可能な時代の到来を見据え、本県では平成29年3月に策定した「学びの改革基本構想」の中で、次代を担う子どもたちに必要な資質・能力を「新たな社会を創造する力」と謳い、以来、この力を育成するため、全県立高校の授業に「探究的な学び」を取り入れた学びの改革を進めている。

そのような中、令和2年度から取り組んでいる WWL コンソーシアム構築支援事業において、信州版 AL ネットワークを形成し、イノベーティブなグローバル人材を育成する新たなカリキュラムを開発してきた。

高校生がこのカリキュラムを、広く享受できる配信システムを整備し、個別最適な学びの環境を構築する本事業を「信州 IBL プロジェクト」として推進することで、学びの改革を一気に加速させる。そして、学びの充実による「新たな社会を創造する力」の育成を通じて、第4次長野県教育振興基本計画に掲げる「個人と社会のウェルビーイングの実現」を目指す。

(4) 調査研究の方法 ※複数選択可、具体的な内容については公募要領に記載

☒ ①オンデマンド配信による学習機会の創出☒ ②オンライン授業による学習機会の創出☐ ③大学教育の先取り履修に資するコンテンツによる学びの提供

2. 事業の実績

(1) 実施日程

事業項目	実施期間（令和6年4月1日～令和7年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会				●						●		
検証会議											●	
事業担当者会（連携校会議）	●		●	●			●		●	●		
コンテンツ開発等助言		●						●		●		
事業関係校訪問指導	●	●	●					●		●	●	
学習コンテンツ制作・提供	●	●	●		●		●	●	●	●	●	●
オンライン授業実施	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	
学習コンテンツ制作・提供		●	●		●		●	●	●	●	●	
遠隔授業配信支援、指導	●	●			●			●			●	
授業メンター派遣		●	●			●		●	●		●	
連携交渉									●			
信州WWLグローバル講座			●			●	●	●	●			
成果報告会									●	●	●	
事業報告（報告書作成）									●	●	●	●

※行は適宜追加して差し支えない

(2) 実施の説明

ア デジタルコンテンツを一元的に共有できる経済的で汎用的なシステムの充実

(ア) 「まなび助 ポータルサイト」の全県的周知

現在 AL ネットワーク内に限定している「まなび助 ポータルサイト」を県内の全県立高校へと拡大した。デジタルコンテンツを教員及び生徒が広く共有し、活用できる体制を構築するため、全県校長会において周知するとともに年7回発行の本課の事業案内通信「高校通信」においても掲載、周知を行った。

(イ) ポータルサイトの活用促進・充実に向けた取組

「まなび助 ポータルサイト」の使い勝手や掲載しているコンテンツ・情報等の有用性等について、本年度当初は昨年度実施した生徒アンケートの結果に基づき、ポータルサイトのレイアウトを大幅に刷新、ポータルサイトのブラッシュアップを図った。本年度は AL ネットワーク校の教員、生徒及び実施機関関係者対象にアンケートを実施した。本年度はその結果を分析し、運営指導委員会、検証委員会で報告、助言を得るとともに、生徒の声を反映したサイトのレイアウト改善に努めた。

(ウ) 連携機関との協働体制の確立

連携協定を締結している KDDI 株式会社との協働事業による取組を学習用教材としてデジタルコンテンツ化した。また、協働機関である Inspire High が提供している「探究的な学び」の動機づけとなる動画コンテンツのリンクを掲載した。

(エ) サイトの管理・運営に向けた取組

ポータルサイト掲載用のデジタルコンテンツ作成にあたり、生徒・保護者承諾のための統一書式を実施機関にて作成し、関係高等学校へ提供した。

(オ) 連携機関等による支援

ポータルサイトについては、本年度の運営指導委員会にて進捗状況を報告するとともに、事業関係者にも公開し、掲載するコンテンツやその活用について助言を仰いだ。また、総合教育センターを通じて、他県教育委員会からポータルサイトに掲載コンテンツについて照会をいただくなど、本県の取組を県外へも発信することができた。産業教育部会、理数科教育部会とも協働し、部会 HP のリンクを掲載するなど、ポータルサイトの充実・情報ネットワークの拡大を図った。

イ 個別最適な学びに資するデジタルコンテンツのオンデマンド配信**(ア) コンテンツの作成に向けた体制の構築**

実施機関担当者が、各提供校へ個別訪問、オンラインによる打ち合わせ等を実施し、校長・教頭及び事業担当者とコンテンツ化が可能な授業・講座について協議した。

(イ) 被提供校等への調査

今年度も全県教頭会において、各学校における探究学習の実施状況等のアンケート等を実施し、教職員の指導体制や各校が抱える指導上の課題について把握した。

(ウ) 事業担当者会における調整・決定

本年度は、AL ネットワーク校連絡会と兼ねて提供校5校による事業担当者会を年6回実施し、前述の(ア)と(イ)の内容を踏まえ、各校が作成するコンテンツの状況について情報交換を行った。

(エ) コンテンツの作成と改善

本年度は全県の高校生を対象に、提供校主催による以下の講座を開講し、当日の様子を学習コンテンツとして作成しポータルサイトへ掲載した。また、今年度は「信州 WWL グローバル講座」と題し、実施機関主催によるイノベティブなグローバルリーダーの育成に資するオンライン講座を開催し、その内容を学習コンテンツとしてポータルサイトへ掲載した。作成したコンテンツの感想等については、関係校生徒・教職員へのアンケートを通して集約し、その結果を分析して提供校へフィードバックした。作成した主なコンテンツは以下のとおり。

○ファシリテーション研修	【松本県ケ丘高校】
○Try Presentation in English!	【上田高校】
○高校生が国際協力について考えてみた	【上田高校】
○哲学対話～哲学的に探究する～	【松本県ケ丘高校】
○懸陵 WWL2024 小論文講座	【松本県ケ丘高校】
○異文化コミュニケーション講座	【上田高校】
○探究・課題研究発表会(普通科・理数科)	【野沢北高校】
○「ふるさと探究学 実践編」	【蘇南高校】
○教科横断型授業@伊那北「国語」×「英語」×「倫理」	【伊那北高校】
○進路をデザインするー海外留学進学講座	【実施機関】
○アカデミックプレゼンテーション講座	【実施機関】

(オ) 幅広いコンテンツの収集と活用

実施機関が、提供校のみならず、校長会や専門部会、管理職研修会、学校訪問などにおいて、県内高校へも広範に呼びかけ、各校で実践している文理横断的、教科等横断的な授業等について、情報収集を行なった。「信州 WWL グローバル講座」については、これまでの WWL 事業における研究成果を広く県内に普及すべく、AL ネットワーク校のみならず、全県の高校へも広く参加を呼びかけた。

(カ) 教員対象研修会の実施

デジタルコンテンツ作成及び遠隔授業実施にかかる教員対象の研修については、実施機関の担当主事が各提供校を訪問し、実際に配信時のサポートを通して、各校の教職員に効果的なオンライン配信の環境づくりについて助言を行った。また、既に継続的に遠隔授業を実施している県内の高校からも指導助言の要請を受け、実施機関の担当指導主事が該当校を訪問し、WWL 事業で得た知見を提供することで、本事業の成果の普及を行った。

(キ) コンテンツの作成・更新に係る支援

提供校の教員が実際にコンテンツを作成する際に必要な機材については、昨年度購入した機材を活用するとともに、必要に応じて実施機関の担当主事が各校を訪問し、撮影や編集等の指導助言を行った。また、各校の担当教員のみならず、地域連携コーディネーターにも協力を仰ぎ、以前は対面のみで実施していた各種講座について、オンライン併用とし、広く他校生徒の参加を募った。また、オンデマンド教材の作成にも協力いただいた。

昨年度の事業アンケートでは、生徒の探究活動の好事例を共有したいとの希望が多かったため、各校には生徒の探究活動発表の動画の撮影提供を依頼し、コンテンツの収集を行った。

ウ 多様な他者との協働的な学び、深い学びの実現に向けたオンラインを活用した同時双方向型合同授業の実施

(ア) オンラインによる合同授業の実施

本事業を通して「本県が育てたい生徒像」に資する講座の実施について、事業関係校と調整を行った。昨年度の事業アンケート結果を踏まえ、これまで AL ネットワークにおいて開発されてきた文理融合型・教科横断型の高度かつ多様な学びの中でも、特に学校現場のニーズが高かったテーマに基づき、以下の講座を実施した。これらはハイブリッド形式で開催し、積極的に他校生徒の参加を呼びかけるとともに、県内の高校へオンライン配信した。

【提供校が実施する授業】

- a. ミニ探究 Day：探究学習初期指導における基礎スキル養成講座（野沢北：4 月）
- b. アカデミックプレゼンテーション：生徒の探究活動の実践発表会（上田：4 月、10 月）
- c. 海外での学び報告会：海外研修報告会（伊那北：4 月、2 月、野沢北：5 月）
- d. 北陸新幹線サミット：県内外の高校生による日本語と英語によるグローバル課題に関するシンポジウム（上田：6 月）
- e. 懸陵 WWL2024 小論文講座：フィールドワークを伴う社会課題に迫る小論文講座（松本県ヶ丘：5 月、7 月、8 月、1 月）
- f. 「宇宙の魅力、世界の星空」：南米チリアタカマ展望台中継授業（駒ヶ根工業：9 月、11 月）

1 事業概要

- g. 公共合同授業： 哲学対話を通して学ぶ主権者教育合同授業（松本県ケ丘、松本美須々ケ丘：11月）
- h. 課題研究総合発表会（蘇南：12月）
- i. 課題探究発表会（野沢北：12月、2月）
- j. グローバルスタディーズ報告会： 探究活動報告会および英語ディスカッション（上田：2月）
- k. 海外高校（エストニア、台湾）とのオンライン連携授業（野沢北：通年、蘇南：2月）

【実施機関が提供する講座：信州 WWL グローバル講座】

- a. 海外大学進学留学講座： 県内高校卒業生による海外大進学までのロードマップ（6月、9月）
- b. 若きグローバルリーダーに学ぶ： 兵庫県芦屋市長 高島峻輔氏との座談会（10月）
- c. アカデミックプレゼンテーション講座： 論理的な構成による英語による学術プレゼンテーション講座（10月～12月4回シリーズ）

※a～cの講座はすべて希望する生徒個人を単位とし、学校の枠を超えて募集した。学校単位や個人により、延べ21校から生徒66名、教員23名、他9名（保護者、大学生、一般）が参加した。

【実施機関が提供する講座：信州 WWL グローバルカフェ（成果報告会）】

主 催 長野県教育委員会（実施機関）

実施日 12月14日（土）

会 場 長野県総合教育センター 第1研修室

内 容 県内の高校から集まった生徒・教員が一堂に会し、学校の枠を超えて互いに学び合う機会とする「第2回長野県高校生探Qフェスティバル2024」を開催した。この一環として、ICTを活用した本事業における学びの成果報告会である「信州 WWL グローバルカフェ」を実施した。今年度は、前述のアカデミックプレゼンテーション講座受講生による成果発表と、JICA長野デスクと共同で高校生の国際協力活動の取組発表を行った。

当日は、オンラインと対面のハイブリッド形式で開催され、AL ネットワーク校の他生徒の保護者も参観可能とした。会場には学校関係者のほか、中学生や一般の方の参観もあり、本事業による生徒の学びの成果を広く公開発信した。

（イ） 実施対象となる被提供校の決定

オンライン合同授業の実施にあたり、特定の学校同士に限定せず、県内の希望する生徒や教員が体験可能な形態を優先した。結果として、AL ネットワーク校以外の学校からも参加があり、事業の県内普及に繋がった。

（ウ） 実施日時等の調整

授業提供校の負担を軽減するため、時間割の中での授業提供が難しい場合は、放課後や休日のゼミ提供、アーカイブ映像の配信など、多様な生徒の参加に配慮した形態を取り入れた。この取組により、ポータルサイトの活用促進にも繋がった。

（エ） 円滑な実施に向けた調整及び事業周知

オンライン合同授業が円滑に実施できるよう、実施機関と総合教育センターが協力し、配信校に対して指導助言や技術的サポートを行った。具体的には、必要機材の選定やレイアウト提案、

当日の操作サポート、授業後のフィードバックを実施した。

また、授業実施に当たっては、AL ネットワークのみならず、全県の専門学科や総合学科を有する高校にも協力を広く呼びかけた結果、工業科を有する学校におけるオンライン授業実施や中山間地域校、AL ネットワーク校以外の学校からのオンライン講座への生徒参加が実現した。

(オ) 実施に向けた人的支援等

オンライン授業補助員：提供校の希望に応じて GIGA スクールサポーターによる支援を行った。このサポーター派遣では、ICT 機器の操作やトラブル対応、オンライン授業の配信に関する技術的支援を行っている。年間を通じて各校の希望に応じて派遣申請が可能であり、訪問日程や対応内容も柔軟に調整できるため、サポーターの派遣については、本事業予算からの支出は行わず既存の派遣事業を活用した。

学習支援員：必要に応じて被提供校へ配置を計画したが、今年度は希望がなかったため未実施とした。

探究サポーター（メンター）：オンライン合同授業や成果報告会等において、卒業生や大学生、県内の外国語指導助手（ALT）などに協力を依頼し、生徒の学びを支援した。

(カ) オンライン授業改善に向けた支援

ICT 教育推進センターと連携し、遠隔授業の実施状況や課題を把握した。校長会や専門部会で報告し、各校への訪問支援も行った。運営指導委員会の開催についてもオンラインを活用した会議とし、ICT の効果的活用を提案した。

(キ) 大学・企業等との連携

県内の大学に協力を仰ぎ、作成・収集したコンテンツについて、大学生に視聴を依頼する予定であったが、今年度は実施機関が主催した各種講座等に招聘した大学生メンターへの個人的な依頼にとどまった。

(ク) 学習評価の研究

① 評価方法の検証：

年間を通したオンライン授業の実施は、各校での授業の必要性や時間割の調整など、学校全体の教育活動に影響を与えるため、即座に全面的に実施することは難しい。一方で、今年度実施した授業では、単元の 1 時間や授業中に数分間他校とオンラインで繋ぐ形や、非同期で互いの学習成果をプラットフォームにアップロードする形式でも学習効果が確認できた。

② 単位認定に向けた取組と大学による先取り履修との連携：

オンライン授業の単位認定については、授業中の生徒の見取りと学習評価のあり方を研究する必要がある。信州大学では令和 4 年度から県内高校生対象の先取り履修が始まり、オンラインで実施されている科目も含め、令和 4 年度は 15 名、令和 5 年度は 26 名の生徒が受講している。今年度もオンデマンド又は同時双方向により前期・後期あわせて 17 講座を県内高校生対象に開講いただいている。また、拠点校である上田高校、連携校である屋代高校においては、先取り履修による単位を増加単位として認定するなど WWL 事業の取組を反映した教育課程の編成に努めている。

エ グローバルな学びの推進

県教育委員会では、海外の高校や学術機関との連携体制をさらに強化するため、9月に台湾高雄市政府教育局と「教育交流協力に関する覚書」を更新し両地域間の教育分野での連携強化に努めた。

本県と高雄市は平成30年度に初めて覚書を締結し、以来、両地域の児童生徒の異文化理解や国際交流促進に努めている。今回の更新で新たにオンラインを活用した国際交流の項目を加えたことで、グローバル課題の解決を目指した連携がさらに深化することが期待される。今後は両地域の単発のオンライン交流にとどまらず、継続的な授業交流や生徒の共同研究等、AL ネットワーク校に求められる「国際的な学び」の推進や県内の高校生へより豊かな国際経験を提供していきたい。

オ 提供校・被提供校のネットワーク拡充及び組織の効果的な運営に向けた取組

(ア) 教員間の「ヨコの関係」の構築

提供校・被提供校を中心に、教員間のネットワークを広く県内に構築するため、今年度もグループチャットや、前掲の「まなび助 ポータルサイト」等の活用を促進し、教員同士の恒常的な情報共有と意見交換の機会を提供した。

(イ) ネットワーク拡充に向けた取組

今年度は、AL ネットワーク連携校に提供校である蘇南高校が新たに加わることで、普通科に加え総合学科の取組を県内に広く発信することができた。また、駒ヶ根工業高校と東京大学木曽観測所との共同による南米チリとのオンライン授業実践など専門学科の取組をオンラインにより県内の高校へ提供した。

(ウ) 連携交渉の取組

WWL コンソーシアムの構築を目指し、県外拠点校との連携を進めるため、12月には提供校の担当者7名が北海学園札幌高等学校を訪問し、事業連携交渉を行った。

【連携交渉の概要】

訪問日：令和6年12月12日

参加者：松本県ヶ丘高校、野沢北高校、蘇南高校の3校から7名が参加

訪問先：北海学園札幌高等学校（令和3年WWLカリキュラム開発拠点校に指定）

日 程：運営指導委員会と課題研究発表会及び高校生の国際会議の見学

交渉内容：高校生国際会議への参加：参集またはオンラインでの生徒参加

課題研究発表会：オンラインでの相互参加

各校の取組への参加：小論文講座やフィールドワークゼミへのオンライン参加

日常の課題研究：生徒同士のオンライン交流促進

教員同士の情報交換：オンラインでの情報交換や相互交流

当日は、同校を訪問していた福島県ふたば未来高校の教員とも交流を行い、連携の可能性について懇談を行った。事業関係校同士の連携の可能性含め、同校職員と交流を図るなど、有意義な交渉の機会となった。

カ 組織の効果的な運営

(ア) 運営指導委員会・検証会議の実施

下記の日程で本年度の運営指導委員会、検証会議を実施した。昨年度の成果、今年度の事業計画及び課題について専門的見地から指導助言をいただいた。

○運営指導委員会 第1回：令和6年6月28日、第2回：令和7年1月28日実施

【運営指導委員】

信州大学教育学部	学部長	村松 浩幸（座長）
東京インターナショナルスクール	理事長	坪谷 ニュウエル 郁子（副座長）
KDDI 株式会社経営戦略本部	副本部長	江幡 智広
信州大学教育学部	准教授	佐藤 和紀
株式会社 Inspire High	CEO	杉浦 太一

【カリキュラムアドバイザー】

ベネッセ総合教育研究所教育イノベーションセンター長 小村 俊平

○検証会議 令和7年2月28日実施

【検証委員】

慶應義塾大学総合政策学部 教授 清水 唯一朗

（イ）AL ネットワーク校連絡会の開催

実施機関が中心となって、事業担当者会等、参集のみならず、Zoom 等のオンラインを活用した情報共有や意見交換を行う機会を設けた。また、相互の緊密なコミュニケーションツールとして、昨年開設した Google Chat スペースの参加者を AL ネットワーク校担当まで対象を拡大し、教員間の「ヨコ」の連携構築に努めた。

（ウ）事務職員の配置

実施機関に非常勤職員を必要に応じて配置する予定であったが、事業推進に係る事務処理については実施機関担当主事が担当した。本事業の外部対応・庶務等に係る業務については、各学校の事務担当だけでなく、担当教諭、生徒、外部講師等との直接的な打ち合わせや連携が必要であり、実施機関担当主事が関わらざるを得ない事案がほとんどであること、事業の円滑な推進に支障がない範囲での対応が可能であったため、実施機関関係者で対応した。

事業最終年度を迎える次年度は、事業の実施を踏まえ、遺漏なく事業を推進できる体制として、各校の事務担当者と引き続き連携を図り、事務職員の配置についても検討するとともに、事業終了後の持続可能な運営体制についても検討していきたい。

（エ）学校訪問等による指導・助言

実施機関担当主事による提供校・被提供校への電話相談やオンラインによる協議、学校訪問等により、事業研究に係る指導・助言及びネットワーク拡大に向けた協議を行なった。

本年度の各校への訪問及びオンラインによる指導助言実績は以下の通り。

（※）オンラインによる

4月11日	（木）	事業担当者会（※）
4月30日	（火）	松本県ケ丘高校訪問（ファシリテーション研修指導助言）
5月1日	（水）	上田高校訪問（英語プレゼンテーション動画撮影補助）
5月2日	（木）	松本県ケ丘高校訪問（哲学対話動画撮影指導助言）
5月15日	（水）	総合教育センター担当者打合せ（※）
6月7日	（金）	AL ネットワーク校ミーティング（兼）提供校担当者会（※）
6月14日	（金）	蘇南高校訪問（事業打合せ）
7月22日	（月）	AL ネットワーク校ミーティング（兼）提供校担当者会（※）
8月7日	（水）	上田市情報センター（松本県ケ丘小論文講座撮影指導助言）

1 事業概要

10 月 4 日	(金)	AL ネットワーク校ミーティング (兼) 提供校担当者会 (※)
11 月 5 日	(火)	上田高校担当者打合せ (※)
11 月 8 日	(金)	松本県ケ丘高校 (教科「公共」 オンライン合同授業指導助言)
12 月 13 日	(金)	信州 WWL グローバルカフェ準備 (総合教育センター)
12 月 14 日	(土)	信州 WWL グローバルカフェ開催 (総合教育センター)
12 月 19 日	(木)	AL ネットワーク校ミーティング (兼) 提供校担当者会 (※)
1 月 28 日	(火)	AL ネットワーク校ミーティング (兼) 提供校担当者会 (※)
1 月 31 日	(金)	上田高校訪問 (GS 報告会運営準備・指導助言)
2 月 1 日	(土)	上田高校訪問 (GS 報告会運営に係る指導助言)

3. 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 事業アンケートによる評価

ポータルサイト及びオンライン授業に係る生徒・教員へのアンケートを実施し、提供校・被提供校の生徒 521 名、教員 28 名から回答を得た。結果については、実施機関が集約の上、改善に向けた建設的な意見・提案等必要な情報について提供校へフィードバックを行なった。回答の分析結果の概要は以下の通り。

【概要】

アンケート実施期間：令和 6 年 11 月 15 日～令和 7 年 1 月 10 日

回答方法：Google Forms

回答者数：提供校・被提供校の生徒 521 名（1 年生および 2 年生対象）

AL ネットワーク校担当職員および探究係担当職員 28 名

目 的：ポータルサイトの使用感や活用状況を把握し、改善の参考にするとともに、オンライン合同授業に関するニーズや意識を調査し、事業推進に役立てる。

【アンケート結果と分析】

○ポータルサイトの評価

デザイン性：教職員は高評価が多く、生徒はやや厳しい評価（16.8%が「良くない」）。

コンテンツ量：教職員は 27.8%が「良くない」と回答、生徒は 23.5%。

情報検索性：生徒の「良くない」割合が 26.9%で、教職員より高い。

（考察）デザインやコンテンツの内容は「良い」との評価が過半数を占める一方、「情報検索性」については改善が必要である。好評であったページは「オンデマンド教材」「学びの掲示板」「お役立ち資料」であり、具体的には「探究基礎講座」や「留学・進学情報」などの評価が高い。

○ポータルサイト掲載コンテンツへの要望

生徒からは、他校の生徒の探究活動の紹介や海外留学・進学に関する情報、高校生が参加可能なワークショップや発表会を希望する回答が多い。また、自分のプロジェクトの紹介やイベント告知ができる掲示板の利用についての要望が多い。一方、教職員は探究基礎講座、専門分野の動画講座、キャリア教育関連のコンテンツの掲載を望むとともに、自校からの提供が可能なコンテンツとして AI に関する講座や異文化理解に関する講座を挙げている。

（考察）掲載する幅広い分野の動画や資料の掲載や情報検索機能の改善に努めるとともに、「使

ったことがない」という声も散見されたため、生徒への引き続きの周知活動が必要。

○オンライン合同授業の興味

オンライン合同授業の「経験がある」と回答した生徒は8%と少ないものの、オンライン授業に参加したいという意欲は高かった。特に、「探究プロセス学習」や「海外の学生との交流」、「社会問題に関するディスカッション」、「国際協力に関する授業への関心」が強かった。また、他校の生徒との合同探究学習についても要望があり、「課題設定」や「情報収集」スキルのワークショップが人気であった。

(考察) 回答した教員からは、オンライン合同授業の実践に対して前向きな意見が多い。他校との合同授業の実践は、教職員間の連携強化にもつながるため、来年度は是非とも実践数を増やせるよう、具体的な実践例の共有を図っていきたい。

(2) 事業進捗状況（アンケート考察を踏まえて）

ア オンデマンド配信による学習機会の創出

当初の目標数（コンテンツ数 100 本以上）には達しなかったものの、今年度も学習コンテンツの充実を図ることができた。一方、目標に掲げていた学習コンテンツの各校の授業等での活用がなかなか進まなかったことが課題である。生徒・教員対象のアンケートで指摘のあった掲載コンテンツの充実やポータルサイトのレイアウトの改善、情報検索性の向上など、提供校と協力しながら、実施機関においても学校現場のニーズを踏まえた多様なコンテンツの作成に引き続き努めたい。また、ポータルサイトの利用状況を可視化できるような工夫も含め、多様な興味・関心に応じた個別最適な学びを実現できる環境を整えていきたい。

イ オンライン授業による学習機会の創出

本年度は、各提供校の協力のもと、オンラインによる積極的な学びの発信が行われた。またオンラインで開催した信州 WWL グローバル講座には県内 21 校から生徒 66 名、教員 23 名が参加した。少人数での対話重視の講座により、生徒の満足度は高く、リピーターも増えた。地理的制約を超えて参加が可能となり、中山間地の小規模校からも参加があった。

一方で、通常の授業としてのオンライン授業の事例は少なく、生徒の参加総数も十分ではない。今後は授業時間内での開催や技術的支援が課題であり、生徒が積極的に参加する仕掛けが求められる。また、オンライン合同授業の実践数は増えたが、単発であり継続的なものではなかった。生徒の変容を検証するための仮説や指標を整え、効果を提示する取組も必要である。

ウ デジタルコンテンツやオンライン授業による学習評価の研究

前述の通り、通年によるオンライン授業の実践については、時間割の制限などもあり継続した実践には繋がらなかった。一方で、今年度実施した授業では、単元の 1 時間や数時間の授業中に他校とオンラインで繋ぐ形や、非同期で互いの学習教材を共有するなどの実践を行った。短時間オンラインで繋がる形式であれば、オンライン合同授業の提供校の担当教員と被提供校の教員が対等に連携し、自校の生徒の学習評価を担当できる。引き続き、オンラインを活用し、多様な他者との対話する機会の確保に努めたい。

評価方法については、今後も引き続き対面授業時と同様に行動観察やポートフォリオの活用など、オンラインでも適切な形成的・総括的評価を行うために、実施機関担当主事と各校の教職員が協力して検証を進めていきたい。

(3) 今年度の成果

ア ポータルサイトの改善

昨年度の生徒アンケートを元に、「まなび助ポータルサイト」を刷新。県が提供する「学びのプラットフォーム」のページの作成と多様な分野の情報アクセス性を向上させることができた。

イ デジタル学習コンテンツの充実

「イノベーティブなグローバルリーダー」として求められる資質や能力を育成に資する多様な学習コンテンツを収集することができた。生徒・教員による学習の振り返り等の活用に繋がった。

ウ オンライン授業の挑戦と多様なニーズへの対応

高度な学びの提供として、実施機関による「信州 WWL グローバル講座」を開催。中山間地域校の生徒参加に繋がった。当日の講座のアーカイブ配信など多様なニーズに対応することができた。

エ 教員コミュニティの活用と連携拡大

グループチャット、連携校ミーティング等による情報交換を実施することで教員の「ヨコの繋がり」を強化することができた。また、専門学科からのコンテンツ提供や AL ネットワークの拡充に向け、他県の事業拠点校と連携構築に向けた建設的な協議に繋がった。

4. 次年度以降の課題及び改善点

前述の事業進捗状況及び今年度の成果を踏まえ、協働機関からの技術的な指導・助言を仰ぎつつ、以下の項目に取り組みながら、事業関係校と協力して学習コンテンツの充実に努める。また、WWL コンソーシアム構築に向け、県内高校に AL ネットワークへの参画を働きかけるとともに、連携のメリットを「学びのプラットフォーム」等を通じて各校に還元し、来年度の事業推進を図る。

(1) 各校の「学び」を繋ぐ HUB として機能するポータルサイト整備

ポータルサイトを通じて各校教員の教育実践を共有するとともに、コンテンツの運用の効果や生徒の変容などを検証する。

【具体的な取組】

- ・各校の YouTube チャンネル開設を依頼し、ポータルサイトにリンクを一覧掲載することで、迅速な学習コンテンツの提供などサイトの利便性を向上させる。
- ・事業関係校に対し、本ポータルサイトの探究学習や授業等での活用報告を依頼する。
- ・ポータルサイト活用による学習効果やオンライン合同授業における生徒の変容を測定するための具体的な評価指標を設定し、検証する (R3 作成の WWL ルーブリックのブラッシュアップ)。

(2) WWL 事業による 6 年間の研究成果の全県的普及

高校の ICT 環境を最大限活用し、本事業による研究成果を全県的に普及するとともに、県内すべての高校生が参加できる本県の「学びのプラットフォーム」と連携し再構築を図る。これにより学校の枠を超えた生徒同士の学びを促進し、WWL の成果の裾野を広げ、全県に広める。

【具体的な取組】

- ・本県の「学びのプラットフォーム」が提供するプログラムを平日に開催し、各校の探究学習との連携を図る。
- ・「総合的な探究の時間」の時間割を共通化し、オンライン合同開催を実施する。
- ・授業内のオンラインによる短時間交流や探究報告会等におけるオンライン、オフラインによ

る生徒の相互交流を促進し、多様な人との交流や学び合いの場面を提供する。

- ・各校の探究学習のフェーズを測定できる指標の研究と教員研修を行う。
- ・校外探究活動のための公欠制度の整備など、生徒の探究活動を支援する仕組みの導入を各校へ働きかける。

(3) AL ネットワークの拡充と教員コミュニティ構築

実施機関が配信環境の整備や時間的制約の解消を支援するとともに、教員の授業連携への理解を深め、本事業への主体的な関与を促進するために関係者のエンゲージメントの向上にも努める。

【具体的な取組】

- ・各教員の専門性を活かした学習教材の共同作成やオンライン授業実践の共有を支援する。
- ・DX ハイスクール採択校と連携し、校内 ICT 環境整備と授業への効果的活用の研究を行う。
- ・専門学科を有する学校や中山間地校への事業参画を呼びかける。
- ・探究発表会などへの生徒招聘や学習コンテンツ提供を通じて全国拠点校との連携を図る。

(4) 「県立高校の特色化に関する方針」の推進と連携

本県では、今年度、生徒の興味・関心を尊重し、多様な学びの選択肢を提供することを目指し「県立高校の特色化に関する方針」を策定した。この方針は「生徒の個別の学びを尊重し、社会で活躍できる力を育成する」ことを目標としており、WWL 事業との相関が強い。本方針による本県の高校改革の推進に当たっては、WWL 事業による知見を活かし、以下に挙げる共通の重点領域において事務局内担当課と協働し研究を進めていく。

【具体的な取組】

- ・遠隔授業の ICT 活用による学びの個別最適な学びの実現に向けたオンライン授業配信拠点整備について総合教育センターと協議する。
- ・「高度な学び」「国際的な学び」「探究的な学び」の実践を通して英語教育の強化や国際交流、国際理解に係る学習プログラムを提供する。
- ・中山間地域の学びの拠点として蘇南高校が取り組む地域資源を活用した探究的な学びの実践を広く県内へ発信する。

【実施機関の担当者】

担当課・室	学びの改革支援課	担当者 職・氏名	指導主事 高野 英美
電話番号 (直通)	026-235-7435	E-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

構想名:「信州IBLプロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へつなげる学びのネットワーク

***IBL: Inquiry Based Learning**

[illegible]

ポータルサイトの周知及び活用

学習コンテンツの充実とブラッシュアップ

同時双方向型合同授業の試行、時間割研究

オンライン授業の単位認定に向けた研究

果成



ポータルサイトの改善

昨年年度の生徒アンケートを元に、「まなび助ポータルサイト」を刷新。県が提供する「学びのプラットフォーム」のページの作成と多様な分野の情報アクセス性を向上。

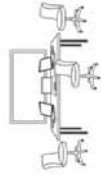


デジタル学習コンテンツの充実

「イノベティブなグローバルリーダー」として求められる資質や能力を育成するための多様な学習コンテンツを収集。(今年度60本)生徒・教員による学習の振り返り等での活用。

オンライン合同授業実施と多様なニーズ対応

高度な学びの提供として、実施機関による「信州WWLグローバル講座」を開催。中山間地域校の生徒参加、当日の講座のアーカイブ配信など多様なニーズに対応。



教員コミュニティの活用と連携拡大

グループチャット、連携校ミーティング等による情報交換、専門学科からのコンテンツ提供、他県との連携交渉等によるALネットワークの拡充。



課題と次年度の計画



- 各校の「学び」を繋ぐHUBとして機能するポータルサイト整備
- 各校のYouTubeチャンネル開設、ポータルサイトの活用促進、学習効果の検証。
- 県「学びのプラットフォーム」との連携によるWWL事業研究成果の全県的普及
- 探究学習支援プログラムの平日開催、オンライン等による「学び合い」促進、成果測定指標の研究。
- ALネットワークの拡充と教員コミュニティ構築
- 教材の共同作成支援、校内ICT環境整備の研究、専門学科や中山間地校の事業参画呼びかけ。
- 「県立高等学校特色化に関する方針」の推進と連携
- 遠隔授業のICT活用による学びの個別最適化。
- 英語教育の強化、地域資源を活用した探究的な学びの発信。



2 実施報告



学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会

オンデマンド配信による学習機会の創出

1 個別最適な学びに資するデジタルコンテンツの作成

昨年度実施したアンケートで寄せられた意見を参考に、生徒や教員が必要なコンテンツ等を一元的に共有できる汎用的なシステムの構築を目指し、「まなび助 ポータルサイト」のデザインの改善を図った。同ポータルサイトには、「探究基礎講座」シリーズなどの動画の他、各校で作成したダウンロード可能なワークシートもオンデマンド教材として掲載。また、キャリア教育に資する講演会動画、海外留学及び進学情報、課題研究発表会の動画の情報リンクを掲載するとともに、今年度は YouTube チャンネルも開設した。令和7年2月時点で60本の動画及びダウンロード可能な授業教材を掲載した。各校から提供された主な学習コンテンツは以下のとおり。

(1) 異文化コミュニケーション講座①～④ 【提供：上田高校】

実施時期：10月～11月

講師：Amy Zau（グローバル講師）

テーマ等：第1回：文化とは何か

第2回：現実認識

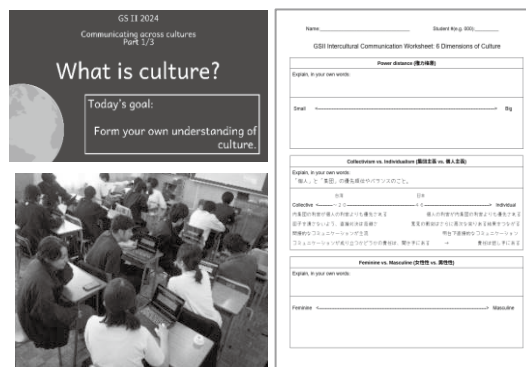
第3回：日本と台湾の文化の比較

第4回：台湾研修旅行へ向けての準備

【概要】

2学年で実施した台湾研修旅行の事前研修として、グローバルスタディ（GS）Ⅱの時間を活用し、オンライン授業を行うことで、短期間で集中的に学習を深めることを目的に実施した。

今回の講座の内容は、指導計画、プレゼン資料及び実際の授業動画をデジタルコンテンツとしてまとめたものであり、「異文化理解」をテーマとした講座等で活用可能。上田高校では次年度以降も、台湾研修旅行の事前学習に活用する予定。



(2) ファシリテーション研修（ファシ研） 【提供：松本県ヶ丘高校】

実施時期：4月30日（火）

講師：宮木 慧美 氏（地域連携コーディネーター）

テーマ等：ファシリテーション研修

【概要】

中信地区の高校と地域・企業等を繋ぐ地域連携コーディネーターが講師を務め、会議や話し合いをスムーズに進行するために必要なファシリテーションの技法をワークショップ形式で体験する講座を実施。当日の様子を動画撮影したものを3回シリーズの研修動画として編集し、まなび助ポータルサイトに掲載。各校の生徒の探究学習で活用できるよう、研修用ワークシートもダウンロード可能な形式で掲載した。



(3) 縣陵 WWL2024 小論文講座 【提供：松本県ヶ丘高校】

実施時期：5月、7月、8月、1月（通年）

授業者：竹内 忍 氏

テーマ等：Ⅰ「同情と共感」「自立と依存」

Ⅱ「社会と個人」「価値観の内面化と相対化」

【概要】

単なる小論文作成のテクニックを学ぶのではなく、フィールドワークや関係者へのインタビューなどの体験を通じて、自分の考えをより深め、それをもとに小論文作成に取り組むことをコンセプトに実施。複数の高校が参加し、他校の生徒との対話などを通じて、それをより深く体験できるよう、WWL 小論文講座として実施した。フィールドワークの様子を録画、配信し他校でも活用可能とした。

今年度は初めての試みということもあり、他校の生徒の参加はそれほど多くはなかったが、今後は小論文の作成だけでなく、探究活動のテーマなどとも関連付けて参加できるような募集の方法なども検討し、より多くの学校の生徒が参加できるようにしていきたい。



(4) 哲学対話 【提供校：松本県ヶ丘高校】

実施時期：5月2日（木）、9日（木）

授業者：松島恒熙 氏（信州大学教育学部助教）

染野雄太郎 教諭（松本県ヶ丘高校）

テーマ等：第1回「スポーツとは何か」

第2回「伝統とは何か」

【概要】

哲学対話の意義について各テーマによる講演とワークショップを実施。生徒にとって身近なテーマについて、普段は考えることのない視点(哲学の視点)で深く考え対話することで、自らの視野を広げることを狙いとしている。公共の授業において哲学対話の要素を取り入れ、現代社会の課題について考えるとともに、自身のキャリアや探究活動を考える一助とする。「哲学対話」による対話的で深い学びの実践の様子を学習コンテンツとして各校へ提供した。



(5) 普通科探究発表会 【提供：野沢北高校】

実施時期：12月14日（土）

発表者等：普通科2年生

テーマ等：生徒のテーマによる探究内容の報告会

【概要】

普通科2年生の研究報告をオンデマンドとして、1年生の探究テーマ設定のために活用。ポータルサイトの「探究基礎講座」シリーズに掲載し、他校の生徒にも活用してもらえようオンデマンドコンテンツとして編集。今後は中学生が視聴できるようホームページ等の仕様を検討したい。



2 実施報告

(6) 理数科課題研究発表会 【提供：野沢北高校】

実施時期：2月1日（土）

発表者等：理数科2年生

テーマ等：「理数探究」で実践してきた課題研究の発表会

【概要】

当日の発表会を YouTube でライブ配信するとともに、後日、当日の動画をアーカイブ配信。オンライン参加者との質疑応答がより効果的に行えるよう、配信方法を研究していきたい。



(7) 教科横断授業「国語」×「英語」×「倫理」【提供：伊那北高校】

実施時期：通年、2月から公開

授業者：遠藤 颯教諭（国語）、中村万里菜教諭（英語）、熊澤宏一教諭（地歴公民）

テーマ等：科目：考究現代文（学校設定科目）授業タイトル：「言語」を探究する

【概要】

伊那北高校で行われた「コラボ授業」の授業実践を県内の教職員の研究用教材として提供。「まなび助ポータルサイト for Teachers」に掲載。教科間連携授業の実践を共有するとともに、各校において「教科間連携のあり方」を模索するための一つの指標とすることを目的とした。次年度に実施予定の教科横断型授業についても撮影し、公開する予定である。

(8) 「第16回総合探究発表会」 【提供：蘇南高校】

実施時期：12月6日（金）

発表者等：2年生代表

助言者等：南木曾町長、同教育長、探究的な学びコンソーシアム関係者 計6名

参加者：（オンライン）教育機関者（飯田風越高校、木曽青峰高校、岐阜県恵那特別支援学校、静岡県立天龍高校、坂下中学校） 合計8名

一般参加者、NPO 法人カタリバ2名、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム1名

（参集）PTA 役員、同窓会、学校評議員 計4名、 保護者13名

【概要】

蘇南高校の探究的な学びのプロセス「ふるさと探究学 実践編」として、地域と連携した「探究的な学び」の流れのまとめとしての、総合探究発表会を「まなび助ポータルサイト掲載用」コンテンツとして提供。

来年度は提供した動画教材を地元中学校とも共有し、中学生も巻き込んだ探究活動や他校生徒との合同探究活動に向けて、引き続き研究していきたい。今年度は代表発表の3組のみを動画教材とするが、今後の活用として発表会当日に実施しているポスターセッションもより臨場感がある動画教材として配信する方法も検討していきたい。また、総合探究の最終まとめとしての要旨や論文（A4版6枚程度）も掲載することで「まなび助ポータルサイト」を本校の総合探究のポートフォリオとして活用していきたい。

(9) 信州 WWL グローバル講座コンテンツ

イノベティブなグローバルリーダーの育成に資する学びの提供として、実施機関が主催する「信州 WWL グローバル講座」をオンラインにより実施。講座の様子をアーカイブ動画として編集し、ポータルサイトに掲載している。学校の枠にとらわれず、県内の希望するすべての高校生が高度な学びを享受できる「学びのプラットフォーム」構築にむけ、今後もコンテンツの充実に努めたい。以下、本年度制作したコンテンツの一例を掲載する。

タイトル	内 容	動画サムネイル
私の海外大学進学までのロードマップ (アメリカ編、イギリス編)	県内の高校を卒業後、海外大学に進学した大学生がメンターとなり、進路実現に至るまでの道のりと海外大学進学に必要な手続きや受験のためのノウハウを解説。	
アカデミック（学術）プレゼンテーション講座 (4回シリーズ)	プレゼンテーションとは「聴衆と歩く知の旅」。学術的な場面において自分の考えを多様な他者に英語で論理的に伝えるための理論を実践と共に修得。	
高校生が「国際協力」について考えてみた (カンボジア編、フィリピン編他)	各校が実施する海外研修等を通して高校生が体験した現場での社会課題についての「リアルな学び」や高校生の国際協力のための自主的な活動を紹介。	
高校生の留学を応援！ 「信州つばさプロジェクト」	県教育委員会による高校生の海外留学支援制度「信州つばさプロジェクト」。未知の世界に飛び出した高校生の海外での学びと帰国後の自身の変容など、本プロジェクト参加者が発信。	

オンライン授業等による学習機会の創出

将来、県内の生徒が学科や学校、地域や国の違いを超えて、希望する学びと多様な他者との協働的な学びの機会を享受できる環境整備の構築にむけ、各校の先進的な教育実践を共有する手段としてのオンラインの有効活用について研究を行った。今年度オンラインを活用しALネットワーク校及び県立高校への学びの共有に係る実践研究は以下の通り。

(1) 第7回北陸新幹線サミット

実施校 上田高校

期 日 6月22日（土）

参加校 （県内）県内参加校：飯山高校、長野高校、屋代高校、松本深志高校、伊那北高校
合計25名

（県外）東京学芸大学附属国際中等教育学校、筑波大学附属坂戸高校、新潟県立三条高校、石川県立七尾高校、金沢大学附属高校、福井県立美方高校
合計31名

内 容 県内・県外・海外の高校生同士が、対面及びオンラインによる意見交換を通じて学びの輪を広げ、グローバル課題について議論し、課題解決のために自分たちに何ができるかを提言にまとめて発信する。「環境問題」「教育格差・貧困」「地域活性化」をテーマにした3分科会と、英語による発表・ディスカッションが行われ、参加生徒による活発な意見交流が行われた。

【参加者の感想】

- ・自分たちの考える、より良い社会を実現するために、プランの改善点などを高校生みんなで考えることができて良かった。
- ・発表の仕方がとても上手い人がいて勉強になりました。講師の方や他校の人の意見から様々な問題に対してどう対処したら良いか考えることができました。
- ・オンラインでの参加者も積極的にかかわれるようなシステムで大変ありがたかった。

【当日の様子・今後の展望】

- ・オンラインでの参加を可能としたことによって、遠方の高校の生徒との交流も可能となり、生徒にとってお互いの視野を広げる意味で有意義であった。
- ・分科会を含めた、対面とオンラインの参加者が一緒に話し合いに参加する形態でのスムーズな運営方法について、グループ分けのあり方やWebカメラの配置などについて検討し、充実を図る必要がある。



(2) アカデミックプレゼンテーション

実施校 上田高校

期 日 4月20日（土）、10月19日（土）

内 容 1、2年時に実施している「探究的な学び」（GS）を起点とした自主活動の成果を、校内外に広く発信し、参集した様々な立ち位置の人々からのフィードバックを受けることで、自らの学びの到達点を相対化し、その後の学習の指針を得ることを目的とした生徒主体の発表会。

参加者 第1回：発表者（6件、21名）

参加者（オンラインを含む）約30名：ICAN担当者、保護者、他校職員・生徒等

第2回：発表者（5件、7名）

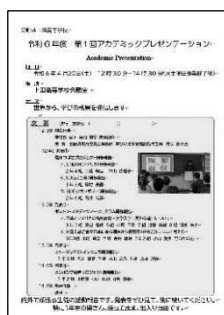
参加者（オンラインを含む）約20名：信濃毎日新聞社担当者、御代田町職員、保護者、他校職員

【参加者の感想】

- ・どの発表も、プレゼンテーションの内容が良く考えられていて、発表の仕方もととてもすばらしいと感じた。特に、グループでの発表は、協力して資料を作成、発表内容を考えている様子が見られ、素晴らしいと思った。
- ・全体を通して、全員が紙に書いてあることをただ読むのではなく、聞き手とのアイコンタクトを意識しながら話しており、本当に発表のクオリティが高いと感じた。全員が自分が何を伝えたいのかを自覚していることが伝わってきた。今日の発表を参考にしても自分も聞く人にしっかり伝わる発表をしたいと思った。
- ・素晴らしい発表の内容を、もっと広く、多くの人に聞いてもらえるようにしてほしい。

【成果・今後の展望】

どの発表者も事前の準備をしっかりと行い、発表内容を頭に入れたうえで、聴衆の様子を見ながら話を進めることができていた。質疑応答の時間を含めると、予定した時間を超過してしまっていた。発表時間を守ることやタイムテーブルに沿った司会進行の在り方を検討する必要がある。校内を含め発表者以外の生徒参加が全体的に低調になってきているので、何らかの対策が必要である。



(3) グローバルスタディーズ（GS）報告会

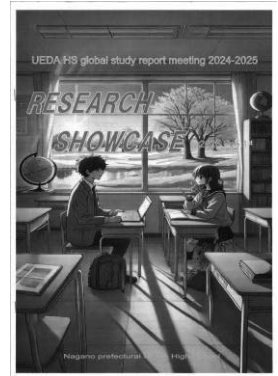
実施校 上田高校

期 日 2月1日（土）

内 容 2年生は、GSⅡで取り組んできた課題研究の成果の発表と討議等を通して、1年間の活動のまとめとする。1年生は、2年生の発表を聞き、討議に参加することで、次年度のGSⅡにおける課題研究に取り組む姿勢を育む。English Roomでは、本校から4件、長野高校1件、屋代高校1件の発表を英語で行い、ALT（6名）がファシリテーターとして参加し、討議を進める。発表は、保護者、中学生、ALネットワーク校生徒・職員に公開する。

発表者 本校2年生全員

参加者 本校1年生、3年生有志、助言者、保護者、中学生、ALネットワーク校生徒・職員
English Room: 発表者（2年生7名、長野高校1名、屋代高校1名）、
参加者（1年生約40名）、ファシリテーター（ALT 7名、JTE 1名）



【参加者の感想】

- ・英語を話すことにまだ難しさを感じるが、この経験が将来に生きると思う。実際に英語を使ってみて自分の表現力の不足を実感し、今後もっと勉強したいと感じた。英語での質疑応答がとても難しかったが、精一杯伝えようとしたらなんとか相手に伝えることができ、英語での会話することへのプレッシャーが少し軽減された。
- ・英語で発表をする機会が持ててよかった。他の人の発表を聞くことで、自分が今まで興味がなかったことについても知ることができて良かった。異なる分野や視点に触れることで、新たな発見があり、視野が広がった。

【成果・今後の展望】

本校のグローバル講師（GI）が、ファシリテーターとなりスムーズに会を進行することができた。GIによる計画と生徒への手厚い指導、県内のALTの協力により、生徒が英語を話す必要性を実感し、英語で自分の考えを伝えたいという意欲喚起につながった。

また、生徒3人に対して1人のALTにメンターとしてグループディスカッションに加わってもらったことで、生徒が英語を話す機会の増加につながった。参観した英語教員からも、このような実践的な英語使用の機会は生徒の英語力向上に大きく寄与するものであるとの感想が寄せられた。ALネットワーク校からの生徒参加もあり、今後の連携校間の生徒相互交流にも期待したい。

この取組はWWL拠点校としての本校の研究知見であり、当日の様子をアーカイブ動画として編集し、指導教材として校内で共有するだけでなく、他校でも活用いただければ幸いである。また、WWL拠点校として本校にはグローバル講師が配置されていることを踏まえ、今後も他校と連携を図りながら生徒にグローバルな学びを提供できるよう、次年度の開催形態を検討していきたい。



(4) 哲学対話を通して学ぶ主権者教育「国政選挙の投票率はなぜ低いのか」

実施校 松本県ケ丘高校、松本美須々ケ丘高校

期 日 11月8日（金）

内 容 2024年10月に行われた第50回衆議院議員総選挙を題材に、投票率の低さに課題を見出し、その原因や投票率を上げるための方策を考える。哲学対話の要素を入れながら、学校間の垣根を超えて多様な意見をもとに熟議する。

授業者 染野雄太郎 教諭（松本県ケ丘高校）、加藤 慶 教諭（松本美須々ケ丘高校）

講 師 松島恒熙 氏（信州大学教育学部助教）、メンター：松島助教ゼミ生

参加者 松本県ケ丘高校国際探究科2年生、松本美須々ケ丘高校普通科3年生

【参加者の感想】

- ・オンラインでの話し合いが難しかったけど、自分の意見、グループの意見を簡潔にまとめ、伝えることができた。
- ・無言の時間がありつつも、新たな意見が出たときには、みんなで共感することができ、相互に意見を聞き、考え、討論することができた。
- ・相手の意見は新しい視点が多くて勉強になった。
- ・お互いの意見について質問し合える時間があればもっと面白そう。

【成果・今後の展望】

「投票率が低いのはなぜか」という問いについて考えた後に、「投票率を上げるにはどうすればよいか」について具体的な方策を考える。自校同士のグループで対話活動を行った後、他校の生徒と意見を共有し、考え方を深め、広げていくことをねらいとした。有権者として実際に国政選挙に参加した生徒を交えて、対話活動を行えたことは有意義であった。課題としては、実際のオンライン接続時間が20分程度であり対話活動の時間を十分に確保することが難しかった。オンライン接続時間を十分に確保することや、その設定や段取りに困難を極めたため、今後はGIGAスクールサポーターにオンライン環境の整備を依頼し、他校との時間割設定を行う教員と、教材研究を中心に行う教員とでうまく業務分担し連携していきたい。

(5) 「ミニ探究day」

実施校 野沢北高校

期 日 4月22日（月）

授業者 野沢北高校普通科2学年正副担任

内 容 これから3年間行われる「普通科探究」の授業について、その意義・内容を1日で体験することで本授業に対する意欲を高めるきっかけを作る。テーマ決め・調査研究・スライド作成・発表まで活動を1日で行う。

参加者 1学年全生徒、県内の高校へオンライン公開

【参加者の感想】

- ・地域の課題にもっと視野を広げていきたい。
- ・しっかりとゴールを見据えたうえで着実に活動に取り組んでいきたいと思った。
- ・課題について、どのような工夫をすればいいか粘り強く考えるという経験をすること

2 実施報告

ができたので、それを十分に活かしたい。チームで情報を収集し、発表の段階まで作る流れが掴めたので次回にも活かしていきたい。

【成果・今後の展望】

探究のサイクルを1日で体験し、うまくいかない経験から探究には何が大切なのかを考える機会になった。当日はALネットワーク校を中心にオンライン配信と近隣高校へ公開した（2名来校）。本年度から始めた取組であり、係内の反省から来年度以降もこの取組をブラッシュアップしていきたい。



(6) 信州つばさプロジェクト海外研修報告会

実施校 野沢北高校

期 日 5月2日（木）

助言者 草本 朋子 氏（一般財団法人白馬インターナショナルスクール代表理事）

内 容 テーマ：「世界から今、自分ができることについて考える」

発表①「SDG s 探究コース 台湾研修報告」

発表②「SDG s 探究コース カンボジア研修報告」

参加者 野沢北高校1～3年

【参加者の感想】

- ・カンボジアの栄養問題は深刻であること、教育によって大きく変わることを学んだ。
- ・日本で当たり前と思うことが、海外ではできていないことが多くあり、そういうことによる国の違いが分かった。
- ・「海外では『何も言わない人＝何も考えいない人』と見ている」という草本さんのお話を聞いて、自分も意識を変えないといけないと思った。

【成果・今後の展望】

当日は報告会の様子をALネットワーク校の他、県内の高校へオンライン配信した。令和6年度の信州つばさプロジェクト参加者の報告会は、令和7年5月に開催予定。学校独自の海外研修プログラム「カンボジア研修旅行（Change Our Mindset）」に参加した生徒の報告会も検討している。5月は信州つばさプロジェクト参加した1グループの発表、7月以降に他の参加者の発表の機会を設けたい。

(7) エストニア共和国の高校生とオンライン交流

実施校 野沢北高校

期 日 毎月1回

内 容 エストニア共和国タリン市立ヤルヴェオッツ高校との文化、学校についての意見交換

参加者 野沢北高校 世界を考える会（自主的グループ）

【参加者の反応】

- ・異文化理解…文化や高校生活の違いに驚き、いろいろな発見があって面白い。
- ・英語力向上…相手の言っていることを理解するのに精いっぱい、もっと話せるようになりたいと思う。
- ・交流の継続…インスタグラムやSNSでつながり、やり取りをしている。もっと話したいので続けたい。

【成果・今後の展望】

- ・話すスピードが速く、相手との会話に苦労したり、自分の言いたいことがうまく伝えられないもどかしさを感じている様子である。毎回の交流では、事前にテーマを決めて、それに沿ってプレゼンテーションを行っている。スケジュール（相手の学校）が毎回変わるので、日程が変わることも有るが、今後も定期的な実施を予定している。また、令和7年度中に訪日するようなので、対面による交流を考えている。



(8) 伊那北高校海外研修報告会

実施校 伊那北高校

期 日 4月27日（土）、5月3日（金）、2月14日（金）

内 容 信州つばさプロジェクトや伊那北高校主催カンボジア研修で学んだ成果を校内外に向けて発信する。

参加者 発表者：本校生徒 5名（4/27）、6名（5/3）

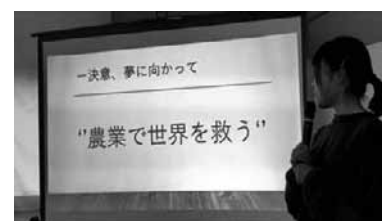
会場での聴講者：本校生徒・職員 10名 オンライン視聴者 5名

【参加者の感想】

発表した生徒からは、緊張しながらも報告を終えられたことに自信がついたという意見があった。視聴した生徒からは、国際的な視野を持つことの重要性への気づきや、自身も海外研修に参加したいという前向きな意見が出された。

【成果・今後の展望】

前年度に海外研修に参加した生徒がそこで学んだことを本校生徒や保護者に伝え、発表者本人としては自身の学びの振り返りとするとともに、聴講者としては、自身の見聞を広めることを目的として開催した。聴講した生徒の中に、この報告会を機に今年度の海外研修に参加した生徒もあり、よい機会になったと考える。今年度海外研修に参加した生徒の報告会も2月中に開催を予定している。



2 実施報告

(9) 「台中市立西苑高級中学」とのオンライン合同授業

実施校 蘇南高校

期 日 2月27日（木）

内 容 海外語学研修に参加する生徒12名が、現地（オーストラリア）の学校で行う予定の、木曽を紹介するプレゼンテーションの練習の場として、台湾の生徒向けに英語で木曽を紹介し、相手校からは日本語で台湾の紹介を受ける。今回の交流により、国際交流に必要な異文化コミュニケーションについて考える授業を試みる。

授業者 関 直哉 教諭、村上 樹 教諭（蘇南高校）

王 雅俊 教諭（台中市立西苑高級中学校）

参加者 蘇南高校 2年 12名 台中市立西苑高級中学校生徒

協 力 長野県観光機構 パブリック事業部担当：山崎 宏 氏（学校交流コーディネーター）

【成果・今後の展望】

当日は、2つの教室をオンラインで繋ぎ、ビデオカメラと360°カメラを使い、さまざまな角度からの映像を使って、ライブ感のある交流を目指した。

課題としては、担当者が一人でもオペレーションが行え、恒常的かつ、継続的な交流を目指し、機材の使い方に慣れる必要がある。交流のための部屋の整備を行い、オンライン交流のハードルを下げていきたい。

将来的には人口減少による影響も鑑み、職員数の減少による教育の質の低下による教育地域間格差を生じさせないよう、丘の上から世界とつながる学校として、持続可能な教育システムを構築していくことは、本校のような中山間地域の学校の使命であり、将来的には、木曽青峰高校とも連携しながら、木曽地域の教育環境を維持していきたい。

(10) 「宇宙の魅力 世界の星空」南米チリから中継

実施校 駒ヶ根工業高等学校

期 日 9月30日（月）、11月28日（木）

講 師 高橋英則 助教

東京大学理学系研究科天文学教育研究センター・木曽観測所

授業担当 林 厚志 教諭（駒ヶ根工業高校）機械科

参加者 機械科3年 課題研究 選択者、県内高校生 他

内 容 南米チリに建設中の東京大学アタカマ天文台(TAO)から、標高5,640mのチャナントール山での天文台建設や、基点となる街サンペドロ・デアタカマについてお話をいただく。打ち上げ後に約1年間、地球を周回しながらメッセージを送信する「てるてる」の衛星観測についての助言もいただく。

【当日の様子等】

駒ヶ根工業高校宇宙航空研究グループは、精密機械部品製造の（有）工房大倉および北海道科学大学と共同で、令和7年夏の打ち上げを目指して小型人工衛星HMU-SAT2「てるてる」の開発に取り組んでいる。この取組の一環として、東京大学木曽観測所の高橋英則博士と協力し、南米チリからの中継授業を実施した。この授業は、WWLALネットワー



2 実施報告

ク校、県内SSH指定校、県外連携校にもオンラインで公開した。当日は、高橋博士による渡航記やTA0の詳細、彗星の撮影記録についての講義が行われ、リアルタイム中継を通じて観測所内のツアーや南米チリの星空の映像も提供された。

昨年の商業科・農業科の授業に続き、今年度は駒ヶ根工業高校の協力により、工業科の授業を提供いただいた。今後も専門学科を有する学校との連携を深め、普通科と専門学科の合同授業にも取り組んでいきたい。

信州WWLグローバル講座の取組

WWL事業協働機関との共創により、イノベーティブなグローバル人材の育成に資する学びの機会を提供することを目的に、実施機関が主催する「信州WWLグローバル講座」をオンラインで実施した。これらの講座については録画し、学習動画としてポータルサイトに掲載した。12月には本講座の成果報告会として、参集による信州WWLグローバルカフェを開催した。学習動画の制作にあたっては、招聘した講師に内容等の助言・指導を仰ぎ、県内の高校生が興味関心に応じて視聴できるよう努めた。以下、本年度実施した講座について報告する。

信州WWLグローバル講座実施要項

1 目的

- (1) 長野県WWLコンソーシアムALネットワーク参加校生徒に、文理横断的な多様な科目等によるグローバルで高度な学びに触れる機会を提供し、自らの学びを深める機会とする。
- (2) ALネットワーク内の他校生徒との交流を通じて互いに刺激をうけ、主体的に学ぶ態度の涵養を図る。
- (3) ALネットワークの取組を広く県内高等学校に還元する。

2 主催

長野県教育委員会

3 事業内容

協働機関関係者、運営指導委員、ALネットワーク校教員、卒業生、外部講師等による講義及びワークショップ等を実施する。

4 実施期日及び会場

第1回 令和6年6月4日（火）16:00～17:00（オンラインによる）
以降は講師と随時相談の上、設定する。

5 対象

- ・ALネットワーク参加校の生徒及び教職員
- ・ALネットワーク参加校以外の生徒及び教職員も参加可能とする。

6 参加方法

申込フォームから希望する生徒及び職員が直接申し込む。

7 参加費

無料とする。（但し、通信料等オンライン開催に参加するための通信費等諸経費に関しては参加者が負担する。）

8 令和6年度開講講座

(1) 「進路をデザインする一私の海外大学進学までのロードマップ」

実施日 第1回：6月4日（火） 第2回：9月4日（水）

内 容 海外大学への進学を目指すという決断に至るまでの経緯や、高校時代の過ごし方等、海外の大学入試事情について理解することで、海外進学を現実的な進路選択の一つとして考えるとともに、「自分らしい進路をデザインするヒント」を参加者とともに考える機会とする。



講 師 第1回 白井 まお 氏 （米国ノックス大学） 上田高校卒

第2回 加藤あすみ 氏 （英国エディンバラ大学） 松本深志高校卒

参加校 第1回 長野、屋代、上田、上田染谷丘、小諸商業、野沢北、諏訪清陵
諏訪二葉、伊那北、阿智、松本県ケ丘 （生徒21名、教員2名）

第2回 長野、長野西、上田染谷丘、諏訪清陵、松本深志、松本県ケ丘、
松本蟻ヶ崎、松本大学 （生徒12名、大学生1名）

【参加者の感想】

- ・海外、国内大学関係なく、メンターの方の高校時代の課外活動の話が印象深かった。
- ・アメリカのエッセイは大学進学後に何をしたいかではなく今まで何をしてきたかを書くということ。
- ・大学選びの時は直感が大切ということ、人それぞれ優位感覚があって、見て覚えるか聞いて覚えるか得意な方があるということ。
- ・「後悔は全くないが、ランキングを気にして学校を選んだ。直感に従っていたらどうなっていたかと思うことがある。」という話が、来年の留学先を考えている僕にとって大きな影響となった。
- ・IELTS試験について、大学の生活、奨学金について知ることができてよかった。
- ・大学受験は、与えられたことをこなして終わらせるものではなくて、自分が何をしたいかで決めるものだと感じた。

【成果・今後の展望】

ALネットワーク校の卒業生をメンターに迎え、「海外大学進学講座」と称して2回にわたり本講座を開催した。参加者アンケートでは、「とても良かった」（第1回：71.4%、第2回：75%）、「良かった」（第1回：28.6%、第2回：25%）と回答した生徒の割合から、参加者の満足度は高く、2回連続で参加した生徒も複数名いた。

各校において、海外大学を希望する生徒はまだ少数であるため、実施機関から学校の枠を超えて必要な情報を提供する仕組みが必要であると感じる。

(2) 「時代のリーダーに必要な要素とは？―若きリーダーと語る60分―」

実施日 10月15日（火）

内 容 グローバルな視野を持ち、世界で活躍できる「イノベーターなグローバル人材」育成を目指し、ALネットワーク校及び県内の高校生を対象に、社会で活躍するグローバルリーダーのキャリアパスや体験談に学ぶとともに、対話をとおして自身の主体的な進路選択の一助とするための機会とする。

講 師 高島 峻輔 氏（兵庫県芦屋市長）

参加校 屋代、上田、上田東、諏訪清陵、伊那北、伊那弥生ヶ丘、飯田風越、蘇南、松本県ケ丘、松本深志（生徒11名、教員4名、保護者1名）



【参加者の感想】

- ・リーダーとして仲間はどう頼るかの質問に対して、「頼ってないと思ってるのは自分だけかもしれない。仲間に実際に聞いてみるのが大事。」との返答をいただき、自分の中の問いの解決につながった。（生徒）
- ・「市民一人ひとりの可能性を拓く」「好きなことを一生懸命にやる」「学び『方』の違いに寄り添う」等の話は学校生活にも当てはまります。（教員）
- ・最後にお話ししていただいた「公立学校の魅力」が特に印象に残っています。私は公立にしか通ったことがありませんが、公立は良いな、と感じたことがなかったです。しかし、「公立学校は地域の学校」という言葉を聞いて、地域と繋がりやすいという魅力があるんだと気づけました。自分が通っている学校、公立学校をもっと良くしたいなという気持ちになった。
- ・色々な「まち」を見てきて、「高校（学校）に活気があると、まちも活気がある。だから芦屋市では教育に力を入れている。」というお話が印象的だった。（保護者）
- ・好きを追求することの大切さについて学んだ。（生徒）

【成果・今後の展望】

県立高校「未来の学校」構築事業研究指定校である飯田風越高校（ALネットワーク校）のアドバイザーを務めている高島峻輔氏をゲストに迎え、「なぜ学ぶのか」「リーダーシップ」「まちづくり」をテーマに、高校生、教員、保護者による60分のトークセッションを開催した。事後アンケートでは、参加者全員が「とても良かった」と回答しており、本講座の満足度は高かった。

高校生のほか、教員や保護者も参加し、高島氏の高校から大学での学びや、NPO法人代表としての活動を経て現在に至るまでのキャリアパスを知ることで、学ぶことの意味と社会参画の在り方について自分事として捉えるとともに、これからの時代のリーダー像について考える機会となった。

(3) アカデミックプレゼンテーション講座

- 実施日 第1回：10月29日「入門編 論理の設計図をつくる」
 第2回：11月8日「実践編① 三部構成スライドの作り方」
 第3回：11月20日「実践編② 発表の仕方」
 第4回：12月14日「総集編 特別講義と成果発表」
 ※第1回～3回：オンライン開催 第4回：参集開催

内 容 学際的研究の場で必要とされるアカデミック（学術）プレゼンテーションについての講義と実践発表を通して、効果的なプレゼンテーションスキルを身に付けるとともに、これからの社会で求められる自らの考えを多様な他者へ英語で論理的に伝えるための発信力およびグローバルなコミュニケーション力の向上を目指す。

講 師 蝦名 恵 氏（グローバル教育企画社 ポストブリッジ 代表）

参加校 長野、屋代、上田、上田染谷丘、諏訪清陵、岡谷東、伊那北、飯田、飯田風越、蘇南、木曽青峰、松本県ケ丘、松本深志 （生徒14名、教員10名、保護者1名）



【参加者の感想】

- ・「プレゼンテーションは聴衆と一緒に歩くための旅」という言葉が印象に残った。生徒が課題発表を英語で行う際、自分が伝えたい内容を聴衆が理解しているかを発表の要所要所で確認することを意識できるようになると良いと感じた。
- ・多くの生徒に聞かせたい内容だった。効果的なアカデミックなプレゼンのノウハウがコンパクトにまとまっていた。
- ・聞く力、話す力の重要性を改めて認識できた。聴衆のニーズを理解することの大切さを感じた。
- ・発表の途中で話の要約を示す、ゆっくり丁寧に話す、間を取る、専門用語を噛み砕くなど、聴衆を迷子にさせない工夫がたくさんあると分かった。「シンボルと数式」の英語表現が難しかった。質疑応答では、確かめながらゆっくり答える、キーワードを意識することが大切だと分かった。言語によって音節が異なるというのは考えたことがなかった。
- ・授業は丁寧で分かりやすく、アーカイブ動画や振り返り・質問フォームを毎回出してくださり、後から何度も確認できたのが良かった。プレゼン作成では何度も連絡を入れてくださり、親身な指導をしていただいた。参加者がもっと集まると良い。
- ・オンライン開催だったので、学校や家からも参加できたのが良かった。学校では詳しくアカデミックプレゼンテーションのやり方は習わないので、初めてのことを学ぶことができて良かった。

【成果・今後の展望】

本講座は、第1回から第3回まではオンラインで開催し、第4回目は成果報告会と位置づけ、長野県総合教育センターを会場に参集により開催し、受講者のうち4名の有志生徒が発表を行った。4回目の講座では、蝦名氏のほか、グローバル教育企画社ポストブリッジ共同代表の猿橋氏とボストン大学リサーチフェローのサイラス氏を講師に迎え、生徒の発表に対して指導助言を行った。

WWL事業においては、海外をフィールドにグローバルな社会課題の解決に向けた探究的な学びを実現することが求められている。本県のALネットワーク校では、探究の成果を英語で発信する機会を提供している学校も増えてきている。一方で、英語による「アカデミック（学術的）プレゼンテーション」については体系的に指導されていないこともあり、海外の学会発表経験のある講師による論理構成に基づくプレゼンテーションの基礎講座は、受講した生徒全員が「とても良かった」「良かった」と回答しており、生徒はもとより教員にも大変好評であった。来年度も引き続き実施していきたい。

(4) 信州WWLグローバルカフェ（成果報告会）

主 催 長野県教育委員会（実施機関）

実施日 12月14日（土）

会 場 長野県総合教育センター 第1研修室

内 容 県内の高校から集まった生徒・教員が一堂

に会し、学校の枠を超えて互いに学び合う機会とする「第2回長野県高校生探Qフェ

スティバル2024」を開催した。この一環として、ICTを活用した本事業における学びの成果報告会である「信州WWLグローバルカフェ」を実施した。今年度は、前述のアカデミックプレゼンテーション講座受講生による成果発表と、JICA長野デスクと共同による高校生の国際協力活動の取組発表を行った。当日の日程は以下の通り。



【午前の部】

(1) テーマ

「信州WWLグローバル講座 アカデミックプレゼンテーション講座【総集編】」

(2) 内 容

- ・グローバルリーダーシップに関する講演
- ・受講生徒によるアカデミックプレゼンテーション発表
- ・講師による助言及び参加者による座談会（トークセッション）

(3) 講 師

サイラス・セガワ・コンスタンティナコス 氏（ボストン大学リサーチフェロー）

蝦名 恵 氏（グローバル教育企画社 ボストンブリッジ 代表）

猿橋 あや子 氏（グローバル教育企画社 ボストンブリッジ 共同代表）

神谷 日奈子 氏（カナダ サイモン・フレイザー大学2年 上田高校卒業生）

(4) 参加校（オンライン視聴者除く）

屋代、諏訪清陵、伊那北、飯田、松本県ヶ丘、松本深志（生徒8名、教員7名、保護者2名、一般4名）

(5) タイムスケジュール

時 間	内 容
9:30～10:00	参加者受付、オンライン接続確認 等
10:00～11:00	講演会：Intercultural Development: The Key to Shaping Japan's Next Generation of Leaders 異文化能力の深化—日本の次世代リーダーに求められるマインドとは— 講 師：サイラス・セガワ・コンスタンティナコス氏 （オンライン参加）
11:00～11:10	休憩・準備
11:10～12:10	生徒による発表（15分×4人）及び講師からの助言 ①An Anatomical and Physiological Study on the Adaptation Mechanism to Stimuli of Mimosa Pudica L. 諏訪清陵高校1年 ②Elevator will make human-friendly school-Towards open, inclusive, and diverse school- 屋代高校1年 ③Fast Fashion's Light & Darkness-How to practice social fairness- 松本深志高校1年 ④Getting lost and finding myself -Nurturing dream in high school- 松本県ヶ丘高校3年
12:10～12:30	参加者による座談会、本日の振り返り

【参加者の感想】

- ・今後、さまざまな状況下でリーダーとしての役割や力が求められる時に思い出したいお話だった。参加意欲のない人をどう扱うかは、活動をより良くするために大切だと思った。論の中心は掴めたが、具体例などは英語のレベルと速さに少しついていけなかった。英語力を高めたいと思った。
- ・理想とされるリーダー像だけでなく、今回のアカデミックプレゼンテーションと同じで、聴衆や他の周りをどのように巻き込んでいくかなど重要なことを改めて考え直すことができた。
- ・“リーダーシップ”という言葉について、どのような捉え方があるのかについて今まで考えたことがなかった。リーダーとフォロワーが状況によって作られるということ、日本での実例を示しながら説明していただけたおかげで、ずっと理解できた。グループワークでも過去の経験を振り返る際、この観点から考えることができてよかった。
- ・さまざまな学校の生徒が参加できる形で企画してくださりありがとうございました。今回のプレゼンターのうち3名が一年生なので、来年度も企画が実現すれば、アドバイスをしたり、一緒に共同するような形でアカブレコミュニティに関わっていけるといいと思った。今回の発表はどれも素晴らしかったので、次年度以降の方の参考としてアーカイブしていただけると嬉しい。



【午後の部】

(1) テーマ

WWL×JICA「高校生が国際協力について考えてみた」

(2) 内 容

高校生による国際協力活動の発表及びJICA関係者による助言

参加者による「高校生ができる国際協力」についてのトークセッション

(3) 発表校

伊那北高校、文化学園長野高校、野沢北高校、上田高校

(4) 助言者

JICA長野デスク ムーア美紀 氏

JICA派遣中海外協力隊員 3 名（派遣地域：ミクロネシア、キルギス、ナミビア）

(5) タイムスケジュール

時 間	内 容
13:30～14:00	参加者受付、オンライン接続確認 等
14:00～15:10	高校生による発表（15分×4チーム） 「カンボジア研修で変わった“ものの見方”とその後」伊那北高校 2年 「廃油石鹼プロジェクト-Beyond Borders」文化学園長野高校 2年 「Small Changes make Big Impacts.」野沢北高校 世界を考える会WTC 「カンボジア井戸プロジェクト」上田高校 カンボジア井戸プロジェクトチーム
15:10～15:30	JICA関係者と参加者による座談会、本日の振り返り

【参加者の感想】

- ・他校の高校生の活動を聞いて本当に衝撃を受けました。高校生ながらここまで世界の役に立とうと行動しているのがすごいと思いました。自分たちもまだできると感じました。
- ・ハイブリッド形式で開催していただいたので、参加しやすかったです。もっと多くの人に発表を聞いてもらえればいいなと感じました。
- ・カンボジア研修に行くにあたって現地のこと、そして何より行動を起こすことの大切さを痛感したので頑張りたいと思いました。
- ・トークセッションのような、みんなの考え方などを交流してそこから新たな問いが生まれるような時間があつたらもっと良くなったと思います。
- ・他校の人の活動や思いを知ることができ、とても良い経験になりました。次こそはオンラインではなく実際に会ってJICAの方のお話を伺ったり、各校の皆さんと自分たちの活動についての話し合いをしてみたいです。
- ・JICA青年海外協力隊員の現地からの参加は生徒たちにとって新鮮で、大きな刺激になり、今後の活動にプラスになると思います。

- ・ 1つの企画を行うには相当な準備が必要であったと容易に推測できます。活躍している生徒が、学校以外で自分たちの活動内容を発信できることは大きな喜びに繋がります。今回のような生徒に寄り添った会を企画していただき心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



【成果・今後の展望】

午前の部では、ボストン大学の講師とカナダの大学に在学中のALネットワーク校出身の卒業生をメンターに迎え、ボストン・カナダ・長野をオンラインで繋いだ。オンラインで開講した信州WWLグローバル講座「アカデミックプレゼンテーション講座」を受講した4名の生徒が英語でプレゼンテーションを行い、学んだ成果を披露し、講師やメンターからの助言を得て内容をブラッシュアップすることができた。

成果発表会に先立ち実施した講演会では、ハーバード大学のバーバラ・ケラーマン教授の論文「Leadership is a System, Not a Person!ーリーダーシップはシステムであり、人物を意味するものではないー」を題材に、リーダーシップとは何か、日本の学校におけるリーダーシップを醸成する教育システムについて説明があった。講師はリーダーシップが成り立つ3要素“Leader”（リーダー）、“Followers”（構成員）、“Situation”（状況）について触れ、参加者はこれらの関わりがリーダーシップに大きな影響を与えることについて知見を深めるとともに、異なる文化背景を持つ人々と効果的にコミュニケーションを図り、理解し合う能力「Intercultural Competence（異文化適応能力）」の重要性についても学ぶ機会となった。

午後の部では、JICA長野デスクの協力により、ミクロネシア、キルギス、ナミビアに派遣中の協力隊員にリモートで参加いただき、国際協力に関する高校生による多様な視点からの活動発表と意見交換を行った。プロジェクトの協働の可能性を見いだすなど、参加した高校生は他校生徒の活動や思いを知り、刺激を受けたことが窺える。JICA海外協力隊員からは、高校生の発表に感化され、今後の自身の活動にプラスになったとの声が寄せられた。当日は会場にJICA展示ブースを設置し、高校生の国際協力・異文化理解に関する興味関心の喚起を図った。

当日は、オンラインと対面のハイブリッド形式で開催され、ALネットワーク校の他生徒の保護者も参観可能とした。会場には学校関係者のほか、中学生や一般の方の参観もあり、本事業による生徒の学びの成果を広く公開、発信することができた。来年度も本事業における学びの成果報告の場として内容を充実させていきたい。また、より多くの参加者を募る工夫や、連携校の教員、卒業生が運営に参画してもらえるような動機付けを考えていきたい。

ALネットワーク拡充に向けた連携交渉の取組

WWLコンソーシアム構築にむけたALネットワークの更なる拡充を目的として、3校の提供校関係者による連携交渉を行った。参加者は連携交渉の成果として、オンラインを活用した授業交流や高校生国際会議の企画開催等、令和7年度以降の事業推進とネットワーク拡充に向けた具体的な取組を提案するとともに、1月28日（火）開催の第2回運営指導委員会内で今回の連携交渉の報告を行った。

(1) 連携交渉先

北海学園札幌高等学校

(WWLカリキュラム開発事業2021年指定校) 北海道札幌市豊平区旭町4丁目1-4

(2) 実施日

令和6年12月12日（木） ※11日（水）、13日（金）は移動日

(3) 目 的

北海学園札幌高等学校が開催予定の「WWL Snow Crystal Project in Hokkaido 高校生国際会議」へ実際に参加し、オンラインを有効に活用した実施内容や方法について、関係教員から直接教示を受けること等を通して、本県が開催する成果報告会「高校生国際会議」における学校や県境といった枠組みを越えた高校生同士による深い学びの実現に繋げる。

(4) 参加者

松本県ヶ丘高等学校 腰原 智達 校長

宮坂 正義 教諭、浅輪 賢史 教諭

宮下 達郎 教諭、渡邊亜希子 教諭

野沢北高等学校 田中 聡 教頭

蘇南高等学校 藤居 賢 教諭

(5) 日 程

10:00～12:20 探究活動成果発表会

発表順 北海学園札幌高校、北海高校、北海道白老東高校、
北海道平取高校、北海道標茶高校、
北海道帯広農業高校、北海道富良野高校

12:45～13:50 高校生国際会議

基調講演 講師：北海道大学 山中康裕教授

高校生国際会議の開催意義を説明。今回の高校生国際会議のテーマは「気づかなかった『当たり前』に気づくこと」。SDGsの視点で世界を見て視野を広げることと英語を介して対話することの重要性を説明。

14:10～15:20 VISIT THE WORLD①

7つのブース（5か国）に分かれて、北海道大学の留学生の英語による母国の状況や課題のプレゼンテーションを聞く。英語で質問している生徒もいた。外国語担当の教員が通訳（コーディネ



ータ)として参加。翌日のVISIT THE WORLD②に参加することで2か国の状況を把握し、ワークショップで意見交換。グローバル課題への提言につなげる。

16:10~17:20 連携交渉 (会場: 北海学園札幌高校校長室)

北海学園札幌高校側出席者:

竹越広志校長、天沼和哉教頭、小林真史国際教育連携部長、

マーク ホロウエイ同部副部長、倉内瞳同部事務職員

※福島県ふたば未来高校の職員も同席 (同日北海学園札幌高校を訪問)

【懇談内容】

- ・高校生国際会議開催の経緯: 今年度から開催。2日間開催による深化を期待。
- ・高校生国際会議の運営: 北大山中教授の支援の下、WWL事業拠点校中心に運営。
- ・海外の高校生の参加: 今年度は大学の留学生で対応。札幌高校の交流先のウェリントンや台湾は参加が難しかった。
- ・海外の学生(高校生等)との交流拡大: 難しい。ウェリントンと台湾以外に広がらず。
- ・今後の課題: 来年度から自走する上で、費用面での課題が多い。

(6) 連携交渉内容

いずれはALネットワーク同士の連携も視野に入れながら、その第一歩としてまずは学校間連携について協議。可能なところから進めていく点で合意。具体的内容は次の通り。

- ・WWL事業最終年度の3年目を迎える北海学園札幌高校が、来年度も開催を予定している高校生国際会議へ、本県からの生徒参加(参集またはオンライン)
- ・管理機関の学校法人 北海学園による、本県における高校生国際会議開催の研究に向けた指導・助言
- ・各校の課題探究発表会への生徒のオンライン相互参加(松本県ヶ丘、野沢北、蘇南)
- ・「縣陵WWL2024講座」等のオンライン講座への参加
- ・地域課題に関する探究学習のオンラインによる生徒の相互交流(蘇南)
- ・教科等横断的な学び、文理融合的な学びに係り、オンラインによる教員同士の情報交換・相互交流
- ・探究テーマ設定時の教材に山中康裕教授による気候変動に関する講義内容を活用。

※上記内容に沿い、福島県立ふたば未来高等学校とも今後連携を深めていくことで合意。

(7) 参加者の感想等

- ・令和4年度に、本県でも拠点校の上田高校をメイン会場として国際会議を開催したが、県教委が管理機関として拠点校及び共同実施校、連携校の担当教員を動かし、生徒実行委員会を組織して行うという方式は、特に担当主事にとって計り知れない労力・負担であったと再認識した。その点、私立の学校法人を管理機関としている北海道の場合、施設面でもマンパワーの面でも恵まれていると痛感したところである。今期訪れた北海学園札幌高校は、同じ敷地内、徒歩3分圏内に大学(北海学園大学)が存在しているが、この大学入り口は地下鉄の駅から直結しており、公共交通機関の利便性はこの上ない。施設面でも映像・音響設備を完備した大学の教室を簡便に活用できる。さらに、外部人材の活用という面で

2 実施報告

も、大学に在籍している留学生に依頼することで、世界各国の多様な社会課題について採り上げることが容易となる。併せて、事前打合せ等も行いやすい。

- ・現在、全国で展開しているWWL事業の大半が、私立を中心とする大学及びその付属高校という学校法人を管理機関として行っている。今回の連携交渉により、その理由を肌で体感した。しかしその一方、北海道同様、広大な面積を有する中、約80校もの高校が、都市部のみならず中山間地にも散在する本県において、私立学校法人ではなく、あえて県教委が管理機関として高校現場の生徒・教員と力を合せ、地理的条件や施設・設備等不利な環境を克服しつつ、文字通り協働的に創り上げた令和4年度開催の高校生国際会議について、全国的にも誇るべき稀有な実践事例であると再評価する貴重な機会となった。
- ・海外の高校生等との交流をどのように広げていくのか、札幌高校も拮据がりについては課題を持っていた。自治体や修学旅行によるつながり以外に交流先が拮がらないようである。海外の高校生等のつながりを拮げる取組については、大学や国際関係機関等との連携が必要になると感じた。県内にある大学やJICAと連携した取組を検討することで開拓の可能性を探っていく必要を感じた。
- ・国際会議での北海道の高校生の発表は、地域課題に関する探究が主であり、本校の探究活動と共通している点が多かったことから、他県の高校生の探究活動から本校の生徒が学べることが多いと考えられる。来年度はWWL事業と関連して、北海道の探究活動発表会をオンラインで本校生徒が視聴できる環境を整えることに加えて、本校で行っている探究発表会に北海道の高校生をオンラインで招待することを依頼していきたい。

令和6年度 WWL個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業に係るアンケート

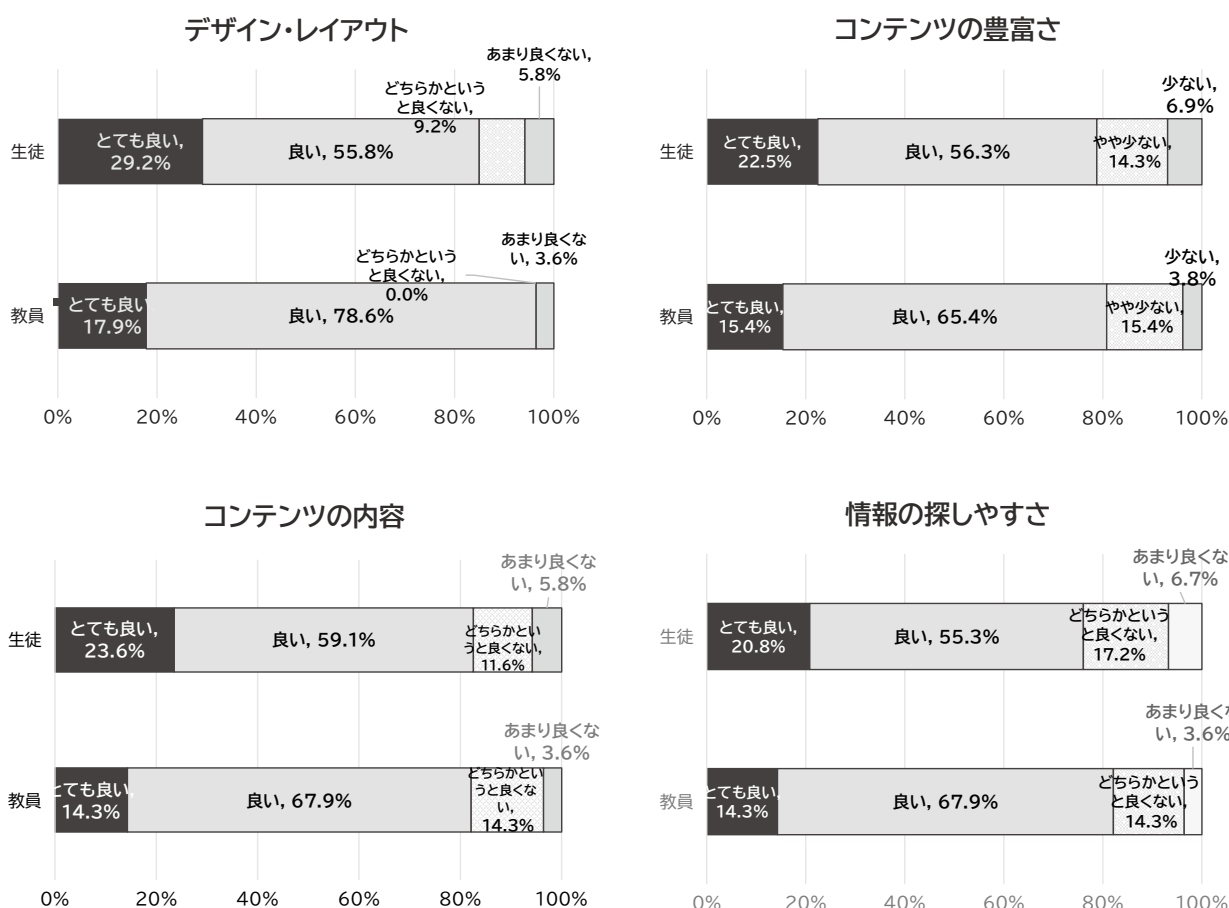
実施機関: 令和6年11月～令和7年1月 回答方式: Google Forms

対象: 生徒: 提供校・被提供校生徒(1, 2年抽出クラス) 521名

教員: ALネットワーク校事業担当及び探究担当、実施機関関係者28名

「まなび助ポータルサイト」に関するアンケート

サイトの使用感



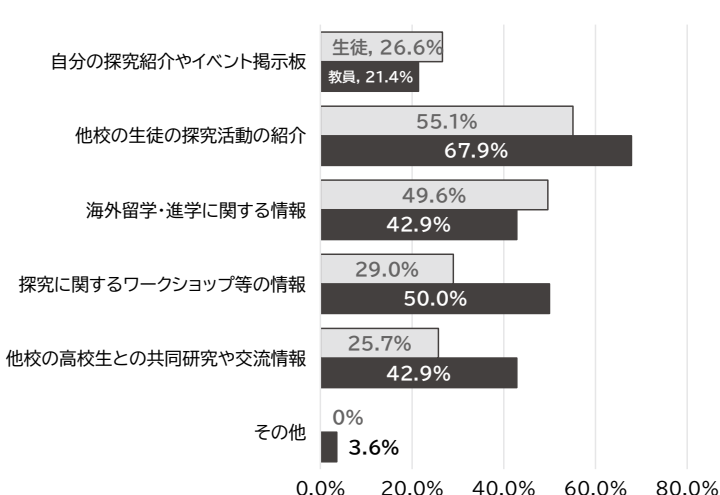
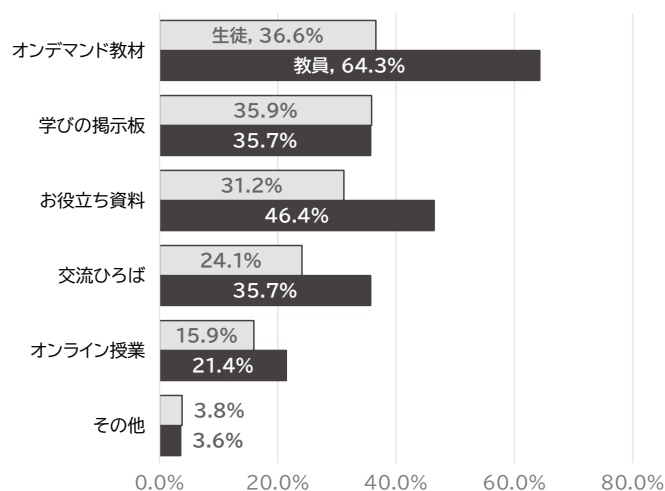
【分析】

「デザイン・レイアウト」については、生徒の満足度が全体的に高い一方、前年より「とても良い」評価が減少(R5: 32.5%)。視覚的デザインやレイアウトの改善が求められる。「コンテンツの豊富さ」については、教員において「やや少ない」評価が15%と一定の割合を占めている。追加コンテンツのニーズが高い。「コンテンツの内容」については、生徒の「とても良い」評価が前年より減少した。(R5: 28%)。「情報の探しやすさ」については、検索機能の改善について、検索性向上に向けたサイトのアップデートが必要である。

掲載コンテンツについて

高評価コンテンツ

こんなページが欲しい！



【特によかったコンテンツ】(生徒)

#海外進学、海外留学についての情報(回答多数) #国連に関する動画 #オンデマンド教材 #「高校生が国際協力について考えてみた!」の動画 #信州つばさプロジェクト #お役立ち資料 #探究についての交流広場 #探究基礎講座 #世界が100人の村だったら #探究Buddy & 情報掲示板 #ケニアのマサイ族長老と考える「アイデンティティってなんだろう?」 #信州WWLイベントカレンダー #高校生の高校生による高校生のためのイベント #理数探究のページ #検索ボックス

【分析】

具体的な掲載コンテンツについて、生徒教員とも、「他校の生徒の探究活動の紹介」コンテンツを希望する声が多い。生徒には、オンデマンド教材や掲示板、お役立ち資料のほか、昨年度に引き続き、「海外進学留学情報」が特に支持されている一方で、「使ったことがない」という声も一部見られるため、利用促進のための今後の工夫が必要であると考えます。教員には、探究活動において、他校の生徒や地域とのかかわり等生徒に「外」を意識させるといった活動を重視したいという思いから、「交流ひろば」が他校の生徒との情報交換の窓口となればと今後の活用を期待する声もある。

ポータルサイト全般に対するコメント (生徒)

- ・ お役立ち資料について、実際に動画があったりして非常に良いと思いました。(複数回答あり)
- ・ 日本国内だけではないお役立ち資料の動画があって、日本国内の人の動画はもちろん、ケニアの方のお話も視聴することができるのでとてもありがたい資料だなと思いました。
- ・ 探究の仕方を詳しく教えてくれていたこと、わかりやすくまとめられていて読みやすかった。
- ・ 学校などに行かなくてもオンラインで授業ができること。
- ・ 交流広場で地域のイベントを知れるのが嬉しいなと思いました。
- ・ 面白かった。
- ・ 探究に有効な資料がたくさんあったり、これからグローバル化していく中で必要となる世界的な考え方や世界との繋がる機会を作ってもらえるというのはとても嬉しい。
- ・ 様々な動画があって興味を惹かれた。
- ・ 写真と一緒に資料も掲載されていてよかった。
- ・ いろいろなことが分かる。
- ・ 探究の方法がステップごとにまとめてあるので分かりやすいし取り組みやすいと感じた。

(教員)

- ・ Googleサイトでの運用は誰でも(担当者がかわっても)扱いやすいのでとても良いと思います。
- ・ 手違いか、サイトにアクセスできず、不十分な回答で申し訳ありません。
- ・ サイトのご準備ありがとうございます。面白い内容や役立つ内容があると感じているので、文字だけでなく視覚に訴えるサイトデザインになると、さらに活用の機会が増えるのではないかと感じました。
- ・ 色々な情報の積み重ねで年々、バージョンアップしていくと思います。何かご協力出来ることがあれば率先して参加したいと思います。

ポータルサイトの活用アイデア・提案

(生徒)

- ・ 探究のテーマ決めに繋がるページがあるとよい。
- ・ What's new の掲示板が見えづらい。
- ・ 学校のGアカウントでなくても見られるようにしたり、サイトを開いたときに何が掲載されているか分かりやすく掲載してほしい。
- ・ もっと高校生向けのデザイン(見たくなる、押してみたいくなる)の方が興味を抱きやすい。授業の探究のみの活用ではもったいないが、探究を自ら取り組む高校生は少ないため、敷居を低くすることで、覗いてみる人、興味をもって活動してみようとする人が増えると思う。
- ・ 長野県のイベントやボランティアや留学について調べても、都市部とは違い情報が少なく諦めることが多かった。その時にすぐにこのサイトを見つかることができたらいと思った。

(教員)

- ・ 本校のICT研修でChat GPTについて研修を行いました。研修会の内容で主だったものがあれば掲載もよいと考えます。
- ・ 探究活動における実践事例の紹介
- ・ 各校の探究要旨集を一覧で見ることが出来る場所があると良いなと思っています。また、長野県から海外大学に進学するハードルが依然として高いので、そのハードルを下げるためのイベントを今後も開催していただけると嬉しいです。
- ・ 課題研究を進める上で参考になるWebサイトを紹介する時に活用できる。
- ・ 探究学習を進める上で、困っている生徒及び教員に対し、参考の1つとして紹介すると良いのでは。
- ・ 義務教育段階においては、高等学校で理想として掲げられている「探究」的な学習活動は、多くの学校において実践できていません。探究のサイクルを回すとか、リサーチクエストとはどういうものか、仮説を立てて検証するとか、提案に対して建設的な批評を加えるとか、そういったレディネスは全くない状態で高校に入学してきます(極少数の例外を除く)。そのような状況下で、ポータルサイト掲載コンテンツは一筋の光明になるかと思います。おそらく「探究とは何か、その始まりから終わりまで、そこからのさらなる飛翔」みたいな入門コンテンツがこれから作られるものと思いますが(すでにできていたらごめんなさい)、ぜひ活用したく思います。
- ・ 「探究基礎講座」のコンテンツを総合的な探究の時間で活用する。
- ・ オンデマンド教材の活用
- ・ ポータルの存在をより周知していきたい。
- ・ 生徒に他校の活動を見せて、視野を広げさせる。
- ・ お役立ち資料に掲載されている動画は、生徒が自身の探究活動の合間に興味関心に応じて見る事ができるのでありがたいと思いました。
- ・ テーマ決め

- ・ 動画コンテンツを活用して、課題研究の具体的なイメージをつくってもらうために活用したい。
- ・ 生徒が探究活動などで行いたい調査(アンケート)などがこのサイトを通してできると良いと思います(ただし結果の信用度などの問題はあると思いますが)。
- ・ 他校の探究実践や外部コンテスト等に関する情報を得るために活用することが考えられます。
- ・ 生徒が探究活動で躓いたら誘導する。
- ・ 1年次に実施している「課題研究基礎」の中で探究基礎のコンテンツが利用可能です。
- ・ 探究活動の導入
- ・ 「こんなことやってます！」みたいな少し軽い感じで、他校の探究の様子(探究テーマ一覧など)がわかると生徒達もチェックしやすいと感じました。
- ・ 探究の時間で導入教材になりそう。
- ・ 生徒にポータルサイトを紹介し、興味のある分野について使えるようにする。
- ・ 「探究基礎講座」を教材として使う、生徒に自由に利用させる など。

ポータルサイト提供可能なコンテンツ（教員）

- ・ 一人一研究テキスト、過去の探究用紙、STEAM探究の共有
- ・ 小論文講座における外部講師による講義
- ・ グローバル講師が構想し、本校で実践した「異文化理解」の授業実践
- ・ 探究行事の配信
- ・ 教科間連携授業の様子の動画をアップさせてください。
- ・ 国際教養科としては、現在のところ検討中です。
- ・ 探究のテーマ内容、個人名を伏せた形で一覧を出すのは良いでしょうか。

【分析】

生徒にとって、お役立ち資料や動画の充実、探究活動の進め方の分かりやすい説明など、探究的な学びを深める要素については好評である。教員からは、他校の実践事例に関する情報を共有することを望む声も多い。一方、アクセス性や操作性についての課題として、特に資料へのアクセス制限やサイトレイアウトについて、初見での分かりにくさが指摘されている。また、高校生が興味を持ちやすいデザインや直感的でわかりやすい構造が求められている。また、探究のテーマ設定に資するコンテンツや留学情報や地域のイベント、ボランティア情報等、県内在住であっても、都市部の高校生と同様の情報を入手できるプラットフォームの構築を望む声もある。

ポータルサイトの改善にむけて

ポータルサイトは生徒・教員から概ね好評であったが、操作性や情報検索の面で不便を感じる声もあった。今後、アクセス性や利便性をさらに改善し、地域イベントや留学情報などを充実させることで、都市部との情報格差を解消する方策を研究する必要がある。

教員からは、ポータルサイトの利便性やコンテンツの高評価が寄せられており、特に生徒の探究活動や視野拡大への支援に有効であるとの認識が見られた。掲載コンテンツについては、探究活動の導入時や生徒が活動で行き詰まった際に活用できるリソースとして期待されている。

今後は、サイトの周知不足や利用のしづらさといった課題を改善し、さらに多くの学校や生徒が積極的に活用できる場を目指す。また、新年度における探究初期指導での活用を促進するとともに、他校の探究事例や外部イベント情報、動画を活用した探究活動の具体例などを追加することで、コンテンツの充実を図る。

さらに、協働機関の助言を受けつつ、サイトの改善に努め、デザインやアクセス性の向上を図る。同時に、アンケートなどを通じて生徒や教員のニーズを把握し、柔軟に対応する。

これらの取組により、ポータルサイトが全県の高校生にとって、いつでも、どこでも利用できるものとなり、日々の探究活動を深めるために有効活用されるよう改善に努めたい。

オンライン合同授業に関するアンケート

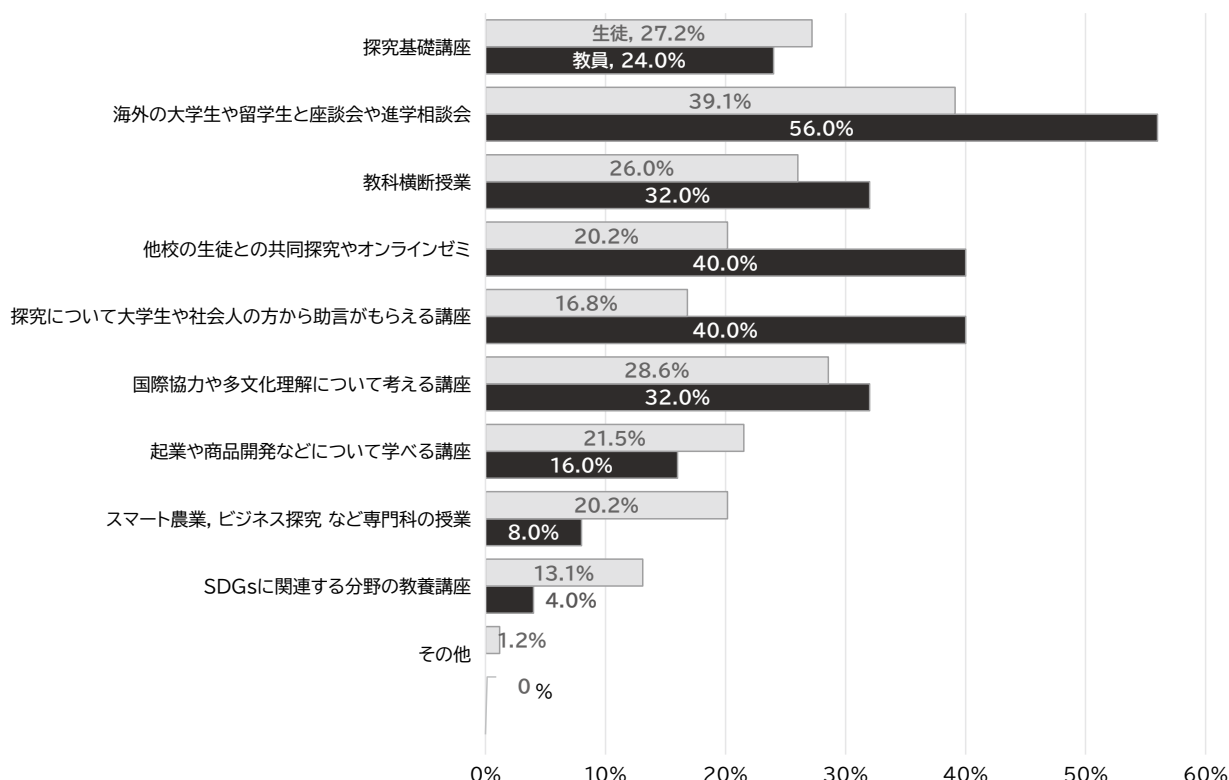
オンライン授業の経験(海外の学生との交流も含む)



【分析】

生徒については、前年の経験率(R5:8.0%)と比較すると、増加がみられるものの、多くの生徒がオンライン合同授業の体験は無い。授業時間の調整やお互いが希望するテーマのマッチングや必要性、オンライン配信準備等の技術的な制約が影響していると考えられる。今後の実践経験のある教員の事例の共有が必要である。

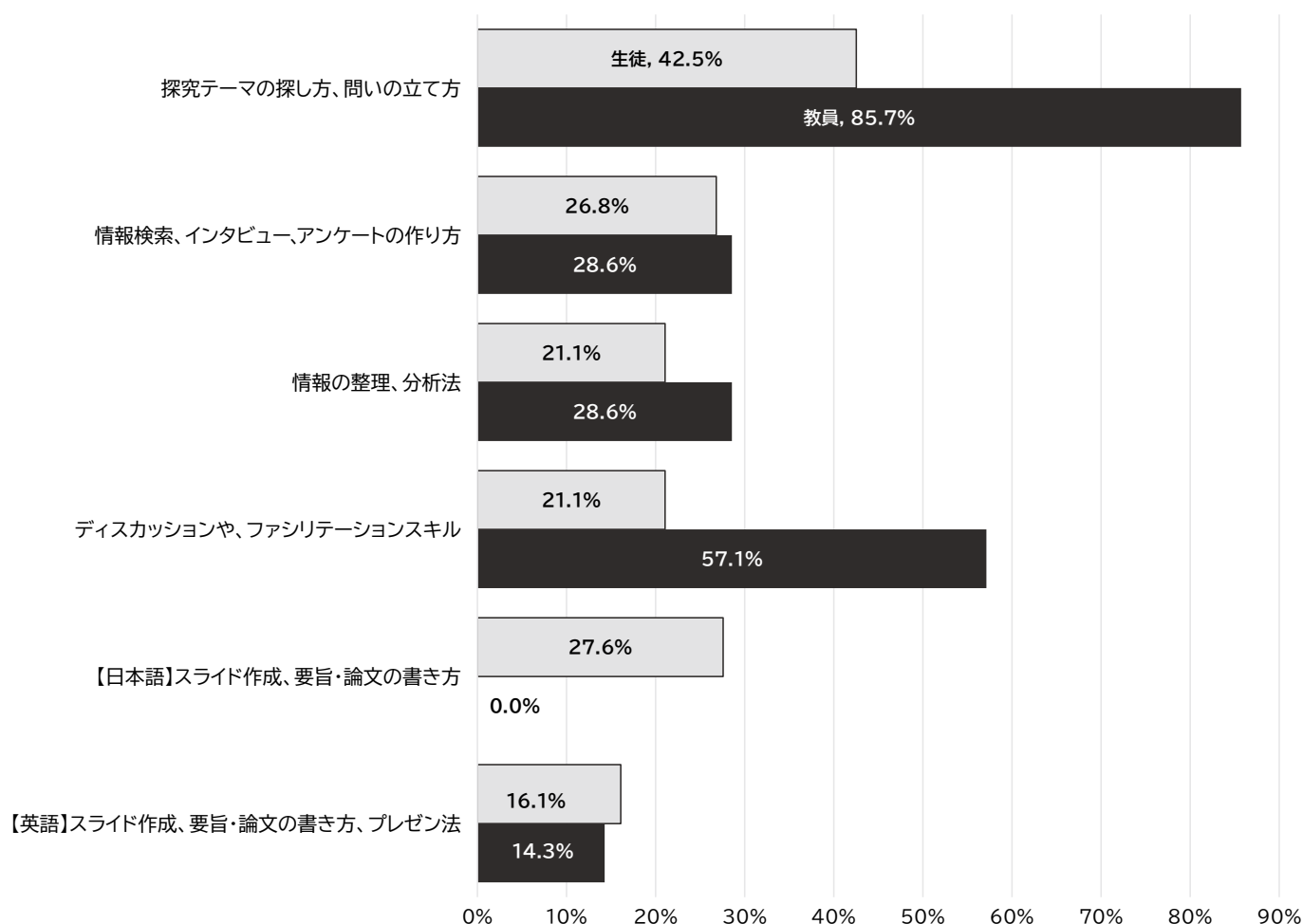
こんなオンライン合同授業やってみたい！



【分析】

生徒については前年と比較して、「海外の大学生や留学生との座談会」への関心が増加しており、グローバル志向が見られる。教員も国際的な交流や他校生徒との共同研究に関心が高く、生徒のニーズと一致している。また、起業や農業分野など専門性の高い学びへの興味を示す生徒も一定数いる。教員については、生徒の探究活動について大学生などのメンターからの助言を得られる講座への関心が高い。両者とも、探究活動に関する講座についての関心と比べると、専門分野に特化したテーマへの興味は低い。

「探究基礎講座」の中で受講したい講座



【分析】

生徒の「課題の設定(テーマ設定、問いの立て方)への関心が高く、昨年度(R5:40.5%)と比較しても微増している。「情報の整理・分析」の手法に関する関心も昨年とほぼ同じ割合であり、基礎的な学習へのニーズが高い。スライド作成、要旨・論文の書き方、プレゼン方法に関心を示した割合も、前年よりわずかに増加している。教員については、「課題の設定」が最も高い割合を示している。ファシリテーション法や情報収集法など学習プロセスに対する関心と比べると、発表に関連する「スライド作成やプレゼン法」といったアウトプットの指導に対する関心は低い。

オンライン合同授業に関するアイディア・事業への要望

(生徒)

- ・ グループに分かれて一緒に何かを考えたりしたい。
- ・ 他校の人たちと一緒にディスカッションできたら面白い。(回答複数)
- ・ 学校対抗ディベート大会
- ・ 探究のアイディアを紹介し合う。
- ・ 探究や自分の興味のある分野について、とことん追求する授業をできたら面白い。
- ・ またやってほしい。
- ・ 自分の活動を評価してもらえる仕組みがあるといい。

(教員)

- ・ 探究発表会の視聴
- ・ 時間割の調整(公欠のお願いなど)が非常に大変ですが、生徒の満足度と学習や進路実現への動機付けにはとても良いと考えます。特に海外とのやり取りの場合は時差などもあり、3コマ程度を確保する必要があるため、多くの先生方にこのような点を理解してもらえるとありがたいと感じています。
- ・ 福島高校のオンライン発展講座のパブリックビューイングのように、「ついでにどうぞ」的に面白い講義を聴く。主催する必要はなく、面白そうなものを見かけたら紹介すればよいと思う。
- ・ ICTの活用
- ・ 特になし、対面式を重視したい。
- ・ 教師が広くオンライン合同授業を活用できるような研修を提供していただけるとありがたいです。
- ・ 海外の同世代との交流ができるだけでも高校生にとってはよい刺激となると考えます。
- ・ 質を求めつつも、そういった交流の機会が多く設定していただけると校内での取り組みの動機付けにもなりやすいと考えています。
- ・ 各校で行われる講演等を講演者の方からの許可があれば、他校の生徒もオンラインで参観できるといいのかなと思っています。
- ・ 英プロ発表会(毎年行われる本校の英語によるスピーチ大会)でオンラインによる他校の参加や外部講師からの評価をいただきたい。
- ・ 実施の際、ICT機器の準備及びオンライン接続等技術的な部分について、現場の教員が対応するのはやはり負担が大きいので、実施支援機関である総合教育センターの全面的な支援が必要不可欠。
- ・ 出来る限り多くの海外の学校との交流をしたいと思っています。
- ・ 外部の人にアドバイスを頂ける機会があると思います。常設はなかなか難しいとは思いますが。
- ・ 日本から海外の大学に入学して頑張っている生徒の生の声を聞く。
- ・ WWLに限らず、オンライン授業は今や必須であり、現場はもとより県の施策として進めていくことが急務であるとする。教員不足への対応と生徒の学びの保障という観点からも、北海道のT-baseなどに倣い、遠隔授業配信センターを総合教育センター内に早急に立ち上げ、体制を構築してほしい。

オンライン合同授業実施に向けた今後の展望

生徒の回答からは、他校とのディスカッションや探究アイデアの交換、自己の探究活動の評価方法を求める声が多く、学校外の生徒との学び合いの機会を期待していることが分かる。「学校対抗ディベート」や「探究を追求する授業」といった実践的で創造的な活動を日常の授業に取り入れ、他校の生徒との意見交換を通じて学びを深める機会を望んでいる。

アンケートに回答した教員からは、オンライン合同授業に対して前向きな意見が多く寄せられ、特に「海外との交流」を貴重な経験と捉える声が多い。また、「ICTの活用」や「各校の探究報告会のオンライン参観」に関心を示しており、オンラインを日常の授業に効果的に活用し、新しい学びの形を取り入れようとする姿勢が見られる。一方で、ICT機器の準備や接続配信に関する支援、教員向け研修の充実を求める声もあり、これらのサポート体制の整備が必要である。

オンライン合同授業の教育的効果についてより多くの教員が理解を深められるよう、これまでの実践事例を県内の学校へ共有するとともに、学校の枠を超えた双方向的な学びを提供するため、ハード・ソフト両面で各校を支援していきたい。特に、ICT機器やオンライン接続の支援を充実させるため、総合教育センターとの協働を継続し、教員向け研修の実施や遠隔配信授業を体験できる環境(教室)の設置なども検討していく必要がある。

3 運営指導委員会 検証会議の記録



学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会

令和6年度長野県 WWL コンソーシアム構築支援事業
 （個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業）
 運営指導委員・カリキュラムアドバイザー・検証委員

区分	氏名	役職
運営指導委員	村松 浩幸（座長）	信州大学教育学部 学部長
運営指導委員	坪谷 ニュウエル 郁子（副座長）	東京インターナショナルスクール 理事長
運営指導委員	江幡 智広	KDDI 株式会社 経営戦略本部 副本部長
運営指導委員	佐藤 和紀	信州大学教育学部 准教授
運営指導委員	杉浦 太一	株式会社 Inspire High CEO
カリキュラム アドバイザー	小村 俊平	ベネッセ総合教育研究所 教育イノベーションセンター センター長
検証委員	清水 唯一朗	慶應義塾大学総合政策学部 教授

3 運営指導委員会・検証会議の記録

令和6年度長野県 WWL コンソーシアム構築支援事業

「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」第1回運営指導委員会 議事録

期日 令和6年7月22日（月）13時30分から16時30分まで

場所 教育委員会室（長野県庁本館棟8階）※オンライン併用

参加者（継承略・50音順）

○運営指導委員

村松浩幸（座長）、坪谷ニューエル郁子（副座長）、江幡智宏、佐藤和紀、杉浦太一

○カリキュラムアドバイザー

小村俊平

○学校関係者

【提供校】 上田、野沢北、伊那北、松本県ヶ丘、蘇南

【被提供校】 須坂、篠ノ井、屋代、上田染谷丘、諏訪清陵、諏訪二葉、飯田、飯田風越、
伊那弥生ヶ丘（管理職及び担当者）

○実施機関

長野県教育委員会 教育長以下6名、総合教育センター情報産業教育部長、専門主事

1 開会行事

実施機関挨拶（武田教育長）

出席者紹介

資料・日程確認

2 議事

(1) 事業概要説明及び今年度の計画について（実施機関）

WWL 事業概要、今年度の事業推進計画について説明

(2) 提供校 松本県ヶ丘高等学校の取組について（別紙資料参照）（松本県ヶ丘：腰原校長）

- ・小論文講座、教科横断授業、戦争探究ゼミ、探究サポーター制度、個別海外研修旅行、探究テーマアーカイブ、留学生との交流、同時双方向型授業の取組
- ・地域連携コーディネーターの活動、成果、今後の計画

(3) 事例紹介

「学校と学校外をデジタルで繋ぐと学校はどう変わるか」小村カリキュラムアドバイザー

(4) 意見交換及び指導・助言

テーマ：①オンラインの可能性と外部連携

②開発した“学び”の展開、活用、発信

3 質疑応答

Q 松本県ヶ丘高等学校「個別海外研修旅行」とは？

A 対象は主に2年生の探究科80名。個人またはグループで、興味・関心に応じて世界中ど

3 運営指導委員会・検証会議の記録

こでも研修可能としている。昨年度は13か国に渡って研修（個人5コース、グループ7コース、期間は1週間から最長17日間）。今年度は学校の枠を超えて他校との連携も検討している。

Q 松本県ヶ丘高校「連携コーディネーター」の活動や具体的な役割とは？

A 2020年から学校の探究プログラムの共同作成をしている。具体的には、初期指導の支援員として生徒の伴走やサポート、授業プログラムやワークシートの開発、外部の方との繋がりを作り、探究アドバイザー制度を確立。また、同窓会と協力して生徒向けプログラムを実施。今年度は松本市5校の地域連携コーディネーターとして、松本深志高校との合同授業を企画・実施（回答：地域連携コーディネーター：宮木慧美氏）

4 事例紹介（カリキュラムアドバイザー：小村俊平氏）

○タイトル：「学校内外をデジタルでつなぐことによって生徒の学びがどのように変わるか」

○発表要旨：高校生にとってデジタル機器は日常的なものであり、多くの生徒が宿題や学習にデジタル機器を使用している。デジタル技術を利用することで、学校外のエキスパートや異なる背景の人々と連携し、対話する機会が増え、学びの質の向上につながることにについて仙台第三高校と立命館宇治高校の合同授業の事例とともにお話しいただいた。

○発表の概要

- (1) **当たり前のデジタル環境**：高校生は日常的にデジタル機器を使用しているため、デジタル学習も自然なものになっている。
- (2) **学校外のエキスパートとの連携**：学校外の専門家や異なる背景を持つ人々と対話する機会を提供できる。例として、オンライン授業で他校の先生が特定のテーマについて授業を行うことや、大学や企業の専門家との交流が挙げられる。
- (3) **合同授業と多様な視点の提供**：異なる地域や背景を持つ学校同士で合同授業を行うことで、多様な視点や新たな発見を得られる。（例：異なる地域の生徒同士が俳句を作ることで地域性の違いを認識。）
- (4) **専門家とのリアルタイムの対話**：専門家が最新の情報を提供し、それについて高校生とリアルタイムで対話する機会を設けることができる。（例：COVID-19 初期に専門家と共にウイルスについて学ぶ機会の提供）
- (5) **異質なものととの出会い**：地域や文化、学年、世代など異なる背景を持つ人々とオンラインで交流することで、生徒の視野を広げることができる。
- (6) **非日常性をデザイン**：日常的な環境から離れた非日常的な体験をデジタルで提供することで、生徒が新しい視点を得やすくなる。（例：メタバースや匿名での交流を通じて、普段話せないことを話す機会を提供）
- (7) **学びの深化**：単なる知識の習得にとどまらず、異なる人々との対話を通じて知識を構造化し、深めることができる。
- (8) **学びの多様性**：学校内の多様性が減少している中、デジタル連携を通じて様々なバック

3 運営指導委員会・検証会議の記録

グラウンドを持つ生徒と交流する機会を提供することで、多様性を補完できる。

- (9) **失敗を恐れず挑戦できる環境**：デジタル環境では、失敗を恐れずに新しいことに挑戦しやすい環境を提供できる。
- (10) **新たな学びの形の創出・教員のアンラーン**：これらの利点を活かすことで、生徒はより広い視野と深い知識を身につけ、教師も新しい教育方法を模索することができる。

○質疑応答・感想

- ・連携授業の取組が大変興味深い。他校との連携授業のテーマとして教科で繋がるのが一番効果的か？（上田：宮下校長）
- ・学校外の人とのコーディネーションが重要だと感じている。校長として、少しでもその役割を担えたらと感じている。（須坂：松原校長）

○小村氏のコメント

- ・合同授業を始めるにあたっては、教科での連携も探究的なテーマでの連携もどちらでも可能。特に時間割を調整し、探究的なテーマで連携するのが効果的。
- ・学校間連携には、コーディネーターの存在が重要。予算や地域に適した人材の確保が難しい場合もあるが、卒業生の力を借りることやオンラインでの支援が効果的である。
- ・小さく始めて大きく展開することが重要。例えば、土曜日の午後を使って有志で始めるといった方法が効果的。
- ・最初から完璧に準備するのではなく、生徒とともに試行錯誤しながら良いものにしていくというマインドが重要。教員が準備しすぎると、生徒はお客様になってしまう。

5 運営指導委員による指導・助言

【坪谷委員（副座長）】

さすが長野県、素晴らしい取組とご発表に感銘を受けました。聞かせていただいて気づいたことと雑多なことを2点ほど申し上げたいと思います。

今日のこの会の目的の活用、発信の部分について、お話の中に日本国内に広く発信していくというお話がありましたので、これは素晴らしいと思ったところです。以前も私、そのように日本国内にこの長野の学びの在り方というのを広めてもらいたいということを申し上げたので良かったと思ったところです。これをさらに進めて、例えば、（動画などに）英語の字幕をつけて、今はSNS、YouTubeであるとかInstagramなどいろいろな方法がありますので、日本国内のみならず世界に向かって、長野の学びの様子を発信していくことができれば素晴らしいのではないかと思います。ですから、英語の翻訳については、アプリ等を使えばすぐにできる時代にもなっておりますので、ぜひお考えいただけたらと思います。

2点目は、縣陵の進め方、いわゆる、松本県ヶ丘高校の学びを聞かさせていただいて、すごいなと思いました。多分、アウトカムとして小論文ということをおっしゃっているということは、

3 運営指導委員会・検証会議の記録

生徒が全員小論文を書くことになるのではと推測しているところです。その際、小論文の書き方であるとか、こういったものを引用してくるなどの引用の仕方であるとか、分析の仕方であるとか、そういったことも生徒は学んでいくのではないかと思います。その時に、小論文を書くのみならず、例えば5分とか、長くても7分とかでいいのですが、自分の行き着いた答えというのをみんなの前でプレゼンテーションする。このプレゼンテーションの仕方も、声の抑揚や、身振りの仕方、そして書いた小論文を今日の発表のように、どのように絵柄としてみんなに伝えやすくしていくか、そうしたことも学びの1つになります。ぜひ、プレゼンテーションも一緒にタスクとして、最後のアウトカムとして入れていかれるとより良いのではないかと思います。

以上、2点でございます。どうもありがとうございました。

【村松座長】

ありがとうございました。情報発信という点で、さらにグローバルという観点から、英語の字幕の活用、それから小論文、さらにプレゼンテーション、これらの重要性もご指摘いただきました。ありがとうございました。

続きまして、江幡様、お願いできますでしょうか。

【江幡委員】

今日はお話いただきましてありがとうございました。特に、松本県ケ丘高校のこれまでの取組とかですね、今後行っていくことについて、非常に新しい取組になっていること、自分の中では非常に進んでるなという風に感じたところでございます。

従来、学校の中ではなかった学習テーマとか、そのコンテンツを取り入れながらやっていくという仕組みは、これからというか、今置かれたこの世の中においても、非常に大事なところになってくると思います。

そういった教材やコンテンツというのが、従来の学校の中にはなかったものも非常に多いとは思いますが、その良質なコンテンツ自体は広くオンライン等も活用しながら各参加校がうまく効率的に、かつオンラインという仕組みを使いながら、先ほど合同授業のお話もあったかと思いますが、それをきっかけにしながら、ワークショップを開催するとか、学生さん同士がリアルで交流する。普段の授業でやるということは難しいとは思いますが、各校内で行われたそのワークショップの中のアウトプットなどを逆にオンラインを通じて合同で発表していくような仕組みがあってもいいのかなと。

それを通じて、自分の身近にはなかった学校の中での声を広く聞くこともできたりすること、非常に大きな学びになるのではないかと思います。実は、先ほどベネッセの小村さんから話がありましたが、企業においても結構同じでございます。内向きの人材という形ではなく、外で起きていることをどう理解し知っているかですとか、異業種交流をする中で、自分の会社の置かれた課題や環境が見えてきたりすることが非常に多くなっています。外部の方、それはいわゆる生徒さんから見た時には、従来の塾とか学校の先生以外の方との交流によって気づきがあることとか、地域の課題を見つけたりするとか、こうしたことは、非常にこう大きいのではな

いかと思います。

ですので、もしこういったことを進めていくにあたって、環境と、学校の先生、時間とカリソースのかけ方等ですね、課題があるのならば、こうした場を使って、その原因を見つけながら課題を解決するような仕組みというのも一緒に考えていけると、より良いのではないかと思います。

もう1つは、本当に教職員の先生方に多分いちばん負荷がかかると思われることも相当あるのではないかと思います。これは会社の方でも大体同じです。何か新しいこと始めようとすると、どうしてもそこに関わるメンバーが、従来の業務と両方やらなければならない部分もあるかと思っています。今回の取組も、必ずしも正解があるものでもないですし、学生の方々も話をしたりですとか、ワークショップの中で出た議論なども、あることが正解で、あることが不正解だなんてこともないと思うんですよね。ですので、その意味では、できる一歩を踏み出していくということが非常に大事なのではないかと思います。もしこうした場面で、私たちが協力できる部分がありましたら協力をさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

【村松座長】

江幡様、ありがとうございました。良質のコンテンツの活用ですとか、オンラインでの校内からの合同の発表等ですね。それから、課題を解決、その辺のいろんな課題感みたいなものは企業も同じであるということで、この辺の課題を解決できる仕組みをこうぜひまた一緒に共有、検討していければというようなお話でありました。ありがとうございました。

続きまして、佐藤委員、お願いできますでしょうか。

【佐藤委員】

信州大学の佐藤でございます。よろしくお願いいたします。

お話聞いて感じてきたことについて話します。まず、学びの発信ということで、最近高校生に感じることにについてなんですけども、今年は特に探究をしているということで、全国各地の高校生が個別に連絡くれるケースがすごく多いなという印象です。特に私学が。私のところには7件ぐらいこの1学期であったんですけど、私学が多かったです。

特に県外が非常に多く、熱心に連絡をくださる方がいたりとか、終わった後に先生がきちんとありがとうございましたというような、そんな連絡いただいたりしたこともありました。オンラインでディスカッションしたり、チャットでやり取りしたこともありました。県内も2件ほどございました。ただし、1件はなんかやらされている感がちょっとあったので、そこなんとかしたいなと思ったのですが。先生も連絡なかったもので、探究について、外と関わる方法とかですね、少し指導してあげたいなっていう風に思ったこともあるのですが。こんなに高校生から連絡もらえるってことはなかなかなくて、すごい面白くなってきているんだなってことを肌で感じた年になっています。

それから、信州大学では先取り履修ということをやっているんですね。高校生が大学の授業を

3 運営指導委員会・検証会議の記録

オンラインで受けたり、または大学に来て授業を受けることをやっています。これも私学が多いです。長野日大と佐久長聖の生徒が私の前期の授業を受けていましたが、「何で僕の授業受けたんですか」と聞いたら、それしか開校してなかったからですと言っていました。ICT に特に興味なかったけれど、すごく面白かったですという話とか。もう 1 人の子はですね、夏に「トビタテ（留学 JAPAN）」でオーストラリア行くらしいんですよ。それで相談があって、どういう形で海外の探究について学んでいけば良いかみたいな話があったので、オーストラリアのコンタクト先とかちょっとコーディネートしたりしていたところです。こういう子どもたちが長野県から出てきているってことですね。私立公立にも関わらず出てきているということが、ちょっと面白くなってきたなっていうような印象がございました。それが 1 点目でございます。

2 点目はですね、坪谷様がおっしゃっていましたが、SNS とかの発信みたいなことがもっと増えればいいかなっていう風にも思っています。ただ、やはりこう調べてみるとそんなに多くないのかなっていうような。今までの広報的なことの延長で、高校生が探究して、それを面白おかしくやっているとか追求しているという姿はまだあまり見られないのかなっていうような印象があります。どんどん発信すればいいのにというのが僕の意見ですけども。なんか今までのこう流れというと、SNS を使ってはいけないオーラみたいのが時々あるじゃないですか。そういうことちょっと邪魔しているところもあるので、先生方がきちんと情報モラル教育をやりつつ、発信の中でそういう情報モラルを学んでいくみたいなことをやっていくのもいいのではないかなと思っています。

もう 1 つがですね、先ほど小村先生がお話してくださったところで、探究をどう続けていくかというお話です。小さく始めて続けられる、終わらないってことが非常にいいというようなことをおっしゃられていました。であるとしたら、どういう探究のスタイルで常にやられているのかということをもう少し整理した方がいいかなと思っております。共有になりますけども、探究の研究されている方が整理したものを使っていますけども、たまたま昨日 NHK で講座をしていたのでお借りしていますが、どの位置にどの探究なのかっていう話ですね。

個人探究の話なのか、教科の探究なのか、あるいは教科の学びの中で、探究的な学習の過程で個別最適な学びをやっているのかとか、色々あると思います。今日の話ですと個人探究の話とか教科探究の話が多いと思うのですが、探究とは何かと考えていくという意味でも、何かの指標の中で整理していくことですか、その中でどのようにカリキュラムが組まれていて、トピック的にやられてなくて、継続的にやられているのかとかですね、そのようなことが把握できていくとよいのではないかなと思います。私からは以上になります。引き続きよろしくお願いいたします。

【村松座長】

ありがとうございます。長野県からも、県外から色々というような話もあります。長野県からもだんだん面白い子たちが出てきていると。先ほどの先取り履修の話ですが、私も昨年やりま

3 運営指導委員会・検証会議の記録

して、南信地域の方の生徒さんが結構受けてくれて、私たちと学生自身、大学生自身も非常にこう刺激を受けた、とても良い案でしたね。

それから、情報発信の話、これ連携にも関わるところですけど、SNS をうまく活用していきたいのは、先ほど坪谷様からも英語の字幕みたいな話ができましたけれども、どのように情報発信をしていくのかということですね。また最後の方でいただきましたその探究のスタイル、こういうものもう少し整理したり、これこそまさに大学と一緒に関わってやるといいところかもしれません。

ありがとうございました。続きまして、杉浦委員、お願いできますでしょうか。

【杉浦委員】

皆様、発表などありがとうございました。私の方からは2点ありまして。

1つは、探究学習のフェーズについてのお話なのですが、全国の学校さんを訪問させていただいて、探究がよいよいよ始まったってなった時に、学校によって、フェーズがすごいバラバラだなと思っています。

このことについて今頭の中で整理していたのですが、レベル0の状態とは、本当に先生方もやる気がなく、またはやらされ感というか、お荷物みたいな感じで、教科を教えられると思って入ってきたのに、別のことをやらされてるといった空気が蔓延してしまっているという、これはかなりまずい状態です。ですが、今はこうした学校はほとんど全国にはなくなってきています。これはやはり先生方お一人おひとりの、元々の教師になるというそもそものモチベーションというか、原動力みたいなところと、探究がやはりとても相性がいいので、(探究に)どのように関わればよいのか分かったと、一気に先生方も動いてくださるのだなと思ってます。

そうなる次何が起こるか、ということですが、推進派の先生が色々と始めてみたりするので、とりあえず何かやってみて、色々始まっているみたいな状態になってくると思います。結構これは、学年ごとにバラバラだったりするのですが。

この先生がいる学年だけすごくレベルが高いとか、学校の中ではまだ足並みが揃ってない状態なんですけど、なにか探究の歯車がこう動き出してきているなという感覚があるなと思います。

それが次のフェーズに行くと探究がその学校のビジョンであるとか、スクールミッション、スクールビジョンですとかその探究で「どういう生徒を育てたいのか」という生徒像みたいなものがきちんと定義され、学年や教科ごとバラバラということではなくて、学校として探究とはこうだよなとか、探究ではこういうことをやるけれども、ロングホームルームではこうであり、中学校であれば道徳ではこうでありとか、いわゆる基礎学力的なもの以外の、教科外学習とか探究といったものの役割や立ち位置が明確になって規定されている。そういうある種のデザインみたいなことがなされている状態。最後は、そのデザインされたビジョンやミッションとか、そういったものと実際の教育内容、教育現場での実践が完全に駆動している状態であると思っています。それぞれの学校において、探究が今どういうフェーズにあるのかということを見定めた上で、ど

3 運営指導委員会・検証会議の記録

ういう動きをすべきかということが分かってくるのかなと、それぞれの発表を伺いながら、自分の頭を整理しておりました。

まさに県ケ丘高校さんでやってらっしゃる「企み」、ほんとにたくさん色々あり、とてもバリエーション豊かで、生徒さん羨ましいなと素直に思ったのですが、それこそ先ほどの話で言うと、スクールミッションとか、これらを通して生徒さんをどういう風になってもらいたいのかその理想の生徒像みたいなものであり、だから、今このタイミングで、何学年のこのタイミングで、例えば戦争探究ゼミがあるのだとか、グローバルとのつなぎ込みというものがあるみたいなことが、総合的なグラウンドデザインの中でそれぞれの役割が明確だとよいのだろうと思った次第です。

2点目。これはすごく簡単になのですが、おそらくこのWWLの取組は、長野県内の中でも、山間部であるとか、非常に学習機会が下手するところおろそかになってしまいかねない学校に対して、いかに質の高い探究学習を、アクセシビリティ高く、誰しものがこう触れられるようにしていくかっていうことが、非常にコアなコンセプトにあるんじゃないかなと。私としては、昨年度から伺っておりましたので、ここの部分の取組っていうのをどのように進めていかれるかっていうところは非常に関心が高く、私としても何かご支援できるところがあれば嬉しいなと思ってます。

一方で、やはりどうしても仕組みや箱、予定みたいなものからこう考えてしまいがちなんですけど、やはり重要なのは、各校の先生方や生徒さんが参加したいって思ってくれる熱意であるとか、そのエンゲージメントと呼ばれるものが非常に重要なんだろうなと思うのです。どのようにしたらそういった方々が、ただ場所を用意したから参加してくださいではなくて、きちんと参加していただき、これなんかいい動きになったねというような取組が作れるかということが非常に重要なかなと思った次第です。私から以上になります。

【村松座長】

ありがとうございます。今お話もいただきました、いわゆる探究学習が次のフェーズに入ってきたということですね。探究の歯車がいよいよ動き出していくのかっていうお話もいただきました。また、生徒像を定義として、学校としてどうしていくのか。第2段階というのは、探究をとりあえずやってみようっていう段階から、次の、先ほど探究のスタイルの整理の話で佐藤委員からもお話ありましたが、改めてちょっともういちどしっかり整理して、この第2段階行ってみようっていうことでしょうか。

現在の立ち位置を整理しながらも、仕組みとか箱とか、そういうようなこともさることながら、熱意、エンゲージメント、これが非常に大事であると、いちばん原点にあたるような、そういうところをご指摘いただきました。ありがとうございます。

【村松座長】

せっかくでございますので、オンラインでの参加校の先生方からもちょうといただければと思

いますが、いかがでしょうか。まず、提供校の伊那北高校、お願いできますでしょうか。

【伊那北高校 熊澤教諭】

ありがとうございました。貴重なご意見を伺いながら、非常に楽しませてもらいました。

まず、本校も取組をしまして、どんなことを取り組んでいるかということ、学校内で行われている教科間連携の授業に関してちょっと色々考えたんですけども、まずは教員の先生方と情報共有とがあるとか事例共有をしたいなということで、昨年度の延長線上で、教科間連携の授業をまなび助ポータル for teachersの方に何本か今年も動画を撮って共有したいと思い、取り組んでいます。

先ほど以来の今話題になっていることを聞きながら思ったのが、先に申し上げておきますが、私は社会の教員で倫理を教えている者ですので、すこし抽象的な言い回しが多くなって大変恐縮なのですが、いずれこの学校ですとか、学校と学校の連携とかについて、学校と学校の境界線というものがなくなっていったらよいのではないかなという思いながら聞いていました。結局、学校と学校が連携するってなると、なんて言うんでしょうね、生徒が中3生時の学力によって選ばれた高校に縛られ続けるんじゃないかという感じがして。もっとふわっとして、大きいこと言うと、将来的には長野県にいる高校生を長野県にいる大人がみんなで一生懸命面倒見るっていうような、そんなあり方が素晴らしいんじゃないかなと思います。各校の魅力を出していこうという方向性も理解はできるんですけど、もっと、県ヶ丘高校さんの小論文講座に伊那北の生徒がお邪魔するみたいなことではなくて、長野県の高校の先生がやっていることに、長野県の高校生や子どもたちが積極的に参加していくということが行なわれたら楽しいのではないかと皆さんのお話を拝聴しながら思っていました。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。ポータルサイトの活用ですとか、後半のお話にありましたが、もう学校と学校の境界、まさにボーダレスというのでしょうか。私も卒業生でN高とかで今やっているのがいるんですけども、そこは1つの学校と言いながら、バーチャルでいろいろなところと繋がっているのです。

同じように、多分、今の先生のお話を聞いて、もちろん個々の学校なんだけども、そういった学校同士が組み合わさり、こう仮想的な大きな「長野県高校」と言ったらいいんですかね、そんなものができて、やり取りできたら面白いのかという話をいただきました。ありがとうございました。

続きまして、本年度ご参加いただきました蘇南高校の方で一言お願いできますでしょうか。

【蘇南高校 小林教諭】

はい、蘇南高校の小林です。発表の方、ありがとうございました。色々面白い話もたくさんありまして、すごく参考になったところです。

3 運営指導委員会・検証会議の記録

本校は今年から参加ということで、まだ具体的に何かコンテンツとかないんですが、今、9月12日に外務省の方の高校講座を本校で行うことを計画立てているところなんですが、可能であればそちらの座談会をオンラインによる同時双方向などの形で実施できないかなと考えています。また詳細固まりましたら共有させていただきます。

先ほどから話になっていたところで、探究の発表会、合同でという話あったと思います。このことについては、本校としても実際に他の学校さんと合同でやっていけるとすごくいいなと感じています。

本校、今年生徒数が105人です。とても小規模な学校なので、やはり多様性といえますか、他の学校と比べると生徒の多様性というところが少ないかなと。そうすると、やはり探究のテーマとか地域の課題みたいなのところも、どうしても似たりよったりな形になってしまうように感じています。そういった意味で、他の学校さんと発表会などで繋がれると生徒は違った視点なども得られるのではないかと感じました。ほかの人の発表を聞くということはすごいモチベーションにもなるなという風に感じているので、こうした機会がこれから増えていけばぜひ参加させていただきたいなと感じました。以上です。

【村松座長】

ありがとうございました。様々な探究のお取組が始まったところ、また、今の本当にこう、小規模校ならではの悩みとして、合同で多くの学校とともに行うことができれば、そんなお話です。この事業はそういうところを目指してるかと思いますので、活用できればと思います。ありがとうございました。

それでは、私の方から本日のお話をまとめて参りたいと思います。

まず、縣陵の取組ということで、県ヶ丘さんが7つの「企み」で先進的に様々なことを行っているということに関心いたしました。特に個別最適な海外研修旅行という他の高校からまたさらに1歩抜けた、やはり先頭を走っている取組で、県ヶ丘さんから色々学びたいなというようなところでありました。

その中でもやはり連携コーディネーターの方の存在ですね。話の中でも卒業生を活用してという話ありましたが、こう繋ぐというところ、逆にここがうまくできると、多分先生方の負荷っていうのが一気に少なく、色々なことが展開できるのかなと思いました。

小村様からも色々なお話をいただきました。非日常の話ですとか、当事者性の話とですね。これからやはり考えていかなければならないところかなと思いました。それをおいても、まずはこう小さく始めようと、どれだけこう敷居を下げてやっていくのかということが非常に大事ななと感じました。また、運営指導委員の皆様からも本当に様々ご意見いただきありがとうございました。情報発信の話、この課題を解決できるような仕組み、SNSへの活用など。

いわば探究が第2段階に入ってきたということは、第1段階の成果で面白い子たちがやはり出

3 運営指導委員会・検証会議の記録

てきているということです。そういうものを次にどのように繋げていくのか、それがこの探究のスタイルですね。これを整理していくことが必要ではないか。そしてまた、この探究の歯車が動き出してきた中で、現在の立ち位置等を整理しながら、生徒像とか学校としてどうするのかということをもう一度考えてみようと。その中で、（探究の）仕組みづくりも大事であるが、熱意、これがやはり大事であり、先生方自身が成長するというお話もありました。まさにそういうことが大事であろうと思います。

関係の高校の先生方からありがとうございました。学校がボーダレスに広がっていくと、このことは、昨年県の会議で県境校の話をした際に高校のいろんなネットワークで単位互換ができるような仕組みを作ったらどうかと。これらはひとつの学校だけでなんとかしようといっても、それを支える自治体自体が小さくなってきてる中で限界がある。複数校での連携ということをそろそろ本当に考えていかなくてはいけないのではと思った次第です。

そうしたことを踏まえますと、一番大きいのが、WWL 連携校においてもそうですが、探究が第2段階に入ってきたと。小中を含めまして、1人1台端末を使う GIGA スクールも第1段階が終わり、第2段階の途中です。小村様のお話にもありましたが、ネットワーク環境の整備等に入ってきたということですが、県ヶ丘高校や全国の先行している事例等も踏まえながら、いま一度課題の整理をしたり、全体の確認をしてみるということが重要ではないか。とりわけ、ここの委員会とか運営のところでは、この点について検討し次にどう進めばいいのかという道標を作っていく必要があるのではないかと思います。また、連携コーディネーターについてですが、やはり卒業生がいちばん強いです。母校のためにということで、私ども、今年から卒業生が高校生に、高校に母校を訪問でお話をするといった取組を行ったのですが、やはりみんな意欲的にやってくれますし、高校の先生方にとっても嬉しいなことだと思います。

もう1つ、大きなところでは、情報発信の活用等についてもですが、この辺のやはり仕組みをちょっと整えたい。もっと手軽にできるような発信ですね。例えば、付属学校の関係とかですと、今までのメールのやり取りはやめて、ニュースがあったらフォームに入れてもらおうと。そうすると、関係のところに自動的に配信されるだけでなく、それが統計として、どこの学校でどんなものがあって、これはニュースで報道されたとかテレビで放映されたですとか、そういうことで使えるような、手がかからないけども簡単に情報共有できると。発信するために、SNS やるために、要点は140字でまとめてですとか、そういった情報発信し、これだけの取組というものは、高校だけではなく、県民の皆さんや小中の皆さん、大学の方にも知れていく、知っていただくには、こうした仕組みが必要あるといいのかなと思いました。

仕組みの話としても出てきた単位認定ということですが、今年度年度ぜひ全体でご検討いただいているんですけど、いちばん大きな課題が時間合わせであるということですね。これは多分県の高校の校長会等との相談にもなると思うのですが、例えば何曜日の何時間目のように、県立高

3 運営指導委員会・検証会議の記録

校一斉に、探究の時間としての枠組みを作り、こうしたところからやってくような、そんなことを第2段階としてもやったらいいのかなと思いました。

最後のまとめと言いますと、やはり学校ってここまで、いろいろなとこで、制度疲労で、なかなかんだかいんな課題を抱えてるという厳しい時代がこうしばらく続いたと思います。この探究であるとかは、新しい時代に向かっていく、とても前向きで素晴らしい話だと思うんですね。

ある意味、この学校の魅力をリブートするって言うんでしょうか。かつては学校はその地域とかその時代の本当に文化の中心であり最先端のとこだったので、それをこの探究というものを通して、学校だけではなく、いろんなものを呼び込む、知の拠点になるようなもの、そこに大学も連携させていただければと思います。そんな形でぜひ高校の魅力を再起動する、そんな第2段階になっていただけるといいかと思います。

私ども大学の方でも、高校生向け講座ですとか、総合型選抜入試ですとか、様々な探究の取組を発揮できるようなものをスタートさせるということも動き出しました。ですので、ぜひ両者連携してできればと思いますので、引き続きよろしくお願いします。

ありがとうございました。まだまだ話たりないところではありますけども時間もまいりましたので、以上で意見交換を終了したいと思います。ご指導いただきました運営委員の皆さん、本当にありがとうございました。

お忙しい中、ご参加いただきました各校の先生方、ありがとうございました。

6 閉会行事

- ・ 学びの改革支援課 臼井課長から御礼の挨拶
- ・ 事務連絡

令和6年度長野県 WML コンソーシアム構築支援事業

「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」第2回運営指導委員会 議事録

期日 令和7年1月28日（火）13時30分から16時30分まで

場所 教育委員会室（長野県庁本館棟8階）※オンライン開催

参加者（敬称略 50音順）

○運営指導委員

村松浩幸（座長）、坪谷ニューエル郁子（副座長）、江幡智宏、杉浦太一

○カリキュラムアドバイザー

小村俊平

○学校関係者

【提供校】 上田、野沢北、伊那北、松本県ヶ丘、蘇南

【被提供校】 須坂、篠ノ井、屋代、上田染谷丘、諏訪清陵、諏訪二葉、飯田風越、
伊那弥生ヶ丘（管理職及び担当者）

○実施機関

長野県教育委員会 教育次長以下6名、総合教育センター情報産業教育部長、専門主事

1 開会行事

実施機関挨拶（曾根原教育次長）

出席者紹介

資料・日程確認

2 生徒発表

タイトル：「こどもてらす」の取組について

発表者：上田高校3年生 上鹿渡 ゆい さん

概要：上田高校の有志で結成され、高校生が主体となって地域の子どもや子育て家庭を支援する「こどもてらす」の活動は、令和6年度「第2回未来をつくるこどもまんなかアワード」内閣府特命担当大臣表彰を受賞。当日は、学校の課題研究をきっかけに始めた本取組について、仲間や地域の大人たちを巻き込みながら活動を進めてきた経緯や今後の展望についての発表に対し、質疑応答及び今後の活躍に対するエールが送られた。

【質問者：村松座長】

Q 20名の生徒を多岐にわたってマネジメントする際、最も成功したポイントは何か？

A 4つの活動ごとに代表者を決めその代表者が企画の深い部分を考え、全体に提示している。
小さいグループで始めて全体に広げる形で活動している。

Q この取組が自身の学校での学びにどのような変化をもたらしたか？

A 課題研究を活動につなげるには不安があったが一步踏み出す勇気が必要だと思った。また、

この活動を通して、挑戦することの重要性を学んだ。失敗を恐れずに挑戦する気持ちが大切だと思う。

【質問者：杉浦委員】

Q 活動を通じて達成感以外に残っているモヤモヤする感覚や、今後の発展について考えていることは？

A 高校卒業後に活動が途切れることが少し寂しい。卒業後も何らかの形で繋がりを持ち続ける方法を考えている。

Q 活動を通じて感じた達成感と、次のチャレンジやワクワク感についての気持ちは？

A 仲間の協力で活動ができたことへの嬉しさと達成感を感じている。高校生だからこそできることを、もっと活動の中に取り入れていきたい。また、もっと地域の人を巻き込んで、子供たちが楽しく自分らしくいられる場所を創っていきたい。

3 議事

(1) 今年度の事業の取組及び次年度の計画について（実施機関）

WWL 事業概要、今年度の取組、成果と課題、次年度の事業推進計画について説明

(2) 提供校からの報告（上田、松本県ヶ丘、野沢北、伊那北、蘇南）

事業研究項目に係る各校の取組及び次年度に向けた計画等を報告

【上田高校】（報告者：伊藤教諭）

○学校内外への発信

- ・生徒の発表会や他校生とのフォーラムを通じて外部発信。
- ・4月と9月のアカデミックプレゼンテーションをオンラインで実施。
- ・6月の北陸新幹線サミットをオンラインで双方向型交流を実施。

○オンデマンドコンテンツの制作

- ・台湾研修旅行事前学習の一環として実施した異文化理解に関する動画コンテンツとプレゼン資料を提供。
- ・2月開催のGS報告会における英語による生徒の課題研究報告の様子を動画として今後提供予定。

○探究的な学びの充実

- ・グローバルスタディーを水曜日の6時間目に統一して実施。生徒と職員が同じ時間に学びを共有し、交流を深めることに繋がった。
- ・校外のアワードに積極的に参加し、生徒の知見を深められるよう取り組んでいる。

【松本県ヶ丘】（報告者：腰原校長）

○独自の取組への生徒参加

- ・小論文講座やフィールドワークゼミへのオンライン参加。

○オンライン合同授業の取組教員同士の情報交換

- ・松本美須ヶ丘高校との教科「公共」授業におけるオンライン授業の実践。

3 運営指導委員会・検証会議の記録

○探究サポーター制度の構築

- ・OB・OG や大学生を中心に、現役高校生と直接繋いで探究に関する相談を実施。

○探究アーカイブアプリの作成とリリース

○松本地区の高校との連携

- ・松本深志高校との合同テーマワークショップを実施。
- ・地域連携コーディネーターの協力で実現。

○今後の計画

- ・3月に松本深志高校と松本蟻ヶ崎高校との3校合同ワークショップを予定。
- ・学校を超えたグループ探究やオンラインプロジェクトの継続。

【野沢北】（報告者：中澤教諭）

○地域連携コンソーシアムの運営

- ・31 企業・団体と連携し、サポーター会議を実施。プレゼンテーションコンテストの審査やワークショップへの参加を依頼。

○ミニ探究 DAY の公開

- ・探究の初期指導の一環として、1年生が探究のサイクルを1日で経験。今年度のテーマは「空き家対策」と「エコスクール」。

○評価システムの導入

- ・Ai Grow を導入し、探究活動の効果をAIで測定。自己評価と他者評価を実施し、4月と1月に変化を確認。

○学習コンテンツの提供

- ・今年度はミニ探究 DAY、つばさプロジェクト報告会、プレゼンテーションコンテストを配信。来年度はオンデマンドコンテンツの制作と提供について取り組んでいきたい。

【伊那北】（報告者：熊澤教諭）

○まなび助ポータルサイト for Teachers へのコンテンツ提供

- ・国語、英語、地歴公民、保健体育の学びを示す動画を掲載予定。生徒の承諾書を取得中で、今年度中に授業動画を掲載予定。

○オンライン授業による学習機会の創出

- ・令和5年度のカンボジア研修や信州つばさプロジェクトに参加した生徒が4月と5月にオンラインで報告会を実施。今年度の報告会を2月にオンライン配信予定。

【蘇南】（報告者：小林教諭）

○オンデマンド配信による学習機会の創出

- ・昨年12月の総合探究発表会の代表発表動画をまなび助ポータルサイトに提供予定。発表会はオンラインのハイブリッド開催で、教育関係者がオンライン参加。

○課題探究の蓄積と共有

- ・総合学科の課題探究の蓄積を整理し、ポータルサイトを活用して共有予定。

3 運営指導委員会・検証会議の記録

○海外語学研修の事前学習

- ・台湾の高校生と事前学習を兼ねたコミュニケーション機会を計画中。他校とも連携して進める予定。

○外務省の高校講座の配信の試み

- ・オンライン配信を予定していたが、講師の希望により急遽中止。次年度以降、共有可能なイベント企画を検討中。

(3) 北海学園札幌高等学校との連携交渉報告（報告者：松本県ヶ丘高校 腰原校長）

【報告の概要】

令和6年12月12日に提供校3校参加によるWWLカリキュラム開発拠点校である北海学園札幌高等学校との連携交渉についての報告があった。訪問先は私立大学と併設しており、非常に恵まれた環境。運営指導委員会と課題研究発表会と高校生の国際会議を参観後、参加者は訪問校の事業担当者と懇談した。今後、本県の高校生国際会議ヘリアルまたはオンラインでの生徒参加、各校が開催する課題研究発表会への生徒のオンラインによる相互参加等について交渉を行った。

4 運営指導委員による指導・助言

【村松座長】

それでは今年度の事業報告、各校からの報告につきまして、カリキュラムアドバイザー並びに運営指導指導員の皆様から、ご助言、ご指導いただければと思います。

また、冒頭の上鹿渡さんの発表についてもご感想等よろしくお願いします。では最初にカリキュラムアドバイザーの小村様、お願いできますでしょうか。

【小村アドバイザー】

充実した活動ありがとうございました。今回、ポータルサイトなどの話を色々伺いましたけれども、私自身が先生方のコミュニティと言いますか、ノウハウ効果の場をずっとやっているのですごくこの分野の問題意識があります。生徒たちについては合同発表会など交流する場を設けてお互いに触発できるようにしているということ、先生方に対しては、ポータルサイトを作ったりすることによってノウハウを共有されるという構造だと思うのですが、実際に運用している中でどんな変化があったのか、その手応えは何なのかということと、そうは言っても、私は手応えを感じつつも難しいところもあるのではないかなと思っているのですが、何が本当にネックになっているのかについて、少し教えていただけるとありがたいです。

【実施機関担当】

どのような変化があったのかについてですが、毎回のALネットワーク連絡校会議を経て、先生方が他校の学びに少しずつ関心を寄せてくださっている印象を受けております。また、他校の生徒と関わりながら学ぶことによって、自校の生徒の変容が見られるというお声もいただいています。

3 運営指導委員会・検証会議の記録

一方で、学習コンテンツの配信等につきましては、すぐにポータルサイトに掲載することなど、その場の感動をすぐに生徒へ届けることについて、技術的な部分や人員の問題もあり、十分に対応できていないことが課題であると感じています。

【小村アドバイザー】

ありがとうございます。実際、蓄積して使っていくとなるとタイムラグもあり、蓄積されたものを使おうと思うと、よほど高いモチベーションがないと、先生であろうが生徒であろうが使わないという現実もあると思います。私が経験上、やはり一番シンプルで効果があると思うのは、今のまさにこの Zoom の会議もそうですけれども、リアルタイムにつなぐことだと思ってます。もちろん接続は大変だとか、切れたらどうしようということもあると思いますが、一部実験的にでも結構ですから、生徒同士、あるいは先生同士で、時間を決めて、30 分でも 1 時間でも繋いでみると。これが 2 時間の会議になりますと、目的やアジェンダはどのようなかという話になるんですけども、10 分 15 分でのちょっとした情報交換でもいいと思うので、そうした中からお互いが普段言えなかったことが言えるようになる等、気づきが出てくるということを私自身がもう 3 年くらい先生方と取り組む中で実感していることですので、ぜひお試しください。

また、対生徒というところで申し上げますと、これはどこの自治体でもそうですが、特に長野県での難しさは、地域が距離に比して行き来が難しいと言いますか、遠いところもあると思います。ですから、生徒に対して多様な人との出会いをいかにつくるのかということは本当に大きなテーマだと思っています。そういう意味では、せっかく AL ネットワークがあるわけですから、ぜひ、オンラインだけではなく対面でもそうですが、生徒、先生が一緒になって対話する場なども設けられるといいのではないかと思います。

【村松座長】

ありがとうございました。特に、最後いただきました対話の重要性ということで、大変貴重なご助言をありがとうございました。続きまして、坪谷委員、お願いできますでしょうか。

【坪谷委員】

今日の全ての流れを聞きまして、質実剛健、さすが教育の長野県と、私自身末席に置かせていただいていることが光栄だなと感じました。

この事業の推進にあたりまして、具体的な生徒像というのを決めておられますが、目指す生徒像として、「課題を見抜く力、チームとしての協働」、「新しい価値や社会を、アクションを通じて主体的に創造していく力」、「自分の人生を構想する力」、「信州に根差したアイデンティティと世界に通じる視野、資質、能力」、これらを育てていくことがこの 3 年間のゴールであると理解しております。来年度が最終年度でございますので、各プロジェクトを、具体的にこの 6 つの生徒像の中より 1、2 または 3 つくらい選び、どのゴール設定を目指してこのプロジェクトがあるのかという視点から設計していくことをお考えになられたら良いのではと思います。そして、それら

3 運営指導委員会・検証会議の記録

のプロジェクトをそれぞれの力を伸ばすためにどのような観点から評価をするのかという指標を設定し、その自己評価と客観的な評価の2つについて、プロジェクト終了後に必ずリフレクションしていく。そのリフレクションした中で、例えば5段階評価の中のこの点に関してゴール設定したけど、3.5ぐらいであった場合、5になるためにはどうすればよかったのかについて振り返りを行うことで、この事業の推進が目指す生徒像へのゴールに随分と近づいていくのではないかと感じたところです。どうもありがとうございました。

【村松座長】

ありがとうございました。ゴール設定ですね。何をを目指すのか、改めてご指摘いただきました。続きまして、江幡委員、お願いできますでしょうか。

【江幡委員】

ここまでのお時間、ありがとうございました。最初に、まずは感想ということでございますけれども、上田高校の生徒さんの取組については、実際に価値を届けるというだけではなく、生徒側にも非常に自分たちの体験した意味があった、価値があったという話が出たことは非常にすばらしい取組であったのではないかと思います。同じような取組が来年度以降も続いていくことを期待しております。

本事業について申し上げますと、2年目ということで、1年目の計画に対して2年目の深化というところも進んできているのではないかと思います。3年目に向かうなかで、いくつか活動が挙げられておりましたが、これらを支えるものとして、先生方のコミュニティ作りは以前から申し上げておりますが、非常に大事になってくると思いますので、ぜひ実現をしてほしいと感じております。

一方で、取組の中にいくつか課題もあるかと思って聞いておりました。この点につきましては、ALネットワーク自体の参画を拡大していくということも次年度に向けて話が出ていますが、今回、参加校や生徒に対してはアンケートで色々聞かれているところから、課題等もヒアリングできていると思いますが、ネットワークに参加していない学校に対しては、どうしたら参画してもらえるかについて、県外の活動もちろん大事だと思いますが、県内の高校に対して、どのような環境整備をすればよいかについて、確認していけるとよいのではないかと思います。

もう1つは、現在実施しているオンラインの授業や講座は、非常に価値あるものだとなっていく中で、参加者数を増やしていくために、生徒や保護者の方への本取組の周知についても1歩進んだ形としてまずは、保護者の皆さんにも情報が届くようなことも含め、今後検討していくとさらに良いのではないかと感じたところです。以上でございます。

【村松座長】

ありがとうございました。こちらも重要な点ご指摘いただきました。ありがとうございます。

それでは、最後に杉浦委員、お願いできますでしょうか。

【杉浦委員】

Inspire High の杉浦です。よろしくお願いします。各校の皆さんとは Inspire High 側でメンバーがお世話になっているかもしれません。いつもありがとうございます。

皆さんの発表を伺いまして、一層実践に基づいた取組を積極的にやっていらっしゃるのだなと思ひまして、さすが長野県の高校の皆さんすごいなと思ひ伺っておりました。

また、教育委員会さんがリードされているものであっても、金太郎飴的にならずに、本当に各校の特色が出ていらしたことも素敵だなと思ひおりました。私からは2点あります。1つは事業全体についてと、もう1つは野沢北高校さんにお伺ひしたいことがあります。

1つ目に関しては、おそらく全体感として、皆さんがどのように「探究」を良くしていくかですか、個人と社会のウェルビーイングをどのように創っていくのかという大目標の中でのトライアルを今やっていらっしゃるのかなと思ひおりましたので、実施されている中での仮説であったり、効果検証について、せっかく事業を実施されるのであれば、あってもよいかなと思ひました。

個別にやっていらっしゃるのかもしれませんが、実施事項は全て素晴らしく我々も見えていながらも、実施されている皆様方がこれをやった時にどのような変化が起きるのか、または起こしたいのかという予測をある程度立てた上で、それが起こせたのか起こせなかったのか、起こせなかった場合はどこにボトルネックがあったのかを考えることで次に繋がってくると思ひますので、実施の前の仮説を用意するということであるとか、その指標、例えばこの中でやったら生徒の60%ぐらいが好意的に感じてくれればよいと思ひていれば、(アンケートで)70%の生徒が良いと思ひたら素晴らしい結果なわけですが90%の生徒が良いと思ひてほしいからやるという施策であれば、この70%の良いというアンケート結果では、改善する箇所があるという見立てになると思ひます。そうした各施策の中での目的指標は必要であると思ひました。

2点目の野沢北高校さんにお伺ひしたいことですが、とても建設的に、探究のモデル、4つの方策で行っていらっしゃるようですが、1つ目の「探究の目的の共通認識」を先生方同士で共有するとお話が合ったかと思ひます。体育館に生徒が集合している写真が合ったかと思うのですが、どのようにして探究の目的の共通認識を言語化することができたのか、具体的な取組についてぜひ教えていただきたいです。また、その目的に対して、「Ai Grow (アイ グロウ)」を使ったコンピテンシーがその目的との中でのどのような関係性にあるような形で実施されていらっしゃるのかについて伺ひたいのですが、いかがでしょうか。

【野沢北高校 柳沢校長】

野沢北高校の校長の柳沢です。ご質問ありがとうございます。本校の探究についてですが、先ほどご覧いただいた外部サポーターの皆さんの会議の開催に行き着くまでの流れですが、本校の

3 運営指導委員会・検証会議の記録

探究のスタートは今から 10 年前になります。当時は、どちらかというと叱咤激励して点数を取らせることで大学に入れるというような進路指導を行っておりました。ですが、職員の中から本当にこれでいいのか、もっと大事なものがあるのではないかという声が挙がり、職員会で議論を重ねる中で、育てたい力、生徒に身につけてもらいたい力とは、大学進学を目的とした力ではなく、もっとこういう力なのではないだろうかといった議論の中から探究に取り組んでみようという発想が職員の中から出てきました。これが 10 年前のことでした。

そこから堀川高校など県外視察等をする中で、本校が目指す探究について年々ブラッシュアップを重ねながら、職員が入れ替わってもスタンダードにできる学校としての探究を目指していこうということでテキスト作りに入ります。現在でも約 100 ページにわたるテキストがありますが、これを毎年ブラッシュアップしています。生徒も持っているテキストです。外部サポーターの皆さんはほとんど地域の皆さんで、8～9 割は本校の同窓生の方です。様々な仕事に携わる方々に本校の探究というものを理解してもらいながら、連携コーディネーター、この方も本校の元教諭をやられていた先生ですが、その方をコーディネーターとして本校の目指す探究の像について地域のサポーターの方とも毎年確認をしながらやっています。ですので、目指すところは、これはやはり大学や社会に出て、いろんな困難にあたっても、それを乗り越えていけるような、そういう力を子どもたちにつけさせていきたいという部分がベースにあるかと思います。Ai Grow の部分についてはまた中澤の方から説明させていただきます。

【野沢北高校 中澤教諭】

Ai Grow ですけれども、その身につけたい力というのが 4 つほど指定されています。それらの力が果たしてついたのかというのはなかなか測れないところがあって、具体的に目に見えるものがないかなと考えていた時に Ai Grow の存在を知り、今年から実際に数値で測れるのであれば、生徒の成長の度合いがわかるなということで導入しました。

この Ai Grow の見極めたい力というのは選択できるようになっており、本校が生徒に身につけてもらいたい力が基本的に入っている内容のデータが出るように設定してもらっているので、今は、(画面にグラフを提示しながら) 青いグラフが 4 月に行った結果なんですけど、その下に 1 月に行った結果が出るようになっています。

伸びているところと伸びていないところが目で見てわかるようなシステムになっているので、このデータから本人がどういう点で成長したかというのを見ることができ、本校が目指している力がついたのかどうかというのが確認できると思い導入しました。

【杉浦委員】

ありがとうございます。他者との相対評価というよりは、自己の中での推移というか、自分自身の中での変化を見ていくという形のスコアとして使ってらっしゃるのでしょうか。

【野沢北高校 中澤教諭】

3 者からの評価も反映されるので、多角的な評価が可能です。

【杉浦委員】

360 度的な角度から、なるほど。ありがとうございます。勉強になりました。100 ページのオリジナルテキストも、私も拝見し勉強したいなと思った次第です。本当にありがとうございます。勉強になりました。

【村松座長】

ありがとうございました。先ほど柳沢校長が言いましたね、前半でありました、何のための探究で何を目指すかっていう、先ほどの坪谷様からもゴールの話がありましたけど、これ改めて確認する必要があるなというので、また、今の野沢北高校さん、取組の深掘りも本当にありがとうございました。

せっかくですので、本日出席の先生方からも感想などをいただければと思います。上田染谷丘高校の前嶋先生、いかがでしょうか。

【上田染谷丘高校 前嶋教諭】

今日は非常に勉強になりました。本当にありがとうございます。

本校では、探究活動に対する本校職員の意識も高まってきておりまして、来年度から「総合的な探究の時間」を時間割の中に位置付けて活動をしていくことになりました。本日は、各校の先生方の実践をお聞きして、どこからどう実践すればよいのかと思いましたが、一人で動かすのは大変ですので、他の職員にしっかりと周知をしながら、本校において少しでも探究が盛り上がっていただければと思っています。また今後ともよろしくお願いします。

【村松座長】

ありがとうございました。それではもうお一方、屋代高校の田中先生いかがでしょうか。

【屋代高校 田中教諭】

本日はありがとうございました。本校としては、SSH として研究を進めていく中で、自分も WWL にも参画させていただいていることで、文理融合ではないですが、SSH だけですとコンテンツ自体が理系に偏ってしまうのですが、本日の上田高校の発表もそうですし、他校の取組を確認できることで、理系分野だけにとらわれない文系的な視点からも担当の教員間で考えることができ、とてもありがたいなと思っております。また、本校で取り入れた公欠も松本県ヶ丘高校さんがやられており、本校の職員間で話したところ、「いいね」ということになり実施に至りました。このようなネットワークに参画することで、本校の学びのために、生徒の学びになるようなシステムの整備もかなり進んできているので、大変ありがたいなと思っています。以上になります。

【村松座長】

ありがとうございました。それでは、委員の最後としまして、私の方からです。皆さまのお話を伺いながら、少しまとめさせていただきました。

今日の上田高校の上鹿渡さんの発表も、本当に実践に基づいて素晴らしかったですし、実は今日午前中、屋代高校さんに SSH の関係で行っておりまして、そこでも生徒さんの発表を伺っていました。先週末は短時間でしたが、松本県ケ丘高校さんの生徒さんの探究の発表も伺ったりしまして、どれも非常にレベルが高くなってきたというか、しっかりしたものでしたので非常に感心いたしました。すなわち、これは感覚的なんですけども、(探究の)山の頂上は非常に高くなってきたと感じています。

やはり、次の段階として、この裾野をどれだけ持ち上げられるのかなという、全体の底上げですね、山の底上げ、ここがやはり大きな課題かなと。先端的な生徒さんの取組に加えて、今度はどのように、どれだけ持ち上げられるのかということが大事で、協働して学ぶための仕掛けについて5点ほど書かせていただきました。各校で取り組まれているオンラインの話であったりとか、県ケ丘高校さんからご報告がありました、1,000人近い生徒さんの3高校での取組は、先ほど小村様からも対話の重要性についてのお話がありましたが、やはり、学校の枠を超えて他校の生徒と共に学ぶことで、いろんな学びが加速していくんですね。それは県外だけではなく県内もぜひやっというお話もありました。その中で、事務局からもお話ありました時間割の共通みたいなのが少しずつできてまいりました。こういうことができると、色々なことの共同がやりやすくなると思うんですね。いきなり全部は無理にしても、可能なところで、ぜひこの時間割を共通する中でいろんなことを探っていくことができればと思いました。

仕組みの整備ということですね。午前中、屋代高校さんにお伺いした時に、これはいいなと思ったのですが、単位制を行っているということだけでなく、私どもの大学で先取り履修を行っているのですが、修得した単位は本学に入学してから大学の単位になるっていうんですけども、それを屋代高校さんでは高校の単位の中にも組み入れ、増加単位になるんですけども、こうして高校段階でも認定してもらおうとか。あるいは公欠ですね、いわゆるスポーツの大会によるものがあるのですが、外部で発表したり、探究の調査活動等で3日まで公欠として認めていただいているようです。もしかしたら他の高校さんでもやられてるかもしれませんが、こうした探究の仕組みの整備は非常に必要であり、より重要であると思います。

本日お話がありました外部人材の方や、コーディネーターの方々との連携は非常に重要ですし、これをやるための予算的な裏付けも必要なことかと思います。

実践の資産、つまりこれまでの実践が積み重なってきました。先ほど野沢北高校から10年間の蓄積についてのお話もありました。また、松本県ケ丘高校の探究アーカイブアプリのお話もありましたが、こうした「実践の知」がさらに共有されていくと非常に有益なんだろうと思います。その時に、著作権や肖像権といった点については、多分これから進めていく上で対応していくこ

3 運営指導委員会・検証会議の記録

とが必要になるかと思います。例えば実施機関の方で掲載に関する承諾の共通のフォーマットみたいなものを作って、定型的にこうしたことに対するハードルを下げて、お互いに共有しやすくするなど、ガイドラインみたいなものを作っておくというのも一つの考えかと思いました。

最後にありましたこの原点の確認。実践が進めば進むほど、改めて目指すべきところは何かという、原点チェックというのは非常に重要だということを、今日、皆様のお話も聞いていて感じたところであります。

私の方は以上であります。本当にたくさん学ばせていただき、ありがとうございました。

閉会行事

- ・ 学びの改革支援課 臼井課長から御礼の挨拶
- ・ 事務連絡

令和6年度長野県 WVL コンソーシアム構築支援事業

「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」検証会議

期日 令和7年2月28日（金）13時から17時まで

場所 教育委員室（長野県庁本館棟8階）

参加者

○検証委員 清水 唯一朗 氏（慶應義塾大学総合政策学部 教授）

○実施機関 長野県教育委員会 学びの改革支援課 教育幹兼高校教育指導係長 小口 雄策
指導主事 高野 英美、城取 恭子

内容

1 検証資料説明（実施機関）

2 事業推進に係る検証及び評価と課題について指導・助言（清水検証委員）

【今年度の事業評価】

(1) 計画の進捗と全県展開への取組

- ・3年間の計画の2年目として、順調に展開されている。担当各位に深く敬意を表したい。
- ・全県への拡大に向けた動きが大きく進んでおり、来年度のさらなる普及が期待される。
- ・ポータルサイトの整備が進み、生徒の探究活動へのアクセスが向上している。
- ・アンケート結果を反映して、デザイン面でもユーザビリティが考慮されている。

(2) 探究スキルの強化と指導の充実

- ・探究プロセスに関する講義動画等が整備され、高校生の理解促進に寄与している。
- ・総合的な探究の時間の時間割共通化に向けた取組は実現を期待したい。
- ・小論文やプレゼンテーションに関する講座等、学びのアウトプットに関する学習機会が提供されている点が評価できる。
- ・一方、生徒自身が探究基礎スキルの必要性を認識する前の段階では、講義の受講希望が低い傾向が見られる。
- ・生徒の学習進度に応じて、生徒自身が必要性を感じた時に必要な学びにアクセスできるような仕組みづくりが有効と考えられる。
- ・「探究」とは高校入学後、友人関係、部活動、教科学習等で困難に直面した生徒にとって、次のステップを掴むための「セカンドチャンス」だと認識。より一層の充実を期待。

(3) 教員の「ヨコ」連携の強化

- ・教員同士の情報共有や協力体制が進展し、「探究」担当者の孤立感の軽減が図られている。
- ・グループチャットの活用により、各校の教員の知見が蓄積され、今後の参考資料としても活用されていくことを期待。これは県の教育にとって長期的な基盤となり得る要素。

【課題と次年度に向けた提案】

(1) ポータルサイトの認知度とアクセス向上

- ・一部の生徒がサイトを活用していないため、アクセス環境の整備が必要。

- ・「検索がしにくい」との意見も散見される。

(提案) ポータルサイトの利用促進に向けた工夫：サイトへのアクセシビリティを高めるために、生徒の個人端末デスクトップにショートカットを設置。

(提案) 学習動画投稿時のタグ付け機能設定：探究テーマごとに検索しやすくなるよう、「探究の方法」「インタビュー技法」などのカテゴリを設定し、タグ付けすることにより直感的に利用できる環境を整備。

(2) オンライン合同授業の課題

- ・オンライン合同授業の意義「発見的作用」の見出し方。学校内の多様性の欠如の克服。
- ・単発の合同授業にも発見的作用の意義があることへの理解。
- ・授業を意義あるものにするためには、テーマ設定に相互性を活用した工夫が必要。

(提案) 合同授業のテーマ設定の工夫：異なる専門性を持つ生徒同士が議論できるテーマを設定し、多様な視点を養う。普通科と専門学科の生徒同士の学び合い。

(例)「環境問題に対する工学的アプローチ」「農業と最新技術の融合」

(3) オンラインを活用した国際交流の進め方

- ・交流相手との共通テーマを設定し、英語能力に依存しない議論を推奨。

(提案) 各国・各地域のポジションを活かした協働学習：「国が独立するとはどういうことか」などの「哲学的」な問いについて考える等。

(4) オンライン授業の評価と単位認定

- ・オンデマンド授業の拡充と単位認定の仕組みづくりは教員不足、教員の負担軽減のためにも、東西南北に広い長野県にとって、今後検討が必要なテーマ。

(提案) 非同期型オンライン授業：共通の課題を学習プラットフォームにアップロードすることにより、時差や時間割の違いがあっても他校の生徒との協働学習が可能になる。

(提案) オンデマンド教材の活用：内容を標準化できる教科、特に「教えるべきことが決まっている」、「教員によって教える内容に差が出てはならない単元」等については、授業をオンデマンド化し、学習評価をすることは可能。(実際に本学ではマイクロ・マクロ経済学ではこの方法を取り入れている。)但し、オンデマンド化する授業と対話を重視する授業の判断は慎重に。

(5) 県内すべての地域の高校生に対する質の高い授業保証

- ・質の高い授業を学習動画として蓄積し、どの地域の生徒も視聴可能にすることで個別最適な学習環境の整備につなげる。

(提案) 授業配信センターの整備：専門性の高い授業や優れた講師の授業をオンラインで提供するなど、配信拠点を整備するのはどうか。

(6) 卒業生ネットワークの構築

- ・探究活動の成果の蓄積と生徒による「学びと経験の還元」の促進。

(提案) 卒業生とのネットワークを活用：母校での講演機会の提供、学校の枠を超えた在校生とオンライン交流会等による後輩の探究活動の支援、ロールモデルとしての活躍。

(提案) 信州つばさプロジェクト参加生徒の組織化：「恩送り（ペイフォワード）」の一環として、後輩への支援を求める。



実施機関

長野県教育委員会事務局学びの改革支援課

〒380-8570 長野県長野市大字南長野字幅下 692-2

TEL 026-235-7435 FAX 026-235-7495

E-mail: kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp